
サヨナラが言えない

安路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヨナラが言えない

【Nコード】

N0391D

【作者名】

安路

【あらすじ】

ネットサークルで知り合った男性と恋に落ちた麻衣子。不倫恋愛でも好きになったらもう止まらない。だが嫉妬と不安が二人の間に亀裂をつくっていき、麻衣子の心は乱れていく。だが麻衣子はその恋を終わりにすることができない。そして……

序章 ― キミへ

元気ですか？

たぶん元気で、相変わらずゴルフに釣りにとアクティブに遊びまわってることでしょう。

仕事は順調ですか？

自営だから、仕事にも波があるでしょうが、持ち前の明るさと人づきあいの良さでカバーしながら、うまくやりこなしていると思います。

でも八方美人のところがあって、つついいい顔して断れず、後で後悔なんていることがあるでしょ。意外と気が小さいところあるからなあ。

お酒も毎日、飲んでるんでしょうね。少しは自重しないと、アル中

になっちゃっしょ

って言うか、本当はもうアル中だったりして（笑）それくらい飲んでるよね。

お酒が大好きだから、やめられないし、やめようとも思わないですよ。

でも酔っ払ってそこらで寝ちゃったりすると、また怪我するから気をつけて。

それに酔ってサウナに行くのも、危ないから、ほどほどにね。

お父さんの二の舞になるのだけは、やめないと。

サークルのコンペはまだ続いていますか？

あの掲示板も最後にみたのは5月。なんだか前ほど活発じゃなかったから

そろそろ閉鎖かとも思う。

近況を知りたくなるときがあつて、覗きたい欲求が起こることがあるけれど

それを抑えて、私は見ないようにしています。

なぜかつて？だつてもう2度と会わないし、連絡をとらないと決めた以上

接点を断ち切ろうと思つてるからね。

そう、メアドも携帯の番号も消しちゃったよ。

もちろん自分が連絡を取ろうとしたら、できないことはないよ。

でもない。それが私のプライドでもあり、自分に課したルール。

それでも時折、昔のことがよぎる。

不思議だね。思い出は楽しかったことだけ。苦しかった日々や、

投げつけられた悲しい言葉たちは、だんだん遠くになってきた。

浮かぶのはゴルフウェアを着て、バイザーをかぶり、私を見て、やさしく微笑む姿だけだよ。

きっと今顔を合わせても、また別人のように感じるだろうね。

私の心の中にいるキミは、今のキミと違うから。

前に思ったことがある。

いつそのことキミが死んじゃってたらいいのにな。

死んだ人を恋しく想うことは許される気がする。

でも別れた人をずっと心に持っているなんて辛すぎるかなって。

あれから、何人かの男性と出会いはあったよ。

付き合っつてといわれた人もいる。でもだめだったね。

好きになれる人はいなかったし、キミほどぐいぐい押してきた人もいない。

どうしてかな。比べちゃうんだ。

キミだったら、こうするかな？こう言うかな？って。

私がこんなことを言ったら、こう返してくるだろうなって。

自分が理想とする男性がキミになってるのかもしれない。

でもそれはきつと自分で勝手に具象化した偶像で、

真実のキミとはもうかけ離れたものになっているのだと思う。

ちよつとヤバイね。

どんな男性と出会っつても、恋愛に陥ることがないような気がしてき
た。

キミが最後の男性！？ それは予想外（笑）ありえないだろうけど。

あの頃は毎日のように会って、それでも足らなかった。

今、もし会って話すことってあるかな？考えても見つからない。

心が近く寄り添ってるときは、時間を共有してたから、身近に思えたし、

これといった話がなくても、十分すぎるほど楽しかった。

でも今は何も話すことが見つからない。

きっとキミも同じでしょう。

最後のメールで「近々飲みに行こう」という社交辞令があったけど、本当に飲みに行くことになったら、困ったでしょう。

何を話したらいいか、話題にも困るだろうし、そもそも会うことに

何の意味もないんだから。

2年ってやっぱり長いね。

付き合っていた時間より、別れてからの方が長いんだから、しょうがないか。

「去るもの日々に疎し」 疎まれてたらちょっと悲しいヨ……

今は彼女いるの？

どんな相手かは聞かないよ。

ただ私のこと、アレコレ言ってなきやいいけどと思うだけ。

だってキミって正直に元カノのこととかペラペラしゃべってたじゃ

ない。

私のことをおもしろおかしく話されてたらやだなあって。

そんな人ではないとは思っけどね。

でも年上の女性と付き合ってたってことで、見直されてたりして
笑)

彼女のこと大事にしてね。私が言うことでもないけど。

キミは既婚者だから、恋愛してもフリンになっちゃっ。

どんな恋愛の形であれ、二人が幸せな気持ちで付き合ったってほ
しい。

キミが今の人生を幸せにイキイキと楽しく送ってることを、心から

望みます。

本当だよ。イヤミにとらないでよー

だってキミはもう私と付き合っていた頃のキミではないから。

私が好きだったキミでもない。

周りの人の幸せを思うように、ただそう思うだけ。

私のことは聞かないで。近況報告なんてしたくない。

私も生活してるし、それなりに楽しいこともあるし、ちゃんと生きてるよ。

これ以上言うこともないね。じゃあ、

サヨナラ

た。P S ・サヨナラをあのときちゃんと言えなかったけど、やっと言え

1・ネットへの入り口

麻衣子はPCの前にもう1時間ほど座りっぱなしだった。

画面上にはいくつものサークルの名前とその活動内容がずらりと並んでいる。

ゴルフのサークルである。

仕事は4ヶ月前に辞めてしまった。10年間勤めた会社。全く未練がなかったかというところ

そうでもない。給料も待遇も麻衣子の35歳という年齢を考えると悪くはなかった。

ポジションもマネージャー職、部下も数人いる。

ただ外資系である以上、仕事の責任と結果については厳しい評価が待っていた。

女性だからといって甘い世界ではない。

そこそこの数字を出し、自分の能力を常にアピールし続けなければいけない。

麻衣子はそれほどアクティブな方ではない。普通のサラリーマンの家庭に育ち、

普通すぎるほどの平凡な生活の中でおっとり育てられてきた。

そついう要素は性格のどこかしらに影響を与えている。

素直である、でも競争は苦手。人と争ったりすることは彼女の人生には皆無だった。

人を押しのける強引さも持ち合わせていない。

そんな彼女が切磋琢磨する外資系企業に長く勤めることは
周りと折り合わないことで、心の中に次第に鬱積したものを積んで
いった。

そんな矢先に麻衣子が所属するプロジェクトの中止という事態があり
それを機に、いっばいに膨れ上がっていた不満と疲れが爆発した麻
衣子は
勢いで会社を退職したのだった。

そのときは爽快だった。辞めると1度決めると、自分には新しい生
活が待っている。

そこには「自由」が手を伸ばして麻衣子を待ち受けていた。

麻衣子には夫がいる。同じように外資系企業に勤めるサラリーマン。
長く海外生活を経験しているせいか、個人主義的なところがあるも
のの
麻衣子に干渉することはなく、生活するパートナーとしては申し分
はなかった。

子供のいない二人はディンクスとしてきままな生活を送っていた。

収入的にも麻衣子が専業主婦になるのに問題はなかった。

麻衣子自身、しばらくは自由な生活を味わって、また働きたくなっ
たら

そのとき考えようという流動的な考えだった。

自由な生活 | 会社を辞めてしばらくは家の中で過ごすことも楽
しかった。

ゆったりとした朝食、テレビのワイドショー、

学生時代の友人で同じ専業主婦とのランチ、ちょっと手の凝った夕食のメニュー

時間はたっぷりとある。

だがそんな風に時間を費やしても、まだ時間には余裕があった。

掃除など毎日の必要もない。家事をこなしても1日の半分以上は予定のない時間があった。

そこで思いついたのがゴルフだった。

以前から年に数回、夫やその友人たちとゴルフをする機会があった。そのときはスコアなど気にすることなく、ゴルフは社交の手段であり、コースは自然に触れながら優雅に過ごす場所であった。

だがヒマな時間に練習場に通うにつれて、もっとラウンドしたい、もっとうまくなりたいという気持ちが芽生えてきた。

だがゴルフは1人でできるスポーツではない。最低でも二人そろわないとコースには出れない。

麻衣子の友人の中に平日の昼間、ラウンドの付き合いをしてくれる者はいなかった。

「ゴルフ仲間を見つけないしかない」

だがどうやって見つけるのだろうか？

ゴルフのレッスンスクールでも行けば見つかるだろうか？

3ヶ月通ってみただけで、平日の午前中にくるスクール生は60歳

を過ぎたお年寄り、

また数人でグループが出来上がっている中年のオバサマ軍団。
麻衣子くらいの年齢の女性は見当たらない。

確かに、麻衣子の年ごろの女性は、子供がいれば、子育て、たとえば手がからない年齢に達したといっても教育費やローンで余裕がなかったり

一般的にはそういう女性が多いだろう。

中には麻衣子のように子供もいない主婦もいるかもしれないが、そのスクールには麻衣子と同様な女性はいなかった。

「どうすればいいのかなあ〜」

思いあぐねていた。そのときネットで探すというのは!?

というひらめきが。

これだけネットが広がって情報社会になってるんだから、もしかしたら

そういう場があるかもしれない。

そう思うと、麻衣子は検索を始めた。

ゴルフ、サークル、仲間、それらを検索コードに入れてヒットした
ものの中に

サークルを主体にしたサイトを発見した。

全国ネットだから何百というサークルがその中に入った。

あまりの多さに唾然としながら、ひとつひとつ、ものめずらしさもあつてチェックしていく。

しかしその作業はあまりに時間もかかり、サークルを勧誘する趣旨など

どこも似たり寄ったり、それほど大差ないように感じた。

その中で「女性限定」のサークルがいくつもあった。つまりサークルのメンバーは全部女性というわけだ。

麻衣子はこういふネットで知り合う人との交流には少しばかり躊躇があった。

どんな人がいるかわからない、ネット上ではハンドルネームを使って本名を明かさない。

ということは自分を詐称したり、匿名という立場で相手を不快に思わせる行動をとることもあるのではないかと警戒していた。

でも女性ばかりであれば、それほど変な人もいないだろうし。

そんな考えから、ひとつのサークルの入会案内のキーをクリックした。

2 - 女性サークル

女性限定のサークル。

メンバーでなければ掲示板を覗くことができない。そういった面でもプロテクトされていたので、麻衣子は安心していった。

入会申請が許可されて、初めて除く掲示板。メンバー表。

4、50人の人が登録されている。年齢は30代から40代。麻衣子の希望にも合っている。

掲示板はいくつかのカテゴリーに分かれていた。

自己紹介、ラウンドの誘い、ゴルフのルール、雑談コーナー、月例の案内。

ワクワクしながら一つ一つ覗いてみた。

過去にいくつかラウンド企画もあがっている。

ラウンド後の感想では活発に意見交換が行われていた。

どれも「楽しかった」という文章ばかりが飛び交っていて読んでいる麻衣子の心も跳ね上がった。

少し緊張しながら、麻衣子は自己紹介の文章を掲示板に入れてみた。

「年齢は30代半ばです。仕事を辞めて今は主婦業をやっています。スコアは110前後でまだへたですが、楽しみながら上達したいと

思っています。
女性同士でラウンドする機会がないので、とても楽しみにしています。
よろしく願います」

そうするとすぐに管理人から、リコメが入った。

「ようこそ〜これからラウンドを楽しみましょうね」という暖かい文章。

麻衣子はホッとすると同時に、これからの期待で胸が膨らんでいった。

でも麻衣子はこのサークルでは新人。

いきなりラウンドの誘いなどかけることはためらわれた。

しばらく様子を見ながら、機会を見て、参加しようと心に決めた。

夫にはネットのサークルに入ったことを告げていた。

凡庸な夫はコンピューターに疎く、ネットにアクセスすることすら興味がなかったのだ。

麻衣子の行動にも関心なく、一言「ふ〜ん」といった言葉が返ってきただけだった。

それから毎日、PCを開き、サークルの掲示板を覗くことが日課になった。

そうして2ヶ月後、麻衣子は初めてサークルのラウンド企画に参加することになった。

2組での女子ばかりのラウンド
不安と緊張とそして期待をもって参加したゴルフだった。

しかし帰り道、麻衣子は少し首をかしげることとなった。

管理人は麻衣子より少し年上の女性。掲示板で見る限り、人当たりもよく

面倒見も良さそうな印象を与えていた。

組み合わせでは1組は管理人とその取り巻きの女性といった格好だった。

そしてもう2組は麻衣子を含め、そのサークルでは「新人」たち。

麻衣子の組にはラウンド経験がほとんどない女性が二人参加していた。

麻衣子だってそれほどうまくない。人の面倒など見れるほど余裕がないのだが

サークルというものはそういうこともあるだろう、と楽観していた。

しかし実際にはラウンド後はぐったりだった。

ほとんど初心者なのでボールにまず当たらない、ルールは知らない、せめて敏速にプレーをするのであれば進行もスムーズだが、クラブ1本もってゆったりと歩いている。

そしてカートが止まるたびにクラブの交換をする。

それだけで人の倍以上、時間がかかってしまう。
とうとうマーシャルに「急いでください」と叱れる羽目になってしまった。

でも本人たちは気にするでもなく、逆の文句を言われたと不機嫌に

なっていた。

管理人を含むもう一組は、前からの仲間で仲が良いのだろう。そしてゴルフのレベルも麻衣子よりは上手だった。

おしゃべりしながら、楽しそうにラウンドしている姿はつらやましかったが

どうにもスコアレベルを考えれば組み合わせが悪すぎる。

一緒に回っていた女性が麻衣子に言った。

「ねえ、私たちに初心者二人押し付けるなんてひどいわよね〜」

その女性はカオリと名乗った。サークルに入ってから半年。ラウンド参加は2度目と言った。

「でもサークルでは初心者歓迎って書いてたし、しょうがないですよね」

「そうだけど、こんなのだったら私こなかったわ」

カオリはイライラしたように言った。

「それに、あの管理人のみきさん、いつもそうだけど、自分にハイハイ言う人しか

一緒に組まないのよね」

「そうなんですか？」

「そう、女王様なのよ。なんでも仕切りたがるし、パットの時自分のはずぐOKだして

他の人が自分より上手だとすると、絶対OKしないの。それに自分よりスコアが良かったりすると機嫌が悪くなって大変。みんな気を使ってるの」

「一緒にまわったこと、あるんですか？」

「あるある、もう大変。それにクラブハウスで食事がまずいって前に文句まで言い出して。」

そのコースを手配した人なんか、かわいそうなくらいしょげてたわ」

「そんなことがあったんですか。知りませんでした」

「気をつけてね。ところで麻衣子さんはどこに住んでるの？」

「私は渋谷です」

「あらっ！じゃあ、私、世田谷だから近くじゃない？今度、一緒に練習しましょう」

「ええ、いいですよ」

カオリは麻衣子と同じ年だった。そして同じ主婦。子供がいないことも同じ状況。

麻衣子はゴルフ友達ができたことを単純に喜んだ。

だがカオリがこの後、麻衣子に多大な影響を与えることとなるのは、このときは

思いもよらなかった。

3 - カオリ

それからしばしば麻衣子はカオリからの電話やメールを受け取るようになった。

さっと朝の家事をすませ、新聞を読んでいると、メールの着信音。

「おはよう〜今日、時間あったらランチでもどう?」

明るい声、人なつっこいまなざし。

女も30過ぎて、友達なんてなかなかできやしない。

会社の同僚はグチをこぼしあったりするストレスを共有する仲間ではあるが
友達というと首を傾げてしまう。

でもカオリとは利害関係もなくゴルフという趣味を介して知り合った人。

カオリはゴルフ歴も長いのでいろんなことを知っている。

「キャディってのは・・・」と始まって、どんなキャディの質が優秀か

どこのコースが素晴らしいか、とくどくと語る。

その代わりに自分が納得のいかないキャディのサービスを受けたり、コースのメンテナンスが悪かったりすると、プレー代が安くても、手厳しい批評を下す。

クラブに詳しくない麻衣子のために自分のクラブを貸し出す。

「いいのいいの、私は。他にもあるから。もし使ってみて気に入らなければいいじゃない？」

実際に使ってみないとクラブってわからないからね」

ウェアを買いに行くと、麻衣子のために見立ててくれる。機能的なもの、ファッショナブルなもの、ひとつひとつカオリはどこがいいか、悪いか的確に判断していく。

麻衣子はゴルフの経験が浅いので、そんな風にかまってくるカオリの親切ぶりを単純に受け止めていた。

ジャズダンス、ゴルフ、アートフラワーと忙しい日々を送ってるカオリは、自分のスケジュールの合間を見て、麻衣子を誘う。

麻衣子その日はだめだからと、別の日を提案すると、にべもなく、「あっ、その日は私ダメなの。日しか空いてないの」と一方的にぴしゃりと言う。

ひどく自分本位な物言いでもあるが、見方によってははっきりしていて小気味いいかもしれない。

麻衣子に固執するかのようになり、毎日のように電話してくるかと思ったら

ふいにそれが途絶えることもある。

学生時代の女友達というのはべったりだった。相手の行動を1から10まで把握していることが親友だと思っていた。

だがやはり大人になってできる友達というのは、ある程度、距離感が自然とあるものだと麻衣子は思っていた。

だからカオリが麻衣子に寄り添ってくるようなしぐさを見せながらでも、麻衣子がちょっと引く態度をとると、あっさりと身をを翻すのだろう。

カオリはお互いに所属しているサークルの活動内容には不満が多かった。

どうも管理人はそのサークルで見つけたお仲間の女性たちとゴルフはいつてるものものサークルとしての活動はおざなりになっていた。

多分、ラウンド仲間を見つかる手段としてはじめたサークル。

仲間ができたなら、その仲間と内内で相談してゴルフに行けばいい。わざわざネット上で仲間を募集することもない。

そんなことからだろうか。活動はぱったりと静かになってしまった。せっかく入ったサークルがこんな風では期待はずれもいいとこだ。

麻衣子はこうなったらまた別のサークルを探すしかないと思うようになった。

カオリに相談するところ返された。

「私も思ったんだけど、初心者の女性は上手な人と回るほうがいいのよ。女性ばかりで気楽なんて、勘違いもいいところ。ある程度回れるようになって言うて欲しいわ」

カオリは辛らつだった。

「多分あの人たちはゴルフを社交の一部くらいにしか考えてないのよ。みんな上達したいって言うてるけど、だったら上手な人と回らなくちゃ」

カオリはゴルフを始めたときからコーチについて習っていた。もう5年になるという。

「ねえ、麻衣子さん、どこかサークル探してみてよ。もし入ってみて良さそうだったら私を誘って、ねっ」

「そうねえ……」

「男性がいてもいいじゃない。私が入れば平気でしょ。それに麻衣子さんは車の運転も上手だから自分でどこでもいけるから問題もないし」

「男性と回るほうが楽でいいわよ」私、本当につくづくそう感じた」

カオリは叩き込むように麻衣子を説得した。

その次の週、麻衣子はひとつのサークルに入会申請をすることになる。

4 - 出会い

そのサークルは男女混合であったが、入ってみると、麻衣子のよう
な主婦もあり
人数も30人と少なく、こじんまりとした雰囲気をかもし出してい
た。

まだ発足したばかりのようで、掲示板にもそれほどなれなれしい書
き込みはない。
だが誰かが何か書くと、必ずそれに対して、誰かがコメントを返す
ようなそういう
律儀なところも見れた。

麻衣子が入会したことで自己紹介をすると、早速メンバーから大歓
迎をあらわすコメントがきた。

そういう風に暖かく接されると、勇気を出して入会してよかったと
心から思う。

カオリに言っていると、「じゃあ、今度、ラウンド会に参加してみても」と
催促された。

ちょうど1カ月後に呼びかけが掲示板に載っていた。

女性も3人参加するということなので、麻衣子は思い切って行って
見ることにした。

掲示板に麻衣子が参加表明をすると、幹事である「ハル」という男
性がコメントをしてきた。

麻衣子はそのサークルでハンドルネームとして「マイ」を使っていた。

「マイさん、1人で運転してくるんですか？大丈夫ですか？」

「多分、大丈夫だと思います」

「でもインター降りてからかなりありますから、SAで待ち合わせしましょう。リンさんも
そうする予定ですから」

リンさんという参加する女性もSAで待ち合わせすると言う。

麻衣子は同意した。

「ありがとうございます。初めての参加で緊張します。まだへたくそなのでご迷惑をおかけすると思いますがよろしく願います」
するとハルはすぐそこにコメントをつけてきた。

「大丈夫ですよ。みんな良い人ですから。意地悪なのはオレくらいだから」(笑)

麻衣子は掲示板に慣れていなかったたので(笑)の意味が分からなかった。

本気なのか冗談なのかよく分からない文面……麻衣子は戸惑った。

会ったこともない人なのに、この気安さみたいな文章って何？というのが印象だった。

でも前からのスレッドでのコメントを見ていくと、ハルという男性はそういう感じで

誰かをちやかしたり、冗談をいったりしていた。だからネットのやりとり慣れている人

なのかなと麻衣子は思った。

でもゴルフに対してはまじめに取り組んでいるのか、誰かがクラブのことで悩みを相談すると、真剣に回答をしている。

ハндеは11とある。上手な人なんだ。麻衣子の周りには楽しいゴルフをする人は多いけれど

競技志向の者はいない。

ハルはアマチュアの競技にも興味をもっているらしく、アスリート志向なんだろうと思った。

当日、麻衣子は待ち合わせのサービスエリアに車を停めたとき、麻衣子はひどく緊張している自分に気付いた。

「そりゃそうだよなあ、知らない人と会うんだもん」

5分前だったので、その前に飲み物でも買おうと、売店に入った。

お勘定を済ませて、ドアをでるときに入れ替わりに入ってきた男性と目が合った。

そのときのことを麻衣子はよく覚えている。

姿形ではない。どんな服装だったのかはつきりと覚えていない。

ただ印象だけなのに、その男性と目が合った瞬間、すっと胸の中に入ってきたものがあった。

「この人……」

会ったこともないのに直感した。「ハルさんだ」

彼は麻衣子の横を素通りして、飲み物が並んでいる棚に向かっていく。

そこに「ハルさん」と呼びかける声があった。

振り返ると1人の女性が笑みを浮かべて手を振っている。

「おおっ！おはよう！」

快活な声が返ってきた。

その様子をそばでじっと見つめて立ちすくんでいた麻衣子に気が付き、女性が

「あれっもしかしてマイさん？」と声をかけてきた。

「はい、そうです。リンさんですよ。今日はよろしくお願いします」

麻衣子はおじぎをした。

飲み物を手にしてハルが近寄ってきた。

「ハルです。はじめまして」

かるくお辞儀をする。はぎれの良い声。きびきびしている体育会系の動作。

「マイです。今日はよろしくお願いします」

「そんなに緊張しなくて大丈夫ですよ。楽しいラウンドにしましょう」

ハルはにこつと笑った。

短い髪、がっちりとした体格。姿勢のよい立ち姿。

麻衣子は少しうれしくなった。

麻衣子はハルという男性に対して、それまで何のイメージも抱いていなかった。

だが会ってみると、人目でこの人だと思つような感覚。

いや、この人であつてほしいという願望が実現したような感覚。

想像していて実際に会うとがっかりすることが多いことがある中、この印象は

麻衣子の心に深く刻まれた。

5 - どんな人？

その日は天気も晴れ渡り、11月とはいえ、それほど寒くもなくゴルフ日和とっていい日だった。

女性は麻衣子を含めて4人だったが、女性ばかりではなく、男性を混ぜた組み合わせになっていた。

年恰好もばらばらではあるが、ゴルフが好きといった共通の趣味をもった者同士。

ゴルフの話題を通して、すぐに打ち解けていった。

ハルは幹事という役目だけではなく、人を引っ張っていく要素を持ち合わせているのか

ハルが何か話し出すと、みんな雑談をやめて耳を傾ける。

「今日はニアピンとドラコンはやりましょう」

そう切り出すとルールやコースの説明をしていた。

また新しいクラブを持参した人のところにいつて、「おお、カッコイイなあ。このシャフトってどう？」とクラブ談義を始めたり、初めての参加である麻衣子や他の人に近寄ってくる

「楽しくやりましょう」と微笑みかけてくる。

そんなハルを中心にしたコンペは和やかに進行した。

麻衣子は緊張するタイプなので、最初のホールは林に打ち込み、そこからなかなか球を出すことができず、途方にくれるスタートになってしまったが、一緒に回った年配の女性が、さりげなく麻衣子に付いて、アドバイスをしてくれたり、他のメンバーも「気にしないで、リラックスね」と声をかけてくれた。

女性ばかりのサークルで回ったときは、同組のほかの人たちが気になって仕方なかったが、この中では麻衣子が一番へただったので、自分のことだけに集中していればいいので、その点では楽だった。

「そっか、上手な人と回ると楽だってカオリさんが言ってたけど、そういうことだったんだ」

ラウンド後はレストランでお茶を飲みながら打ち上げとなった。

そこでもハルは中心だった。

「今度、ちゃんとコンペやるっよ」

「いいね。どこにしようか」

「そっだなあ……か、×××か……」

「ニアピン、ドラゴン、新ペリか他にもおもしろいことやるっよ」

コースの名前がいくつか挙がる。

コンペのルールなど麻衣子はあまり詳しくないので黙っていた。

「マイさんは普段どこのコースが一番良くいくんですか？」

急に質問が投げかけられた。

「ええと・・・主人が　　のメンバーなのでそこにいくことが多いかな・・・」

「ええっ、あそこいいところじゃないですかっ！オレも行ってみたいなあ」

ハルの目が輝いていた。

麻衣子は心の中で「余計なことを言ってしまった」と後悔した。

麻衣子は女性限定のサークルに入ったことは夫に告げていたが、男性混合のサークルの話は一切していなかった。

知らない男性とゴルフをするということを告げることはためらわれたからだ。

「ハルさん、あそこって高級なところだから、だめだよ、国産のあんなボロい車でいっちゃ」

他の男性がからかった。

「いいよいいよ、オレ、ベンツ買うから」とハルが笑いながら言う。

周りがどっとはじけるように笑った。

そういえば、今日は平日。

ハルといい、他の男性たちも一体どんな仕事をしているのだろうか？
そんな疑問が麻衣子の心の中で湧き上がった。

サラリーマン？ 自営業？

ハルは月に6〜8回くらいゴルフにいつているようだ。土日を含めてにしても

平日に自由にゴルフできるといふことは会社勤めじゃないのだろうか。

その疑問は次のラウンドのときに解明した。

6 - 思いがけなく

それから次に参加したラウンドでは、ハルは仕事の都合がつかず不参加だった。

相変わらず掲示板では活発なやりとりが行われていた。

「ハルさん、仕事っていつてるけど本当は飲んだくれていたんじゃないの〜（笑）」

「見抜かれましたか！ここ数日、接待続きで家に帰れず、別宅泊まりです。といっても

サウナかカプセルホテルですが（笑）」

「次のラウンドではハルさんからハンデもらわないと」

「いいよお〜その代わりに、負けたら、打ち上げの飲み代よろしく〜（笑）」

そんなやりとりが続く。麻衣子はなかなかそこに踏み込めずにいた。

掲示板というものになれないせいもあるが、つい最近知り合ったばかりの人たちと

軽口をたたくにはためらいもあった。

そんなある日、ハルが誘いをかけたラウンドの日程が合わなかったので、

「行ってみたいコースですが、日程が合わないので残念です。皆さま

ん楽しんでくださいね」

と麻衣子は書いてみた。すると

「うわ〜残念だなあ。ドタ参でもいいですよ。当日ロビーでお待ちしてます（笑）」と
ハルが返してきた。

なんか調子いい人と思いなながらも、麻衣子はいよいよ口元がゆるむのを抑えられなかった。

新しい年が明けて、サークルのコンペが行われた。

5組くらい集まったコンペだった。

少し肌寒く、北風に身を震わせる一日だった。

3度目の参加なので、それほど緊張することもなかったのだが、この日は寒さで体が堅くなっているせいもあり、麻衣子のショットはどれも無残なものだった。

こうなると飛ばそうとか、うまく当てようという意識が空回りばかりして

状況はますます悪化していく。

年配の男性が一緒の組にいた。技術や経験もあり自信があるのか、途中から麻衣子に
べったりくっついて麻衣子にあれこれ指導を始めた。

アドレスをすると前にその男性がたち、麻衣子のフォームに一言をいう。

スイングをした後、こうしたほうがいいとアドバイスをする。

それはもちろん自分よりヘタな者へのいたわりと親切からでた行為ではあるだろうが

まるで教官のようにじっと見据えられると、逆に萎縮してしまう。

リラックスどころか、麻衣子の調子は下がりっぱなしだった。

冷たくなった手に息を吹きかけながら、うんざりした気持ちが麻衣子を包む。

「早く家に帰りたい」そんな心境だった。

ラウンド後にお茶を飲みながら、皆、結果に一喜一憂したり、誰かをからかったり

優勝者を褒め称えたり、そんな和気藹々した中で、ひとりぽつんと取り残されたように

麻衣子は押し黙っていた。

ハルは打ち上げをやっている部屋の片隅で、携帯電話で誰かと話をしていた。

パタンと音がして携帯をたたむ音がするとハルは麻衣子に近寄ってきた。

「マイさん、申し訳ないんですけど、帰り都内まで乗せていってもらえませんか？」

サークルはハルも含めて地元の間が多かった。4、5人ほど都内在住の者もいたが
このとき都内から参加しているのは麻衣子1人だった。

「えっ！？どうしたんですか？」

「ちょっと仕事でトラブルがあつたみたいで、行かないけません。おーい、オレのキャディバッグ家まで持っていてくれる？
帰り道だろ？」

と1人の男性に声をかけた。

麻衣子はしばらく逡巡した。沈んでいた気持ちから1人で早く家に帰りたいところなのに
他人を隣に乗せなければいけない。

誰かが一緒だとそれなりに会話をしなくてはいけない、そんな億劫さがためらわせた。

そんな麻衣子の気持ちに気づかないのか、声が飛んできた。

「マイさ〜ん、乗せていってあげてよ〜」

「疲れてるだろうからハルさんに運転させたら」

「そつだよ。運転手にしちゃってください」

皆一様に笑っていた。

「ひでえなあ〜まつオレ運転うまいからいいけどねっ」

ハルも笑った。屈託のない笑顔をそのまま麻衣子に向けると

「すみません、申し訳ないです。よろしく」と軽く手を上げた。

断れない状況に追い込まれた麻衣子はうなずくしかなかった。

7 - 帰り道

帰り道の車の中では、ハルは別人のように静かだった。

言葉を選んでいられるかのように慎重な話しぶり、麻衣子に自分の仕事は建築関係の

自営であること、年の離れた兄が社長で、仕事には波があるので比較的自由にさせてもらっていると説明した。

子供が二人、ハルは32歳だといった。

麻衣子は自分の年を言うべきかどうか迷ったが、黙っておいた。

ハルのがつちりとした大きな体つき、短く刈り上げた髪、ちらほらとあごの下に髭がある。

見た目はもつと年上に見えた。

麻衣子より年下と聞いて意外な気持ちがしたからだ。

「ゴルフを始めたのは3年前なんですよ。それまでは野球とかやってたんだけど

仕事関係でやる人が多くて、引きずりこまれたって言うか。でもやり始めると

はまっちゃったなー」

「野球やってた人って飛ぶ人多いじゃないですか？ハルさんも飛ばしやですもんね」

「でもね。飛ぶと曲がっちゃうから。今はまっすぐ打ち出すように

してるんですけどね。
やっぱり方向性が大事ですよ。マイさんは誰かに習ったりしてるんですか？」

「最初はダンナが教えてくれたんだけど、夫婦だとどうもケンカになっちゃうから
だめみたい」

「ダンナさんとはよくゴルフに行くんですか？」

「彼は自分のホームコースにメンバーさんといくことが多いんです。私は今、仕事をしていないので、平日ひまだし、だからサークルとかに入って平日ゴルフにいける仲間を探したの」

「そうなんだ。オレも平日派ですよ。平日は安いし、すいてるしいですよね！」

そんな会話の流れで麻衣子は先日、あるコースから優待券が送られたことを話した。

「そこ行ったことないなあ。ぜひ行ってみたいから、マイさん、企画してくださいよ」

「掲示板で募集すればいいの？」

「ええ、オレは日程が合えばいけるから。いつごろ考えてますか？」

何日にするかと二人で話し合い、日程が決まるとハルは

「じゃあ、よろしく願います」と言った後「うわ〜楽しみだな

あ」と続けた。

笑うと目が細くなり、目じりに小さなシワが寄った。

麻衣子は先ほどの憂鬱な気持ちがなくなっていることに気づいた。

ハルとは一緒にラウンドしたことがない。

サークルの中でも1番上手なハルとゴルフをすることは麻衣子に楽しい予感を与えた。

数日後、ゴルフ場に予約を入れると掲示板に書き込みをした。

すぐにハルは参加する旨のコメントを入れた。

他にも1人手を挙げてきた。

だがもう1人がなかなか決まらない。何人が行きたいけど行けない旨のコメントが書かれた。

確かに誰もが仕事を抱えている、調整ができにくいことは仕方のないことだった。

カオリを誘ってみると、二つ返事で「行く」と言って来た。

「ねえねえ、どんな人たちがメンバーなの？」

「1人は上手だよ。ハンデ11っていったから。もう1人はそこまで上手じゃないけど」

「90台で回る人だよ」

「そーなんだ。じゃあ、楽だね」

カオリは満足そうにうなずいた。

当日、麻衣子とカオリは一緒にゴルフ場に向かった。

少し早めに到着して、練習グリーンでパットを転がしていると

「マイさん！」

と大きな声で呼ばれた。振り返ると、ハルが少し離れた方にいた。

大きな体にくしゃつとした笑い顔で大股で近寄ってくる

「おはようございます！」と麻衣子の前でキャップをぬいだ。

「あ・・・おはようございます」

カオリがきよんとした表情で麻衣子をじっと見ている。

「ええと、今日一緒にまわるカオリさんです」

麻衣子から視線をはずしたハルは、初めて気づいたかのようにカオリを見た。

「はじめまして、カオリです」

「どうも、ハルです。今日はよろしくお願いします」

同じようにカオリにも軽く頭を下げた。

カオリは麻衣子とハルの間をチラチラと視線を動かした。そしてハルが離れると

麻衣子にすつと体を寄せてささやくように言った。

「へえ〜感じのいい人じゃない」

カオリの目が油断なく光ったように感じたのは気のせいだろうか。

麻衣子はその口調にただ単純な感想というより、何か気持ちがこめられている気がした。

素直に「そうだよね」と相槌が打てなかった。

そのこと自体、麻衣子は自分の感情に驚いた。

出た言葉は「そうかな？」だった。

「野球やってたみたいだから体育会系なんですよ」と突き放したような言葉がでた。

「野球やってたんだ！だから体格いいんだね〜」

感心したようにカオリが言う。

チクチクした棘が心に刺さる感触。理由が分からないから余計にイラつく自分を収めるように

「さっ、スタート時間だよ。行こう！」と麻衣子は歩き出した。

8 - カオリの告白

ティーグラウンドにたったハルはひきしまった顔つきをしていた。

だが力が入っていたのか、ティーショットは引っ掛けた状態で左の斜面奥に打ち込んでしまった。

「うわーっ」照れたような苦笑いをしている。

でもその後はだんだん普段の調子を取り戻していった。日が差してたとはいえ、

3月はまだうす寒い。風も強く、誰もがあまり調子がよくない中、ハルは生き生きと楽しそうにプレーをする。

寒さで動作が緩慢になりがちだが、ハルがカートの誘導や運転、残りの距離の確認やら進行を引っ張っていった。

でもそれがつくったものではなく自然にふるまっているので、気づいたらそうなっていたという風だった。

麻衣子はまだ回りに気をかけられるほど余裕のないゴルフをしているが、それでも

グリーンに上がってハルが「はい！」と麻衣子のパターを手渡してくれ、

一番最初にカップインすると、旗を持って、最後の人が終わるのを待っている。

そうか、こういうこともマナーなんだなと思う。

ゴルフというスポーツをするとその人の人柄がよく分かるというがその点ではハルは好印象を誰にも与えてた。

「ハルさんて感じいいなあ」またカオリがつぶやいた。

「そうね」麻衣子もうなずく。

「ねっ、ハルさんて麻衣子さんに気があるんじゃないの？」

思いがけない言葉がカオリの口から出て、麻衣子はびっくりした。どういう意味があるのか、カオリの意図が分からない。

「ハルさんって誰にでもああいう感じだよ」麻衣子は慎重に答えた。

カオリの視線の先には、アドレスをしたハルがいる。勢いよく放たれた球は見事にグリーンの上で止まった。

「ナイスショット！」と声がかかるとハルは軽く手を挙げた。

「そうなの？ふん」

カオリはいきなり吹いた突風に「うわっ寒い」と身をすくめた。

「でも楽しそうだから私もこのサークルに入るね」

ラウンド後、カオリが入会の意思をハルに伝えると、ハルは軽く微笑んだ。

「ぜひ！マイさんの友達だったら大歓迎ですよ」

「じゃあ、私もラウンドのお誘いします。ハルさん、携帯の連絡先、交換しましょうよ」

「あっ、もちろんいいですよ」

二人は肩を寄せ合って、携帯をお互いに差し出している。

カオリのクスクスと忍び笑いが洩れる。

麻衣子は取り残されたような気持ちになった。

なんだか二人を取り持った役目みたい。だが自分とハルとはただのサークルの仲間、カオリだってその仲間になっただけだ。

何を意識してるんだろう？そうか、カオリが変なことをいつたからだと

麻衣子はそんな考えを吹き飛ばすべく、残っていたジュースを一気に飲み干した。

カオリは帰りの車の中ではしゃいでいた。軽くハミングするように口元がゆるんでいる。

「麻衣子って彼、いるの？」

突然の質問に麻衣子は言葉につまった。カオリは下から覗き込むよ

うに麻衣子を見ている。

「びっくりするじゃないの、運転中なんだよ」

「ごめんごめん」笑っている。

「……結婚してるんだよ。その質問っておかしい」

カオリは片手で前髪を掻き揚げながら続けた。

「結婚してても恋人がいる人は一杯いるよ。男も女もずっと1人の人だけを好きでいられるなんて無理な話。好きな人くらいいてもいいんじゃないかな」

「麻衣子とは友達だし、正直に言うね。実は私にはずっと付き合ってる人がいるの。」

相手はゴルフのコーチ」

「向こうは独身？」

「ううん、結婚してる。子供もいる。奥さんの家がお金持ちみたいで、奥さんが実家の手伝いかなんかして稼いでいるんだ。だから彼はゴルフが好きだけできる状態。」

それできなきゃ、インストラクターなんかできないよ。給料なんてホントに安いもん。それで

試合とかにも出なきゃいけないからお金もかかるしね」

「よく会ってるの？」

「週に1度くらいかな、コンペとかに行って、その帰りにちょこつと会うって感じ。」

でも奥さんの締め付けがすごいから、短時間。映画みたりとか、どこかに食事にでかけるとか
そんなデートはしたことがない」

不満気な口調だった。

「大丈夫なの？その・・・家の方は？」

「うん、うちってダンナは単身赴任で週に一度くらいしか帰ってこないもん。夫婦もさ、
10年くらいやってると家族だから。男と女じゃないよ」

その言葉には反論する余地はない。確かに夫婦とはいっても生活を共にしていると

恋人同士のような甘い感情が持続するわけがない。

「でも私・・・彼のこと好きなんだよね」

声のトーンが下がった。

「何度も別れようかと思ったこともあるんだ。でも私が引いちゃうと、向こうが追いかけてきたり、逆もあったりして、どうしてもまた会ってしまうの」

カオリは淡々と語った。

そしてしばらくの沈黙の後、「うう言った。」

「腐れ縁ってやつかも！」

明るく言い放ったけれど、その言葉は閉ざされた車の中でまた重く沈んでいった。

「そうなんだ」

麻衣子はどろい風のように答えていいのか分からなかった。

よくある話のようでもあるし、そうでもないような気もする。

カオリとは友達だと言っても、ゴルフという媒体を通して知り合った仲。

相手のプライベートを詮索することで、もっと深いつながりができ、二人の間にどんな影響を与えるのか、今の麻衣子には想像できなかった。

人には人の生きかたやライフスタイルがある。

昔からの友達であっても、こういう告白を受けたからといって麻衣子は相手の考えや生きかたを、どうこう批評めいたことを言いはしないだろう。

秘密を共有することで相手と密接な関係を築くという観念は麻衣子にはなかった。

今までもそうしてきたし、これからだってそうするだろう。

漠然と麻衣子はそう考えた。

「麻衣子はダンナ様と仲良しなの？」

カオリの言葉はぼんやりと考え込んでいる麻衣子の心の奥底に淀んでいるものを

突き動かしそうになった。

だが麻衣子は慎重な口調で答えた。

「普通だと思つよ。子供がいないし、ずっと共働きだったから、あんまりお互いに干渉はしないけどね」

「ああ、同じ同じ。うちも子供いないからさあ。もう私たちって同居人って感じだよ」

「そついうところはあるかもね」

「うちのダンナも浮気とかしてるかも。まあ、お互い様だから文句も言えないけど」

「ばれちゃったらどうするの？」

カオリはしばらく黙った。

「……どうするかなあ。アイツとは結婚できないしなあ……
・手に職もないから
1人になつたら生活に困るし」

だが口で言うほど、カオリの口調には危機感などさらさらなかった。

「大丈夫、ばれないようにうまくやるから」

そういってカオリは麻衣子に言った。

「麻衣子って年より全然若くみえるし、花があるっていうか、すごく魅力的だから」

絶対に彼氏とかがいるのかなって思った。今日のハルさんだって、もう1人の人だって

麻衣子と話すときは、すごくうれしそうにしてたよ」

カオリは思ったことをすぐ口に出す、率直な人なんだと麻衣子は思った。

魅力的といわれてうれしくないはずはない。

カオリの方が女性らしい振る舞いや、しぐさが見についている。

麻衣子はどちらかというと、自分はさっぱりした男性的な気性と思っ
っていたから、

カオリの言葉は意外だった。

彼氏か……

麻衣子の脳裏に1人の男性の姿が浮かんだ。

9 - 初めての不倫

麻衣子の脳裏に浮かんだ一人の男性。

すらりとした容姿に憂いをたたえたまなざしの横顔。

何か複雑な物事に捕らわれているのか、少し眉をひそめ、口元は堅くひきしまっている。

麻衣子が所属している部署の部長だった。

年は40歳。物腰は柔らかいけれど、仕事の打ち合わせで何か問題があると

普段のおだやかさからは想像できないほど、大声で部下も叱るし、取引先との口論も辞さない。そして部下をほめることも忘れてはいない。

ただ自分の信念に正直すぎるのか、上司に向かっていく姿に部下が共感を覚えても
当の上司には扱いつらいところもあっただろう。

どうして彼と男女の関係になったのか、麻衣子は今考えてもよく分からなかった。

出張先で取引先に接待された後、部屋で二人で飲んだとき、彼にはその心積もりも
あつたろうしすんなり受け入れた麻衣子もどこかで予感というか覚悟をしていたのかも
しれない。

信頼できる、あこがれの上司。

そんな思いが麻衣子にハードルを飛び越えさせたのだ。

そのとき、うしろめたさがあったかどうか……というと、実際のところ

ハードルを飛び越えてしまうと、そんなものは消えてしまった。

数日前に夫の机の引き出しに入っていた、シティホテルの領収書とブランドショップのレシート。そのレシートにはご丁寧にも、イヤリングと記載されていた。

それを見つけたとき、麻衣子の心を襲う大きな波は起きなかった。

小さなさざ波はあったが、その前から帰宅が深夜におよんだり、会社に泊まるという

帰ってこなかったり、何度か麻衣子の眉をひそめるような行動が見え隠れしていた。

夫を問い詰めるといふ行為はなかった。

だからといってしかえしという訳でもない。

麻衣子は固く心に刻む。私はこの人が好きだからこうなったんだ。

そう思っただけ麻衣子はその夜、彼の背中にまわした手に力をこめた。

二人の仲はひそやかで、普段はまるで何も起こらなかったようだった

た。

会社で顔を合わせても、彼のまなざしや口元が緩むことはなかった。2週間に1度くらい、メールで誘いがくる。

食事をしながら軽く飲んで、その後にホテルに入る。

まるで長い間の決め事のように、それは毎回変わらない手順で進んでいった。

熱い愛のささやきもなく、静かに淡々と事は進んでいく。

麻衣子はお互い結婚しているもの同士、こづいのが大人の付き合いなんだろうと納得していた。

たまには映画を観たり、ドライブをしたり、違ったことをしてみた。

そんな誘惑に心が揺さぶられることもあったが、口に出すこともなく、実現することもなかった。

「どうして私を誘ったの？」一度だけ聞いてみた。

「そりゃ、可愛かったから」

「私のこと、好き？」

「あたりまえだろう？好きじゃなきゃ、こづい風にならないよ」

だが見つめ合ってキスをしても、肌を触れ合っても、愛の言葉のさ
さやきはほとんどなかった。

2年ほど続いた仲の終わりはあっけないものだった。

彼は新しく外からきた上司と折り合いが悪く、別の会社に転職して
いった。

意気揚々とベンチャー企業である新しい会社に望んだのだが、現実
は甘くはなかった。

それなりの地位だった彼なのに、与えられたポジションは前よりも
低く、仕事も

思い描いた内容からはかけ離れており、ギャップに彼は打ちのめさ
れてしまった。

麻衣子と会うと、グチをこぼすようになった。

こんなはずではない。これはひどすぎる。

口から出る言葉は、新しい会社の批判、前の会社の未練、そしてな
げやりともいえる

自暴自棄な態度や不満の数々。

それは麻衣子を信頼しているから打ち明けるのだろうが、はじめて
見る男の頼りなさや情けない姿に麻衣子は動揺してしまった。

最初は励ましたり、明るい言葉を投げかけたのだが、毎回毎回、変
わらず態度で

麻衣子に不満を訴える姿にうんざりするようになった。

あんなに颯爽としたスマートだった彼だったのに、タバコをくゆらす姿は

10歳も年をとったようにくたびれた感じだった。

それからだろうか。会つのが2週間から3週間に1度、1ヶ月に1度、2ヶ月に1度、

段々と遠のいて、そして半年後には「もう終わりにするか」という彼の短い言葉で終わった。

それから一度も会っていない。

いつかまた会うことがあるだろうか？

麻衣子はそう思うとき、どんな状態であろうと、彼が昔のように肩で風を切るように颯爽として欲しいと心から思う。

麻衣子がひそかに心をときめかせたあこがれの上司。

だが多分、現実は違うものとなっているだろう。

麻衣子も会社を辞めてしまった。仕事仲間から彼はまた転職をしたと聞いた。

転がるように転職先のグレードは下がっていく。

人がずっと変わらないでいられることはないんだ。それが真実。

麻衣子はそのことを分かっていたのに、この後、それに翻弄され苦

しむとはそのときは思いもよらなかった。

10・二人で会う

携帯にメールが入ったのは午後、食事を取りぼんやりとテレビを見ていたときだった。

開いてみると、送信者の名前にハルがあった。

「今日、渋谷で打ち合わせに出てるんですが、もし時間が空いていたらお茶でもどうですか？」

そんな文章が目に入った。

麻衣子はしばらくその文章を何度も読み返した。

特に何か意味があるわけではない。たまたま近くにいる、ヒマだからその時間つぶしの相手に麻衣子を思い出した、そんな風にとれる。

「別にお茶くらい、どうってことはない」

自分に言い聞かせるように、麻衣子は心の中でつぶやいた。

待ち合わせの場所、時間などそのやりとりするメールのめんどろさが億劫だった麻衣子は携帯の番号を鳴らした。

「こんにちは、マイさん、メール読んでくれました？」

「こんにちは、渋谷にきてるんですか？」

「そうですね。どうですか、もし時間あったらお茶でも……」

「

麻衣子は努めて明るくてきばきと喫茶店の場所と名前を伝えた。そうすることがたいしたことがないんだと改めて自分に言い聞かせていたのかもしれない。

「わかりました、2時くらいにはいけるんで、じゃあ、よろしく！」

ハルは元気よく答えた。

電話を切った後、小さなため息をつく。麻衣子の中で揺れ動くものがあった。

「ただのサークルの仲間じゃない。お茶なんてどうってことない」

そういう思いと裏腹に、この誘いに乗ることで何かその先につながる変化への予感が感じられた。

それが浮き立つような思いではなく、これでいいのだろうか。と自問自答するような不安ともいえる暗い予感だった。無意識の抵抗だったのかもしれない。

人は何か行動を起こすときに、無意識にためらったりすることがある。

それは理性や常識の概念とかそういった判断力ではなく、心の奥底になる意識しない感情が

何かを感じ取っているのではないのだろうか。

麻衣子の心を表すかのように、雲が広がり、今にも雨が降り出しそうな天気に変わりだした。

それが一瞬、出かける気持ちに影を落とす。

寸前になって麻衣子は断りの電話を入れようかと思った。その時そうしていたら、この後の麻衣子の人生は違ったものになっただろう。

だがそうはしなかった。

一度約束したことを断る、それは麻衣子の気質に反するという理由もある。

しかし大きな理由はやはりハルと二人で話をしてみたいという欲求だった。

そう思うと心の底にある得体の知れない不安はすぐに消えた。

麻衣子は振り切るように勢いよく家を飛び出した。

ハルは先にテーブルについていた。

そこはオープンカフェになっていて、ハルは外の道路に向かって並んでいるテーブルの席で

コーヒーを飲んでいた。まだ3月とはいえ、曇り空の寒い一日。

ほとんどの客は店内にとどまり、外の席に座っているのはハルだけだった。

ゴルフウェアではなく、黒いジャケットに薄いピンクのシャツを着て、麻衣子を認めると顔一杯に笑みを広げた。

なんて無防備な笑顔、麻衣子はつられるように微笑んだ。

服装が変わっただけで、印象が大分変わってしまう。ゴルフ場以外でこんな風に二人で会うことの意外性も麻衣子に新鮮な驚きを与えた。

「すみません、いきなり呼び出したりして」

ハルはいつものように礼儀正しく麻衣子に声をかけた。

仕事の打ち合わせがあつてとか、このあたりも変わったなとか、そんな話をしながらやはり共通の趣味であるゴルフの話題に移っていった。

どちらが言い出したかはわからないが、麻衣子がクラブの悩みを相談したり

ハルがアドバイスをしたり、そんなやりとりを続けているうちに、ゴルフショップについて

クラブ診断をしようという話に流れていった。

「オレ、一緒に行きますよ。いつがいいですか？来週の火曜日とかはどうですか？」

麻衣子の反応を伺うかのように、息をひそめる短い沈黙があつた。

確かに上級者であるハルについてきてもらった方が心強い。

ハルを見返すと屈託ない笑顔が返ってきた。だが見つめる目は麻衣子に注がれていたままだ。

その視線の強さに麻衣子は思わずうなずいていた。

約束の火曜日の前日、ハルからメールが入った。

「明日は大丈夫ですか？3時くらいでどうでしょうか？もしその後、良かったら

軽くゴハンでもどうですか？」

そんな内容だった。

ハルが麻衣子にそれとなく興味を持っていることは感じ取っていたが、これはあからさまにデートに誘っているんだろうか？

麻衣子が主婦であることをハルは知っている。その麻衣子を誘うのは普通のことなのだろうか？

これが麻衣子が結婚してから一度も男性と二人きりで食事をしたことがないのであれば

当然戸惑っただろうし、迷いも出たかもしれない。

だが麻衣子は長く会社勤めをしてきたせいか、残業後の疲れを一杯のビールで癒すため

同僚と飲みにでかけたり、たまたま帰りが一緒になって、食事をしたりすることもあったので男性と二人きりでいることにそれほど抵抗がない。

それは男女の関係というより仲間意識からくるものであった。

ハルという男性を深く知っているわけではない。

まだ未知数の男性。

このとき、夫が晩御飯を家で食べることになっていたら、約束もできなかった。

だがこの日は接待で遅くなるという話を聞いている。

そんな偶然に後押しされて、麻衣子は応じることにした。

彼がどういう心積もりなのかは、これから見極めればよいと考えていた。

待ち合わせの日、麻衣子はほんの数分遅れた。

小走りに待ち合わせ場所に向かい、横断歩道を渡ろうとすると、あいにく信号が赤に変わった。

確かここを渡ると待ち合わせであるビルの前に出るはずだった。

背伸びして先を覗くように見るが、ビルの名前がよく見えない。

もしかするともう少し先だったかな、と麻衣子はそのあたりをキョロキョロと見回した。

その時、「ピーーツ」という音がした。

音のした方を見ると、少し先の道路の反対側にハルがたっていて指笛を鳴らしていた。

そして麻衣子を認めると、手を軽く振った。

顔が笑っている。今までも何度か見た、顔一杯に広がる無邪気な笑顔。

麻衣子の心の中で何かはじけたような気がした。

人が恋に落ちるといふ瞬間はどんなときだろう？

その忘れられない一瞬は、相手のふとした動作や言葉がおこす魔法のようなもの。

他の人には感じないものでも、それが特定の人との心の琴線に触れたとき、今まで思いもよらなかった感情が沸いてくる。

麻衣子は立ち止まって通りの向かい側にたつハルをじっと見つめていた。

11 - 繋がれた手

その日は3月の末、数日前から気温が上がっていたせいか、桜はほとんど開花しており

4月の入学式には花はすでに散っているだろうと予報されていた。

ひとしきりシヨップを回って喫茶店で一休みとなった。

ハルは麻衣子をテーブルに座らせて、セルフサービスのカウンターに並んでいる。

アメリカからきたこの手のコーヒーシヨップはいつも混んでいる。

参考書のような本を広げて、ペンで何かを書き込んでいる高校生らしき少女。

ラップトップを開けて、画面を食い入るように見つめながらキーを叩くサラリーマン。

大口を開けて、笑い転げている主婦らしき女性3人。

麻衣子は外に設けてある小さなテーブル席に座っていた。

近くに桜の木があるのか、花びらが風に飛んできて地面のあちろちろに落ちてている。

ふいに突風が起きて、麻衣子の髪が舞い上がりそうになった。

と同時に花びらがひらひらと空中に舞う。

麻衣子はうつむいて髪を抑えた。

「あつ花びらついてるよ」

ハルが近寄ってきて、「ごめん、と小さくつぶやくと麻衣子の髪に手

をやった。

ブンと男性の匂いが漂う。コロンでもないし、汗の匂いでもない、男性特有の匂い。

麻衣子の胸がざわざわした。体が膠着したように動かない。

「取れた取れた」

ハルは何事もなかったのように、明るく言った。麻衣子はうつむいたままだった。

「多分あのクラブに替えたら今より飛距離出ると思うよ。もし買ったんだったら、あそこでもいいし、今はネットも安いからそれで買うのも手だなあ」

「もう古いから替えようかとは思ってるの」

「買い換えたら、ラウンド行かないと。どこがいいかなあ」

麻衣子は前から興味があったコースの名前を挙げた。

「そこは行って見たかったところだ。二人でいかない？どうかかな？」

ハルは少し目を細めて麻衣子を見つめた。口元は緩んでいない。

前回と同じように麻衣子の答えを覗くように息を潜めているようだ。

「いいよ」麻衣子は軽い調子で答えた。

「ホント？うわー楽しみだなあ」またあの無邪気な笑顔が返ってきた。

その時、また突風が起こった。

「これって春一番じゃないかな？」

「いつもより早いね。これじゃあ、すぐ花が散っちゃう。もうお花見できないね」

麻衣子が今年のお花見は、と口を開きかけたとき携帯が鳴り出した。

画面を見ると海外の電話番号が並んでいた。

いぶかしげに思いながら出てみると、相手は勤めていたときの一緒に仕事をしていた仲間の男性だった。麻衣子の仕事の一部を引き継いでおり、麻衣子の後輩にあたった。

「今、いいですか？実はあの仕事で今、ドイツにいるんですけど、教えて欲しいことがあって……」

麻衣子はハルに軽く合図をしてテーブルを離れた。

話はなかなか終わらなかつた。仕事の悩みもあるのか、次第に人生相談のような形になっていく。麻衣子をハルを待たせている気がして少しあせった。早く話しを終わらせたいのに切ろうとすると、また話題を戻したりする。

最後にはイライラしながら「ごめん、今出先だから、また今度、ゆっくり聞くから」と

たたみかけるように切った。

ため息とともに携帯を閉じて席に戻ると、ハルは手持ち無沙汰に夕
バコをくゆらしていた。

「ごめんね。前の会社の人で・・・」

「大丈夫？何か用事でもできたの？」

「ううん、たいしたことないの。ちょっと悩んでもあるみた
いで。1人でやる仕事してるから相談する人がいないのかもしれない。
私が先輩で教えた形になったから頼ってるのかな。」

「・・・・・・・・」

麻衣子が険しい顔をしていたからだろうか。ハルは心配そうな顔を
向けた。

「本当に大丈夫だから」麻衣子はきっぱりと言った。

ハルは何か言いたそうな顔を一瞬したが、すぐ思い直したように、
「じゃあ、ちょっと早いけど軽く飲みますか」と腰を上げた。

ハルが連れて行った店はどこにもある和風居酒屋といった店だっ
た。

流行である仕切りのある個室風になった席だった。

麻衣子がビールの次にサワーを飲みだすと「マイさんって結構飲め
るんだね。うれしいなあ」と顔をほころばせた。

ハルは強いのか、ビールから焼酎に変えるとグラスを進めていく。

少し紅潮した顔からは笑みがこぼれている。

「ところでマイちゃんはいくつなの？オレと一緒にぐらい？」

マイちゃん！？急にチャン付けになった変化に気づかない振りをして麻衣子は答えた。

「ええっ！？いくつだと思っの？」

ハルはうつん・・・と口を濁した。

「私、ハルさんより年上だよ。37だもん」

「そう？てつきりオレより下か同じくらいだと思ってたよ。マイちゃんと同じ年の姉貴がいるけど、どっぷり主婦って感じでもっとオバサンっぽい。やっぱり仕事してたから違うね」

「子供がないからだよ」

「どんな仕事してたの？」「ずっと東京なの？」「兄弟は？」

ハルは麻衣子のことを詮索していく。

「外資系の企業なんてすごいなあ。英語もぺらぺらなんでしょう？あこがれるなあ」

ハルはまぶしそつに麻衣子を見つめた。

麻衣子はそんなことないよ、とつぶやきながらお皿の上のサラダをつついた。

「ハルさんはゴルフ歴って4年くらいなんだっけ？」

「うん、タイガーウッズをテレビでみて、かっこいいなあ〜と思ったのがゴルフを始めたきっかけかな。オレ、それまで野球とかテニス、サッカーとやったけど、それからゴルフにはまったな」

「そうそう釣りも好きなんだ」

「釣り？」

「うん、釣りでも川の方。海釣りじゃないよ」

「ああ、ブラビのリバーランススルーイトみたいなの？」

「そうそう。一時、はまってたときはよくいったなあ。会社にいくそぶりして釣りにいったこともある。あの時は行きたくて行きたくてしかたなかったんだ」

「で、今はゴルフなんだ」

「オレ、自慢するわけじゃないけど、運動神経は良い方なんだ。頭はダメだけど」

と軽く笑った。

「最初にコースに出たとき120叩いた。でも100以上叩いたのはそれつきり。2回目は98で回ったよ」

「すごいね！普通100を切るのに1年くらい、かかるんじゃない

「？」

「だってすごく練習した。くやしくてしかたなかったし。仕事終わると毎日練習場に通ってた」

「誰かに教えてもらったの？」

「いや、オレは自己流。今の目標はシングルになることだな。今年中にはなりたい」

口元を引き締めて何かを見据えた横顔を見ながら、ハルは相当、負けん気が強いんだろうなと麻衣子は思った。でも何かに熱中する男性というのは嫌いじゃない。

渋谷の街は若い男女であふれかえっていた。いつの頃からか、この街は若年化が進んで

今は中学生が高校生のたまり場のようになっている。

「マイちゃんはどっやって帰るの？」

店を出るとハルが聞いてきた。

「ええと、ここからだと歩いてても大丈夫だけど・・・」

「オレ、タクシーで途中の駅までいくから、送っていくよ」

そついうと手を挙げて車を停めた。

乗り込んで行き先を告げると、ハルはシートに沈み込むように座り、

「今日は楽しかったなあ」と誰にともなくつぶやくように言った。

そして麻衣子に顔向けると「今日は無理いってゴメンネ。でもすごく楽しかったからまた飲みにいこう」と強く言うと、すっと手を伸ばして麻衣子の手を握った。

大きくて暖かい手だった。少し力がこめて麻衣子を包み込むように堅くにぎりしめている。

顔はそのまま真正面を向いたままだ。

どきどきと胸を打つ音がお酒による酔いなのか、それともハルと繋がれた手なのか

麻衣子には分からなかった。

だが解くこともせず、その手はずっと繋がれていた。

12 - 初めてのキス

家に帰り10分くらいたったかどうか。携帯メールの着信音が鳴った。ハルからだった。

「今日は楽しかったよ。ありがとう。オレ、マイちゃんの事が大好きなんだ。」

今度は二人でゴルフに行こうね。楽しみにしてるよ。おやすみ」

大好き ― こんな率直な言葉を言われたのはずいぶん久しぶりだ。いや、高校以来かもしれない。

大人のそれも30過ぎの男性から、そんな風に言われることは予測もしないことだ。

麻衣子は携帯の画面を見つめながら、どう返事をしたものか思いあぐねていた。

うれしいというより戸惑いの方が大きかった。

ハルがどういう気持ちで「好き」という言葉を使っているのか、真意が分からないというのが

正直な気持ちだった。

お酒も入ってるし、もしかしたら彼にとっては軽い気持ちで使っているのかもしれない。

ちょっと気に入った女性には、こんな風にノリで好きと言うのかもしない。

5歳という年齢差が、麻衣子に感覚のギャップを感じさせ、慎重にさせていた。

ここは知らん振りしながら、礼儀的な返事を返したものの、その夜、寝付けず

何度も寝返りをする事となった。

それからハルからはちよくちよくメールが入ってきた。

携帯メールに慣れていなかった麻衣子は絵文字を使い、まるで会話しているような

くだけた調子のメールに当初は驚いたものの、すぐに慣れていった。

へえ〜こんな風に絵文字って使うんだ！

ハルの1人ツッコミや、自虐的なことをいいながらも、その裏にウケ狙いの文章をみると

「バツカみたい」と思っても、知らず知らず微笑んでいる自分がいた。

そしていつかハルのメールを楽しみにしているのに気づいた。

ハルは麻衣子が返信したら必ずまた返信してくる。

キリがないと思いつながら、そんなやりとりをゲームのように楽しんでいた。

初めて二人きりのゴルフの前日。

車の調子が悪く、麻衣子はどうしたものか考え込んでしまった。

ハルの家と麻衣子の家は離れている。ゴルフ場はハルの家の方向なので、現地集合の予定だった。日程を変更するべきか、麻衣子がかこまで出向いて、ハルに拾ってもらおうか・・・

そのことを告げるとハルはなんでもないことのように「じゃあ、オレが迎えに行くから」と言った。ハルにとって、わざわざ都内に出てきて、それからまたゴルフ場に向かうのはかなりのロスである。

「一緒に行こう。明日6時にお迎えに行きますよ。お姫様！」

画面に並んだ絵文字と文章に笑いながら、心が浮き立つのを抑えられなかった。

二人きりのゴルフ。麻衣子の夫以外の男性とツーサムのラウンドをしたことがない。

いったいどんな風なんだろう？

もしかしたらくどかれたりするんだろうか？

すぐにその気持ちを打ち消す。ばかみたい、そんなことあるわけないじゃない、とまるでそんな考えを持ったことすら恥ずかしいことのように自分を諷めていた。

ハルは結婚している。子供もいる。ただの友達に毛がはえたくらいの好意があるだけだ。

それ以上の感情があるわけがない、そう言い聞かせていた。

当日は晴れ渡った絶好のゴルフ日和だった。4月に入り暖かく、青空が広がっていた。

小さな緑の葉はこれから色濃く大きく成長していく勢いを覗かせていた。

ハルは礼儀正しく、同伴者である麻衣子に気配りをしながらも、自

分のゴルフを楽しむ姿勢はいつものサークルのコンペと同じだった。

「マイちゃん、エブリワンで勝負！」エブリワンとは全ホールに1打のハンデを与えるということ。つまり麻衣子は18のハンデをもらうことになる。」

「えーっ！？だって私まだ100切りしたことないのに」

「大丈夫だよ。最近、100台で回ってるんだろっ？今日は90台出そうぜ。もし99とか出したら、オレは81でイーブン。でもオレだって81は結構、きつい」

「負けたらどうするの？」

「そうだなあ」ハルはニヤニヤ笑っている。

「まっ、勝利者が考えていいよな。何プレゼントしてもらおうかな」

「はいはい、一杯ごちそうしますよ」

ハルはカートを運転しながら「よーしっ」とつぶやいた。

もう次のホールに気持ちがいってる様子で麻衣子のことを振り向きもしなかった。

ティーグラウンドに立つと、コースを見据えたまま気持ちを集中させるように口元をひきしめる。

この人って本当にゴルフになるとムキになる。

良いショットを打つものの、飛ぶせいか時折、球は大きく左に曲が

ることもある。

そしてミスショットをすると「うおーっ」と叫んだりしてうるさいきびきびした動作があったり、オーバーにうなだれたり、喜怒哀楽の表現が激しい。

でもなんだか憎めなくなる。麻衣子は振り回されるような感情の波を表すハルに新鮮な驚きを感じていた。

結果は麻衣子の負けだった。108と88。18ハンデをもらっても2打差の負け。

スコアカードを見ながら「88か・・・でも8って縁起のいい数字だよな。マイちゃんは108か。煩惱の鐘ってとこだね」そう言っ
て笑った。

「ゴルフは謙虚な気持ちでないとね。煩惱とか欲とか捨てないと」
からかうようなハルの言葉に麻衣子も苦笑した。

麻衣子は夫以外の男性との初めてのゴルフに緊張していたのか、ハルとどういふ会話をしているか躊躇していたものの、そんな心配は無用だった。

考えるより先にハルの方が話題を提供してくれる。そして麻衣子の言うことにちゃんと耳を傾けて答えてくれる。

いつも夫と一方通行の会話しかしていない麻衣子は、まだ知り合っていない間もない他人である男性と打ち解けて話をする自分に驚いていた。

それでも体というものは正直なもの。緊張していたのか帰り道の中、言葉が少なくなつて、少しウトウトしかけていた。

「マイちゃん、疲れた？寝ていいよ」

「大丈夫。運転してもらつて寝るなんて悪いもん」

「平気平気、ところでさ、今日、もし良かったら軽く飲まない？オレ、車を会社に置くから」

ハルの会社は麻衣子の家から車で10分くらいのところにある。それまでゴルフの帰りに食事をしたり飲んだりしたことがない。いつもまっすぐ家に帰っていた。

「いいよ」躊躇したのは一瞬で、すぐ返事が出た。「だって負けたからおごらないとね！」

私、どうしたんだろう？自分の心がつかめなかった。だがハルもつと一緒になりたいという気持ちの後押しして出た言葉だった。

そして車のシートに身を沈めた。なるようになる。今は自分の心が感じるままにしようと思った。

早い時間だったので店には人がまばらだった。

居酒屋のテーブルを挟んで向かい合った。ハルは上機嫌で冗談を言いながら、麻衣子を笑わせた。ハルとのゴルフも楽しかったがこつやって向かい合つてお酒を飲みながら、心が開放されていく感覚も久しぶりで、その時間を心から楽しんだ。

店を出てエレベーターに乗ったときだった。

ハルが微笑みながら近寄ってきた。無言で麻衣子の肩を寄せる。顔が近づき唇が重なった。

二人の初めてのキス。

麻衣子は受け入れながら、こうなることは最初に会ったときから決まっていた気がしていた。

13・付き合ってください

キスをしたら男と女であることを意識しあう。当たり前のことだが、麻衣子の心の中でハルは急激に存在感を増してきた。このままどうなっていくのだろう。

前にはドアがある。そのドアを開くのも開かないのもそれは自由意志。

開いた向こうに何が待っているか、未知なものの期待と不安。

恋愛でなくても、新しいことが待っている世界に飛び込むことにはいつも躊躇がある。

人によっては自ら進んで飛び込むことを恐れないタイプもいる。

そこに新しい喜びが手を広げて待っているというワクワクした期待感があるからだ。

麻衣子の中にもそういう気持ちはある。だが今持っているものをすっかり捨てて、全部を

新しく塗り替えることには抵抗がある。

慣れ親しんだものに固執するように、今の自分を取りまく環境にはそれ相応の安心感があるからだ。

あまりに率直に気持ちをぶつけてくるハルのことを思うと麻衣子は自然と顔がゆるむ。

一緒にいて楽しい。話もおもしろい。ゴルフは上手ときている。

キスだって悪くなかった。

でもこれはゲームのようなもの。二人は結婚している。

どこの家庭にもあるような小さな摩擦はあるものの、家族崩壊するような大問題があるわけでもない。恋愛感情を抱いたとしてもそれは恋愛ごっこ。きっとハルだって同じ気持ちであるに違いない。

また連絡がくるかな、と思ってる矢先にハルからランチの誘いがきた。急ではあったが、昼間たっぷり時間のある麻衣子には断る理由がない。

食事を終えて、ハルの車に乗った。当然、自分の家に送り届けてもらうものだと思っていた。

ハルは車を走らせながら「もう少し一緒にいられる時間ある？」と聞いてきた。

「……うん、夕方までなら平気だよ」

ハルは少し黙った。数分の沈黙の後、出た言葉は「ホテルいかない？」だった。

麻衣子は内心びっくりした。

こういう誘いはたとえばお酒でも飲んで二人の気分が高揚してるときに勢いをつけて誘うものであって、昼間、ランチを食べて、おなかが膨らみ、満腹感で無防備に心を開放しているときにするものではないだろうと考えた。

突然のことに「えええ……」と言ったとき、言葉をつぐんでし

まった。

「だめかなあ」気弱そうな声がでる。

「だって、なんて答えて良いか・・・」

「行こう、ねっ！」

ハルはハンドルを勢いよく切ると、細い路地に入ってしまった。

ハルに手をとられて建物に入りながら、不思議と麻衣子は落ち着いてた。

その時、頭によぎったのは、今日は普通の平凡な下着だったな、ということだった。

前もってそういう心積もりがある日、女性は誰でもちよっとおしゃれな、相手が見て喜びそうな下着を選ぶ。でもいきなりのランチ、そしてその後のホテル。準備など何もしていなかった。

そういう服装だって突然だったからGパンにシャツというカジユアル。化粧だってほとんどしていない。なんだかその辺にお使いにでもきた小娘みたい。

麻衣子は苦笑する思いを抑えて、どうにでもなれといった感じでハルに付いていった。

ホテルの密室　―　音もなく、光もなく閉ざされた部屋に二人きり。

そこは都会の喧騒や現実の世界から逃避している空間。

部屋の真ん中にでんと備えられたダブルベッド、大きなワイド型の

テレビ、アンバランスなほど派手な大柄の花柄模様の壁がまがましい。外にあふれる平凡な日常は何もなかった。

「ビールでも飲もうか」しんとした沈黙を破るようにハルが言った。ソファーに並んで座り、言葉もなくグラスを傾ける。

ハルが麻衣子の肩に手を伸ばして頭をハルの胸に寄せた。鼓動が聞こえた。

「心臓の音がどくどく言ってるよ！」

「うん、オレ、すごく緊張している」

ハルはそう言うのと麻衣子の顔を上げてキスをしてきた。初めてのキスとは違う恋人たちがするような濃厚で甘いキス。ハルの手が胸に伸びてくる。ためらうようにそのまま胸の上で手が泳いだ。

「ね、シャワー浴びる？」麻衣子がそう言うと、ハルはびくつとしたように身を引いた。

「そうだね、じゃあ、オレが先に浴びるよ」

照れがあるのか二人ともお互いを見ないようにして、それぞれにシャワーを浴びた。

麻衣子がバスタオル1枚の姿でベッドにすわりと入ると、ハルは待ちかねていたように抱きしめて「好きだよ」とささやいた。

「本当に大好きなんだ。こうなれてうれしい」

ハルの手は慎重に麻衣子の体の上をすべっていく。やさしくそして大切なものを扱うように触れながら麻衣子の反応を覗っている。

麻衣子は初めてなのに滑らかな手順と、自分がこうしてほしいと思うことがすんなりと進行していくことに驚きながら、その感覚を素直に受け止めていた。

初めて見る、触れる体に感嘆の声をあげながら、ハルは自分の欲望を達するかと思えた。

だがハルは最後までいかなかった。

体を離れたとき、男性は必ず自分の欲望を射精という形で納めるものと思っていたので

「どうしたの？」という質問がでてしまった。

「オレ、別にいなくてもいいんだ。いなくても十分気持ちいいから」そう言うと、真顔で麻衣子をじっと見つめた。

「ね、オレと付き合ってくれる？」

いつも驚かされるハルだが、この言葉は胸にドスンと落ちた。

結婚しているから付き合うという言葉がふさわしいのかどうかかわらない。

前の上司はなりゆきから付き合っただけだったが、そういう言葉はなかった。

その言葉ひとつでハルの気持ちが変わってきた。

「大事にするから」

真剣なまなざしがそそがれた。

「オレ、お金はないからぜいたくなことはしてあげられないけど、一緒に食事したり

飲んだり、ゴルフいったり楽しくやっていきたい。もちろんちゃんとメールや電話もするよ。ほったらかしにはしないから」

そう言うってから少し不安気な目で麻衣子を見た。

「それとも誰か付き合ってる人がいたりして・・・」

「・・・いないよ。そんな人がいたらここには来てない」

「この間、電話がかかってきた人とかは関係ないの？」

「電話？ああ、あれは会社の後輩。相談事で電話してきただけ」

「そう！？オレ、気になっちゃって。ズーッとマイちゃんのことばかり考えてるし、もしかしたらって、気になってしかたがなかったんだ。誰もいないなら付き合って。ねっ」

まるで今にも麻衣子がどこかへ行ってしまいそうな気でもするのだろうか。

ハルは説得するかのようにつめ寄った。真剣な目は麻衣子を捕らえて離さない。

その勢いに押された訳でもないだろうが、麻衣子は思わずくくんとうなずいていた。

14 - 恋愛ゲームの始まり

結婚しているもの同士が付き合うーその定義はなんだろう？

考えてもそこにはいくつもの矛盾がある。結婚という成就がない。

配偶者を裏切っている。

所詮、背徳の恋愛ごっこ。好きという感情があっても、お互いに絶対に踏み込めない領域がある上つ面だけの付き合い。

ゲームに徹するしかない、はっきりと自覚してはいないけれど、麻衣子の心の中でハルに対してあなどる感情があった。

どうせ、そうは言っても遊びなんだ……

ハルはそれから毎朝メールを送ってきた。「おはよう」という挨拶から始まって

一通りの近況報告。そして今日は何をしてるの？お茶くらい飲める？ランチはどう？

いつ飲みにいこうか？

麻衣子のスケジュールすべてを把握したいのか、執拗に求めてくる。

だが麻衣子がやんわりと誘いを断ると必ず「無理言っでごめんな。

少しでもマイに会いたかったからなんだ」とくすぐるような返答を返す。

誘いを承諾すると「ういっす！じゃあ、飛んでいくよ！早く逢いたい」と返す。

一日に何度もメールが交わされ、その文面には甘い言葉が並ぶ。

「ずっとマイのことばかり考えてる。声が聞きたい」

「好きで好きでたまらないよ」

「ちよつとの時間でもマイの可愛い顔がみたいよお」

そんなメールを受け取ってうれしくないはずがない。

こんな風に臆面もなく愛の言葉を羅列する男性はじめてだった。

ハルは顔を合わせているときも、同じように愛情を表現した。

「オレ、こんなに入れ込んだことないよ。実は今まで結婚してから付き合った女は二人いるんだ。でもこれほどしょっちゅう会ったこともないし、普段は連絡なんか全然しなかった。でもマイにはすぐ逢いたくなるんだよな」

「前の彼女たちとはなんで付き合うようになったの？」

「オレの結婚ってできちゃった婚なんだ。22のときに彼女に子供ができて、卒業と同時に結婚したんだ。それから二人目の子供を生んでからだけど、女性って母性本能が強くなるのか、セックスに嫌悪感を持ったみたいで、拒否されたんだ。それでなんとなく……」

「あつ、でも夫婦仲が悪いわけじゃないよ」弁解するように付け足した。

「前の彼女とはいつ別れたの？」

「もう1年前かな。相手は独身で、どうも彼氏がいたみたいで二股

かけられてたんだ。それで向こうが結婚することになって別れた」

「悲しかった？」

「いや。良かったって思った。オレは離婚する気はないって言うてたから、割り切った関係だった。別れてからは一度も会ってない。もう1年もたつし、そろそろ誰か好きな人欲しいなあって思ってた。でも誰でもって訳にはいかないし、サークルなんかバカにしてたけど、マイを初めて見たとき、おって思ったよ。サークルも悪くないなって。一目惚れなんだ」

「一目惚れ・・・」

「そうだよ。サービスエリアで初めて会ったろう？一目みて、タイプだなと思ったよ。」

オレの好みにストライクだった。それからなんとか仲良くなれないかなあってずっと思ってたから、お茶に誘って、きてくれたときは舞い上がったちゃったよ」

その言葉に「うれしい」と素直に反応できない自分がいた。

いやな気持ちはないけれど、あまりに明らかに気持ちをさらけ出すハルを目の当たりにすると、戸惑いの方が大きい。

「マイはどうだった？オレを見てどう思った？」

「ん・・・特になんとも」

「ちえっ、そっかあ・・・でもいいんだ！これからもっとマイがオレのこと好きになるようにするから」

本当はハルと初めて出会ったとき、この人がハルだったらいいなあ
と思ったことを覚えていた。しかしそれをハルに言っていると、自分も一
目ぼれだったと告白するようで、それはなんだかくやしい気持ちが
したからだ。まだ付き合いは始まったばかり。恋愛ゲームだと言
い聞かせていた麻衣子はハルの気持ちを手探りで模索していた。

ハルとはほんの1時間程度でも毎日のように顔を合わせるものの、
それは月曜から金曜まで。週末はお互いの家族と過ごす日々、そし
てその間は1度はメールのやりとりをするだけと
決めたわけでもないのに暗黙の了解があった。

しかし週末以外のハルとの付き合いは、ほとんど普通の恋人同士の
ようなものだった。

「ねえ、メールチェックとか入らないの？大丈夫？」と聞いたこと
がある。

「大丈夫だよ。仕事から携帯メールや電話はしょっちゅうだし、家
で携帯なんかその辺に
置いてるけど、見られたことないよ」

「ホント？」

「それは大丈夫。そういうことはしないな。マイの方は？」

「うちも大丈夫。人の携帯なんか見ないよ。それに携帯の機種が違
うから、使えないんじゃないかな。あの人メカオンチだから」

ハルはそれを聞くと夫のことを聞いてきた。仕事、体格、出身地、
兄弟……

あまり気が進まない話ではあったが聞かれるままに答えていった。出会いは友達の紹介だったこと。結婚して7年になること。するとハルが何気に聞いてきた。

「子供は？つくらないの？」

「子供ねえ・・・うちはセックスレスだから」

「レスっていったって全然ないわけじゃないだろう？」

「ううん、うちは全くないの。それも結婚して2年目からそうなったんだ」

ハルは驚いたように目を開いた。

151 セックスレス夫婦

結婚したとき当然のことながら数年たつたら、子供をつくらうと麻衣子は考えていた。

仕事は順調だったし、おもしろかったが、子供をつくるのに適した年齢というものがある。

できれば二人くらい欲しいし、あまり高齢になってからというのは育てる体力が衰えてしまう。

ところが結婚して2年目に入るあたりから、夫は麻衣子を求めてこなくなつた。

一度、途中で夫の男性としての機能が不十分で、そのまま行為をやめてしまったことがある。

その時は単純に疲れているんだろうと安易に捉えていた。

そんな理由でセックスを拒否するとは思えなかった。

だがそれが2度もあると麻衣子の心の中で不安は湿り気を帯びてきた。

その後、麻衣子には手も触れず、夜になると背中を向けてさっさと寝てしまう。

数ヶ月して意を決し尋ねてみることにした。夫婦なんだから当然だと思つた。

「ねえ、そろそろ子供つくらない？」

数分の沈黙の後、夫の答えが返ってきた。

「子供はいらない。子供ができると責任ができるからいやだ」

麻衣子は自分の耳を疑った。結婚して子供をつくるのは家族として当然の行為ではないか。責任って何？結婚したら家族に対して責任ができるのは普通ではないか。

「どういうこと？そんなこと結婚する前に一言も言ってなかったじゃない」

「そうだったけどもそういう気になれないんだ」

その時の夫の年齢は35歳。若いとはいえないかもしれないが、子供を持つのに遅すぎるといってもないだろう。

「それでセックスも拒否するわけ!？」

つい責める口調になった。

「それとこれは別。ただ疲れているだけだって言っただろう？全く女って30過ぎると性欲が強くなるんだな」

麻衣子は自分の足元にぽっかりと大きな穴が開いたような気がした。

そして穴の向こうには夫が背を向けて椅子に座っている。テレビを見ながら何事もなかったかのように笑っている。

かろうじて穴の淵に震えながら立っている。頼れるものは何も無い。でもこの穴の中には落ちたくない。落ちたら這い上がれないような気がする。

夫にそれ以上立ち向かっていく気力が自分にあつたらと思う。

人と争うーその行為が麻衣子を逡巡させる。今まで本気のケンカを誰ともしたことがない。

心の中をさらけ出して、傷つけあって、それから生まれるものが何か。

知りたいような、知りたくないようなそんな気持ちだった。

これからどうしたらいいのだろう。

でももしかしたら、一緒に暮らすうちに夫の気持ちだって変わるかもしれない。

そんなかすかな期待を持っていたが、その後、一切麻衣子を求めてこなくなつた夫に失望する以外何があるだろう。

並んだベッドの片側に体を横たえてそつと隣を覗く。夫は背中を向けて、すぐに寝息をたてる。そこには言葉もなくただ無言の拒否だけが漂っていた。

せめて何か暖かい言葉や無言であってもただ抱きしめてくれれば、どんなに麻衣子は安心しただろう。大きな背中は麻衣子を拒絶する壁だった。

そして暗闇の中で麻衣子は声を押し殺して泣いた。

「どうなるの？私はどうしたらいいの？」自問自答する。

麻衣子には年の離れた兄しかおらず、母を早くに亡くしていた。厳格という言葉がぴったりの家庭で、父に抱きしめてもらったり、頭をなでることすらされたことがない。いつも規律と道徳を重んじ

る堅苦しい家庭の中で、自分の感情をさらけ出すことは許されない気がしていた。心を開いて悩みをぶつけたこともない。父は麻衣子にとって脅威の存在だから相談することなどできやしない。まして内容が内容だ。男女のセックスの問題をどうして打ち明けられるだろう。

夫は社会的にみて何の落ち度もない。世間的に一流といわれる大学を卒業して、ちゃんとした会社に勤めている。少しはお酒を飲むがたしなむ程度、ギャンブルもしないし、無駄遣いもしない。おとなしい性格で麻衣子に暴言や暴力もふるったことがない。父も気に入っている。二人で仕事の話をしているときなど、父の顔は満足感であふれている。

このまま二人で暮らしていたら、いつか家族の情愛だって増してくるはずだ。

子供が欲しくなる気持ちになるかもしれない。

だが肝心のセックスを求めてこない。その事実も麻衣子を打ちのめした。

このまま女として終わってしまうの？そんな不安も湧き上がった。

夫はもしかしたらEDではないのだろうか？そんな疑念も持ち上がった。

それは夫婦で協力して解決すべき問題だ。だがそのことについて話し合うこともためらわれ、時だけが虚しくすぎていった。

夫の浮気を予測させる証拠を見つけたときは「なんだ、他の人とはできるんだ」と妙に納得した。自分をないがしろにされたような不

快感もあったが、もう何年もたっていたので今さらことを荒立てる気力はとうに失われていた。

ハルに問われたとき、麻衣子は努めて明るく言い切った。

「もう5年以上こんな状態になると、私も今はダンナとHなんかできなないよ」

「こんなにいい体してるのに……もったいないなあ。ダンナの気持ちに分からないよ」

そう言うとハルは麻衣子をいとおしそうに抱きしめた。そして肌をまさぐり始め、ハルは自分のものを麻衣子の中に入れようとした。

夫婦関係の話をしたからだろうか、ハルのものはいつもよりいきり立っていた。猛々しいもが入ろうとしたとき、思わず「痛い」という言葉が出た。

ハルはびくつとして体を離した。顔が心配そうに歪んでいる。

「ごめんと小さくつぶやいて麻衣子をそつと抱きしめた。

「愛してるよ」麻衣子の目をじつと見つめて言った。

「マイはオレの宝物だよ。こんなに人を好きになるのは初めてなんだ」

麻衣子は自分の心が高ぶってくるのを感じた。今までこれほど求めてくる男性はいなかった。

まるで初めて愛を知ったかのようにハルは愛の言葉をささやき続ける。

ハルの目の淵は感極まったかのように滲んでさえ見える。

「・・・私も愛してるよ」麻衣子の口から自然にその言葉が出た。

16 - カオリに知られる

二人のことは秘密の関係。

前の上司との関係だって誰にも打ち明けたことがない。

肩を並べてあるいているときも、腕を組んだことも手をつないだこともない。

誰かに見とがめられたときに対処できるように、微妙な距離を保っていた。

不倫の関係なんてそういうもの。

だがハルときたら、何も気にしていないかのように、平気で肩を抱く、手を握る、

電車の中ですら入り口の横でぴったりと体を密着させて、麻衣子を包み込むかのようにする。

お酒が入ると、エレベーターの中、薄暗い階段、細い路地、それらはすべて二人の甘いキスと抱擁の場所となった。

サークルの中でも秘密にしてあったものの、ハルは無頓着に「ばれたっていいよ。マイはいい女だもん。マイのこと自慢したいくらいだから」と言い放つ。

「ばれたら、ほかのみんなが困っちゃうよ。だから内緒にしようね」と説得するのは麻衣子の方だった。

だがカオリには知られることとなった。ハルの友人を含めて4人でゴルフにいったとき、なるべく普通の装いで接したつもりだった。ハルの友人だって二人のことは知らないだろうと思っていたからだ。

あくまでも「サークルの仲間」の役割を徹していた。

ハルはそんな麻衣子をどう扱っていいのか、もてあますような困ったような顔つきをしていた。スコアもガタガタ。明らかに元気がない様子でうなだれている。

コースを歩きながらハルは「マイ、冷たい」とボソっとつぶやいた。

「だって……他の人もいるし。」

「でも冷たいのはやだな」

「わかったわかった」麻衣子は子供をあやすようにハルの腕をポンポンと叩いた。

「なんかすごく寂しくなった。マイはいつもやさしいのにつて」

大きな体をしているくせに、肩を落として寂しい表情をしているハルを見てると

すぐにも胸に頭をあずけて抱きしめなくなる。

心を広げて素直に麻衣子に気持ちをぶつけてくるハルにどうして冷たくしたんだらうと後悔してしまう。

「ごめんね、帰りにどこかでお茶でも飲もう」そう伝えるとハルはようやく機嫌を直した。

そんな二人の様子をじっと見ていたのだろうか、カオリは麻衣子にこう言った。

「もしかして二人はなんかあるの？」

抜け目ないカオリだから気づくこともあるかもしれないとは思っていた。

だがこうストレートに尋ねられ、もごもごと口ごもると肯定の意味としかとられない。

「ふん、あたし、ハルさんでいいなあって思ってたのにな。麻衣子にとられちゃった」

冗談か本気かとも迷うような言葉が続いた。カオリを覗うとからかうような目をしてはいるが

口元が歪んでいる。責められているようで少したじろいだ。

「まっ、仲良くね？ そうだ、これから二人で会うときとか私を使ってもいいよ。お互いさ、便利じゃない？ それに4人でゴルフ旅行とかもいけるし」

カオリに知られたことは、しょうがないとしても、まだ他にも知られることには抵抗がある。

だがゴルフ旅行という言葉に少し心が動かされた。

どこかに二人で泊まる・・・カオリと一緒にならば、不可能と思われることが現実になる。

次の日、待ち合わせの場所に行くとハルは携帯でメールを打っているところだった。

麻衣子を認めると、うれしそうに微笑んで軽く手を挙げた。

「今、カオリさんからメールきたんだ」

麻衣子は思わずハルを見返した。何の用事だったんだろう？

「なんて言ってきたの？」

「ん・・・たいしたことはないけど・・・ええと、マイのことが何かあったらいつでも私に相談してね〜だって」

ハルの顔は相変わらず笑ったままだ。

「時々メールのやりとりしてるの？」

ストローでアイスコーヒーの氷をつつきながら、ハルの顔を見ずに、なるべく口調が変わらないよう慎重に話した。

「オレからは出さないけど向こうからたまにくるかなあ〜なんてない内容だけ。」

まあ、きたら返事するけどね」

心の中で揺れ動くものがあつた。それは薄い雲のように麻衣子の心に影を落とした。

氷をまたつついた。言葉が早口になる。

「でも私のことで知りたいことがあつたら私に聞いてね。カオリじやなくて。だって彼女に聞いて彼女の言うことと私の言うことが違つたらどうする？」

思いがけない問いだったのかハルの顔に狼狽がよぎつた。

「そりゃ、マイの方を信じるよ」

「じゃあ、カオリとは私の話をしないでね」

「うん、分かった。オレ、カオリさんはマイの友達だから仲良くしようと思ってるだけだから」

愛想よくしてるけど、それ以上の気持ちはないから」

なんだかハルを問い詰めたような形になったことは好ましくないことだった。

だがカオリの不気味な行為が麻衣子を少しいらだたせた。

私とはほんの半年ほど前に知り合った仲ではないか。親友と呼べるほどの歴史の積み重ねも

心の寄せ合いもない。なのに何を知っているのか、それをダシにしてハルと近づこうとでも言うのか、そんな策略が見え隠れしている気がする。

「マイ、なんか怒ったの？」

ううん、とかぶりを振った。もう話は終わった。蒸し返したり、カオリを妙に意識するようなことは言いたくない。

「オレ、マイに嫌われるのだけが怖いんだ」

その一言で麻衣子は一っこりと微笑んだ。自分を無条件に愛してくれるハルのまなざしが
しっかりとマイを捉えている。

二人別々の生活がありながら、こうやって心を寄せ合うひと時。

この満たされた時間があるから、私は他の時間をやり過ごすことができるんだと麻衣子は思う。

その証拠にハルとの逢瀬の後は、夫に優しく接することができる。それは罪悪感からだけではないだろう。やはり幸福な時間がもたらす暖かな気持ちの人が優しくするのはないだろうか？

勝手な理屈だというのは百も承知。二人とも「生活」を見せて付き合っているのではない。

現実から逃避している関係だから、それ以上は望まない。ハルの人生を欲しいとも思わない。

お互いに足りないものをこの関係を続けることで補って心を潤わせてるんだ。

麻衣子は誰に言うこともなく心の中でつぶやいた。

171 酔っぱらったハル

付き合ってみるとそれまで漠然と相手に抱いていたものと違った部分に触れることがある。

そこで幻滅するか、意外性に触れて相手をもっと知りたくなったり、紙一重の部分だ。

ハルがお酒が好きだというのは分かっていた。飲む相手に事欠かず、それが仕事からみであるうと友人であるうと毎日飲むことは日課だった。

浴びるように飲むというわけでもないが、店を何軒かはしごする間に、足元がおぼつかなくなったり、別れた後、麻衣子に訳のわからないメールをすることがあっても、

それは許容範囲内の状況で酒癖が悪いという程度ではないだろう。

その日、麻衣子は早く仕事を終えたハルと飲む約束をしていた。

店に入るとき、ハルはいつもずっと麻衣子の少し後ろに立ち、軽く背中に手をやって

麻衣子を先に入れようとする。

それはひかえめなしぐさでありながら、ただのレディファーストという慣習的なマナー

ではないやさしさが背中の手から伝わってくる。

夫や今まで付き合った男性は店でも電車でも自分が先に立ち麻衣子のことはお構いなしに乗り込んでいく。まるで一緒に連れ立つ麻衣子の存在など忘れたかのようで、時折、見捨てられる気がしたものだ。

だからハルのその動作は自然に身についたものにせよ、相手を気遣う心配りがある気がして
麻衣子にとって好ましいことだった。

新しい店でカウンターの向こうの壁には四角くくりぬいてあって、しやれた小さな花びんやお皿、石でできた置物がそれぞれの四角い空間の棚に飾られ
バックライトでぼんやりと浮かび上がっていた。

二人の前には数種のお皿と焼酎のグラスが並んでいる。

お皿の上には焼き魚の骨だけが見事に残っている。

ハルは釣りが趣味とあって魚料理が好きだ。食べっぷりも気持ちよく、ポリポリと

いかにも丈夫そうない歯で小骨など噛み砕いて食べていく。

最近は箸の持ち方も不自由で見苦しい使い方をする若者が多い中、きちんとした箸使いで

魚の身と骨をさばっていく様は見ている心地よい。

それだけでハルがどんな育ち方をしたのか分かる気がする。

何気にタバコをくゆらすハルを見ていると、恥ずかしそうに声をひそめた。

「オレって指が短くて爪が太くてかつこ悪いだろう？自分の手を見られるのがいやなんだ」

「そう？そういえば、芸術家の手って感じじゃないね」

「そうなんだよなあ。どちらかというところ系？」軽く笑った。

ハルはあごにひげを伸ばしているが、もともと毛が薄いたちなのだろう。

まばらでひげというより、なんだか2、3日無精して剃っていない程度に見える。

体格も良く上背もそこそこにあるし、胸板も厚い。

なのに手と足になるとその背に比べて小さく、指も短い。

「昔から手を見られるのがいやだったんだ。女の前だと特にタバコを吸うときは気を使って、なるべく見られないようにしてた」

ハルでもそういう時期があったんだ。何事にも無頓着でおおらかに見えても

そんなささいなことでも気にすることがあるんだと麻衣子は新しい発見をした気になった。

そのときハルの携帯が鳴り出した。ごめん、と小さくつぶやくと携帯を手にして立ち上がり、出口に歩き出した。

「あつ、久しぶり〜どうしてる？」快活な声で話し出した。

数分して戻ってくると「今の高校時代の友達なんだけど、近くで飲んでるって」

「そうなんだ。会っの？」

「うん、久しぶりだからなあ。会いたいけど・・・オレ、最近、

マイとばっかり会ってるから付き合い悪くなってるんだ」ハルは苦笑した後、意を決したように言った。

「ねっマイも一緒に来ない？」

「えっ！？だって友達になんて紹介するの？」

「それは、彼女だって言うよ」

大したことではない調子で答えた。

「彼女って・・・ハルは結婚してるじゃない。そんなの、大丈夫なの？」

「平気だよ」

そう言いながら、ぐいっとビールを飲み干した。

そんなハルの態度に戸惑いを感じながらも、ハルの友人に会うという興味にも惹かれていた。

普通、こんな恋愛の形は誰にも秘密でおおっぴらにできるはずがない。

それなのにハルは最初からそうだが、すべてにおいて無頓着で気にしていない風だ。

男同士というものは、浮気にたいして寛容になるから、友人が浮気相手を連れてきても

それはそれで適当にあしらえるというのだろうか。

「あ、でも緊張するなあ。マイを友達に紹介するなんて。あいつらビックリするだろうなあ」

だがそういう言葉とは反対にうれしそうに顔をほころばせている。楽しいいたずらを思いついたような子供の顔だった。

待ち合わせの居酒屋でハルの友人たちはすでに何杯もビールをあけていた。

麻衣子を紹介して乾杯を終えると、自然と男性4人は共通の友達の話や、仕事の話、趣味の話に夢中になっていった。

麻衣子とは年代も違う。学校も違う。仕事の種類も違う。多分普通に生活していたらハルもその友人たちとも絶対に接点はなく、知り合うこともないだろう。

それがこうやってひとつのテーブルに向かい合っていることは不思議だが、やはり二人の関係を思うと、あまりはしゃいで話題にのっていくこともできず

麻衣子は所在無い立場になっていった。

2時間経過したところで麻衣子はお先に失礼するとハルに告げた。男同士で盛り上がればいいと単純に考えただけで深い意味などなかった。

だがハルの友人たちはどう思ったのか「俺たちも帰るよ。お開きにしよう」と言い出した。

もしかすると麻衣子たちに気を使ったのかもしれない。

「私のことは気にしないで。まだ飲んで。私は先に失礼するから」
麻衣子は明るく言うと、振り切るようにして店を出た。
ハルだつてまだ彼らと一緒にいたいはずだ。男同士の付き合いにそれ以上自分がかかわって
じゃまをしたくなかった。

駅に向かって歩いていると後ろから呼ぶ声が聞こえた。

「マイ、待てよ」

振り返るとハルが走ってくる。息が上がっていた。

「いつもだらだら歩いてるくせに、1人になると足が速いな」

「どうしたの？」

「あいつらが送ってけて」

「いいのに。ハル、まだ飲みたいでしょう？いいよ。私は1人で帰れるから」

ハルはむくれたような顔をした。

「なんだよ！そういうこと言うなよ。せっかくきたのに」

よく見ると顔は赤く、目も少し充血している。

「マイ……」「つぶやくとそのまま麻衣子にもたれかかってきた。

いつも酔うとキスをするのが常であるが、その時も同じようにキスをするように麻衣子を抱きしめたが、その後いやいやするように麻衣子を揺さぶった。

「ハル、どうしたの？酔ったの？」

「うん」

それほど飲んだらどうか？友人たちと飲んでいるときのハルはかなりしつかりしていた。

いつもより張り詰めていた感じもあつたくらいだ。やはり麻衣子がいるから緊張していたのだろうか。それが今、その糸が切れたようにハルはだらしなく麻衣子にもたれている。

「マイ、マイ・・・」

つぶやくように名前を繰り返す。

「どこかでお茶でも飲む？それとも休む？」

そっぴいなから麻衣子は時間をさりげなく調べた。もう時計は10時を指していた。

帰る時間が迫っている。だがこんなハルをどう扱ったらいいのか思ひあぐねていた。

ハルは疲れ果てた年寄りのように、麻衣子から離れると地面にぐったりとしゃがみこんだ。

頭をうなだれたまま、肩で息をしている。

通りには帰り道を急ぎ足で通るサラリーマンやら若者がちらりと八
ルを見ていく。

酔っぱらいなどこの街ではよく見かける光景の一つにすぎない。

「大丈夫？」と声をかけても首を振るばかりだ。

「マイ……オレ、苦しい」

「吐きたいの？」近寄って背中をさすろうとすると、麻衣子の手を
はねつけた。

「苦しいよ……オレ、マイのこと好きで好きでたまらないんだ」
はねつけられた手が空中で止まった。

「苦しくて苦しくて……苦しいから別れて……」

麻衣子は啞然とした。

18 - 揺れる心

その夜、麻衣子はなかなか寝付くことができなかった。

あの後、しばらくうつむいて座り込んでいたハルだったが、しばらくするとすくつと立ち上がり、

何事もなかったように「駅まで送ってくよ」と歩き出した。

その足元はおぼつかないということもなく、赤らんだ顔はしていたものの、目の焦点もしっかりしていた。

ハルが「苦しいから別れてくれ」と言った言葉の意味を問いただす余裕やタイミングもなく

麻衣子はそのまま帰ったのだが、ベッドに入るとその言葉が頭の中で何度も繰り返し返され

眠りを妨げる結果となってしまった。

一体、どうしたのだろうか？だがその意味を聞いてみることも怖かった。

その会話の続きで本当に別れることになったとしたら。

それは考えても見ない展開だ。それにまだ付き合い始めて3ヶ月。これからじゃないの、と納得のできない思いもあった。

次の日、電話の会話の中で麻衣子はさりげなく切り出した。

「昨日、酔ってたね」

「うん、マイを友達に紹介したろう？緊張してたのかな。いつもより酔いが回るのが

早くて、だらしなかつたな。ごめんな」

「覚えてないの？」

「何を？オレ、何かした？」

「……」

「言ってくれよ。もしかしてからんだりした？」

「あれは絡むって言うのかな？ハルさ、苦しいから私と別れてくれ
って言ってたよ」

「えっ!？」

絶句するとハルはしばらく押し黙った。

「酔うと自分でも思いがけないことを言っただな。全然覚えてない
よ」

「覚えてないんだ」

「うん、ヨッパのたわごとと思ってくれよ」

「別れるってのは？」

「あるわけないだろう」「とはっきり言葉で否定した後、心細い声で
付け加えた。

「でもマイのことを好きすぎて苦しいのは本当だな」

あまりにしんみりとした口調だったので麻衣子は言葉を返すことができなかった。

ハルの言葉がひとつひとつ体に染み込んでいった。そして暖かい感情が手を広げて

麻衣子を包み込むように抱きしめた。幸福感に満たされる。

人を好きになると幸せな気持ちになるってこういうことだ。

だが一方でハルの暴走するような感情に小さな恐れも抱いていた。

お互い家庭がある。本気で恋愛ができるわけがない。でも今の私たちは普通の恋人同士のようにお互いを想っている。人を愛することは素晴らしいことなのに、不倫の恋愛は

決して報われることも貰くこともできない。それどころか批判される対象になってしまう。

ハルだって責任のない愛だから、単純に好きだって言えるんだ。

麻衣子はいつもぐるぐると堂々巡りになる気持ちにもてあそばれていた。

そんな矢先に麻衣子の夫が海外出張にでかけることになった。

麻衣子がそのこと告げると「じゃあ、どこかに泊まるうよ」と誘ってきた。

お家の方は大丈夫なのと尋ねると「うん」と即答する。

何の躊躇いもなく迷いもない。こういうとき、ハルが結婚していることを

忘れてしまうことがある。

なぜならハルと会ってる時、彼の家族の影を感じるものはほとんどなかった。

車も子供がいるにしては、殺風景すぎるくらい何も物がなく片付いていた。

一緒にいる間に電話が鳴ることもメールもない。

それに安心もするが、一方でつかみどころのないハルに不安も感じる。

ハルは快活でよくしゃべる割りに、自分のことについては聞かれないこと以外は答えない。

家族の影を見せない分、余計な労力や枷を与えているのではないだろうか。

もしくはいつもこつこつやって家族を顧みない生活を送っているのだろうか。

どちらにしても深く立ち入ることなどできるはずがない。

今、ハルは自分だけを見ている。でももっともつと見てほしい、もっと自分に入り込んで欲しいと思いつつ、そうなることに恐れも感じていた。

昼から休みをとるよ、とハルは言つと、てきぱきとホテルの手配を始めた。

「デイズニールランドでも行こう。その日に泊まって、次の日の朝までは一緒にいられるよ」

ハルのうきうきとした気持ち伝わるように声が踊っていた。

「楽しみだな。マイ、その夜は寝かせないよ」とからかうように付け加えた。

そして麻衣子を引き寄せると、頭をなでていとおしそうに抱きしめた。

ハルの大きな体にすっぽりと包み込まれると、麻衣子は子供のよう
に安心する。

優しい手で頭をなでられる度に、こみ上げるものを感じる。

誰かに甘えるということを思い出させてくれ、素直に心が開放されるけれど

決して自分のものにはならない、自分の思い通りにはならないハル
に麻衣子は幸福感と
寂しさも感じていた。

19 - 危ない夜

夫が不在の間にハルとどこかに泊まる。

それはかなりの冒険だったが、以前から自分が不在のときにわざわざ自宅に電話して

麻衣子の存在を確認することはなかった。急用があれば携帯の方が連絡とりやすい。

それでも当日麻衣子の心のどこかに不安があった。

しかし実際にハルと一緒にデイズニールランドのアトラクションを楽しんだり、食事をしたりするうちにそんな杞憂もどこか消し飛んでしまった。

麻衣子は心から笑い、ハルとふざけあいながら二人の時間を楽しんだ。

手をつないで、ふとしたときに見つめ合って微笑む。それは学生時代の恋愛に等しかった。

20代のときの麻衣子……

その頃はお酒が飲めなかったが、ボーイフレンドに連れて行ってもらったバーで

ウオッカのカクテルにタバコと大人の女性の振りをしたが、結局は悪酔いをして

帰り道、みっともなく吐いてしまい、おまけに門限を破って父親に怒られた。

あの頃と今の自分は変わっただろうか。

今はお酒も飲めるようになったし、タバコの吸い方だって慣れたも

のだ。
でも心を覗くと昔のように、ちょっと背伸びしながら恋にも学生生活にも夢中で張り切っていた自分がいる気がする。

夜、ホテルのバーで軽くカクテルを飲みながら、そんなことを思っていた。

「楽しい？」ハルが聞く。麻衣子はこくんとうなずいた。

よしよしとでも言うように、ハルは麻衣子の頭をなで満足そうに笑う。

「可愛いなあ」ハルが目細める。

気持ちの入った言葉をまっすぐ自分に向けられるのなんて何年ぶりだろうか？

夫だって付き合い始めのころは私をちゃんと見つめていたはずだ。

だが今はどうだろう？二人でひとつの部屋に住んで入るものの、お互いの顔をじっと

見つめ合うことなどない。それが夫婦というものだろうか？

それにしてもあまりにもハルと夫は違いすぎる。

自分も夫もどこか変わってしまったのだろう。

そして知らず知らず、お互いを求めることのないほうが二人でいて過ごしやすい、

生活しやすいと思ってしまうたのかもしれない。

その夜は家に帰らなくていいという開放感から二人ともお酒が進ん

だ。

なだれ込むようにベッドに飛び込んで、お互いを求め合う。時間はたっぷりあるのに

二人は高揚する気持ちを抑え切れなかった。

ハルは最初の頃は避妊の有無を問いただすことをしていたが、この頃はハルがその瞬間を

迎えそうなときに麻衣子が今日はつけてね、とか今日は大丈夫と指示を出すようになっていた。

この日は少しばかり飲みすぎたお酒の勢いか思考が鈍くなっていた。とは言え、ハルの動きが激しくなってきたのを感じたときに麻衣子は、あえぎ声とともに

「今日は危ないから」と伝えた。

ハルは聞こえなかったのか動きを止めようとしなない。

「ハル？」

「ん……」

ハルの顔を下から覗き込むと、眉を寄せ口元をひきしめて何かに耐えている顔つきをしている。

「ねっ、あれ、つけてね」

「いやだ……このままマイの中で出す」

一瞬、麻衣子の頭の中が真っ白になった気がした。

酔いのため思考がぼんやりとしていて、ハルの言葉が頭の中から滑り落ちる。

えっ？ということは、とふいにその意味をしつかりとらえた時には、すでにハルは目的を果たし、それまでの動きを止め、麻衣子の上であえいでいた。

ハルの背中は汗でびっしょりだった。

「……出しちゃったの？」

「うん、気持ちよかった」

「つけてって言ったのに」

麻衣子の小さなつぶやきが届いたのか、ハルの顔が一瞬翳った。でもそれはすぐに消えて明るい声が返ってきた。

「大丈夫だよ、ほら、体を洗っておいで」

そう言うと、麻衣子のお尻をぱちんと叩いた。

ハルの平然さには救われたものの、一ヶ月後、麻衣子はこの一瞬の気の緩みを後悔することになる。

20 - まさかの不安

「来月、夏休みとって1泊のゴルフ旅行でも行きたいな。それぐらいは行けるんだろう?」

コーヒーを飲みながらハルが言った。

「うん、前泊とかは大丈夫。そういえばカオリと一緒に2対2で行かないかって言った。」

カオリの彼はプロだから、ハルも一緒にゴルフしてみたくない?」

「へえ、それはいいな。話、進めといてよ」

「うん、聞いてく」

もうすぐ梅雨明けだとテレビでは伝えていた。だが今日はもう真夏の日差しがアスファルトをじりじり照りつけている。ポロシャツからはみでた引き締まったハルの腕はゴルフや車の運転でもうすでに日焼けしている。

そのたくましい腕を組みなおして、ハルはまっすぐと麻衣子を見つめた。

「もし1年、付き合いが続いたら、記念に成田から飛行機にのってどこか行こうか?」

ちょっと映画でも観ようかと言った風にさりげない話し方だった。

麻衣子の驚いた顔を見ると、うれしそうに「どこの国に行きたい？」と聞いてくる。

調子を合わせて、「ハワイかなあ？ゴルフもショッピングもできるし」とはしゃぐように答えると、

ハルはまじめな顔で答えた。

「本気だよ。絶対に二人でどこかに行こう」

好きな男と二人きりで海外旅行、夢の話だ。

「ステキだね」

「どうした？なんだか言うほどうれしそうじゃない顔してる」

「そんなことないよ。そうできたら良いけどね・・・」

「うん、そりゃ、マイの方の事情もあるだろうから、オレが一方的には決められないけど。」

でも二人で行きたいんだ」

ハルの家の事情はどうなんだと聞いてみたかったが、麻衣子は言葉を飲み込んだ。

それを聞くと、封じ込めているハルの家族への罪悪感が顔をもたげる気がする。

聞かないこと、見ないこと、それが麻衣子を現実から逃避させている。

「約束しよなっ」

こうやってハルは自分の気持ちをまっすぐにぶつけてくる。
最初の戸惑いはどこへいったのか、ハルの気持ちがこうやって言葉
で表されると

麻衣子はゾクゾクと快感すら覚えてくる。

1年後、どうなっているだろう・・・と思いを巡らせていると、
ここ数日、

麻衣子を不安にさせている事柄が暗い雲のように心の中で広がった。

「あのね、実はね」

そう言いかけるとハルは麻衣子に視線を戻した。

「アレがまだこないんだ」

一瞬、ハルの表情が止まった。

「どのくらいこないんだ？」

「今のところ2週間だけど・・・」

「それじゃ、まだ分からないだろう？」

「でも私って今まで正確な方で遅れたことなんてほとんどない。こ
んなことなかったから

・・・」

後の言葉が続かなくて麻衣子はうつむいた。

「もう少し待ってみて、心配だったら病院にいくしかないだろうな」

「うん……でもどうしよう。もし、もし……」肝心の言葉が出てこない。麻衣子はその言葉を口にすることが怖かった。そしてハルの反応を見るのも。

「もし、できてたら」とハルが言った。静かな声だった。

「生みたいんだろう?」

麻衣子は顔を上げて思わず見返した。

「マイは子供いないもんな。欲しいだろう」

その言葉の意味をどうとらえたらいいのだろう? 生みたいといって生めるといふ

そんな簡単な理屈でいいはずがない。ハルは言葉を続けた。

「生みたかったら生めよ。今みたいな余裕のある生活はできないし、貧乏な暮らしになるだろうけど」

「どづいつ意味?」

「オレはマイのことを幸せにしたいという気持ちがある。生活面では金銭的に苦しくなるし、今みたいに遊んだりはできなくなるけど、マイに覚悟があれば、その気持ちを尊重するし、できるだけのことはする」

それは麻衣子が子供を欲したら、ハルは認めてくれるということだ。そしてその責任を一緒に負うという意味ではないか。

麻衣子は呆けた様にぽかんとしていた。そんな答えが戻ってくるとは想像もつかなかった。

でもその後、心に広がったのは安堵感だった。じわじわと広がる暖かな気持ち

麻衣子の胸の奥を衝き、不意にこみ上げてくる感情が襲ってきた。視界が揺れる。麻衣子は自分の目尻から涙が頬を伝わるのを知った。

21・ダブルデート

梅雨明け宣言して本格的な夏が始ると、東京ではいきなり連日真夏日が続いていた。

だが東京から200kmほど離れた高原のゴルフ場では、都会のうだるような暑さはどこにもない。日なたにいと、さすがに夏の日差しを感じるが、日陰に身を置くと、

照り返すような暑さがすつと抜けて、風が渡るとほてった体を冷やしてくれる。

各ホールを高い樹木でセパレートされたコースの景観は素晴らしく、麻衣子は時々携帯のカメラで写真を撮りながら、「きれいだなあ」とつぶやいていた。

ティーグラウンドではハルとカオリの恋人である渡辺というプロが話しをしている。

クラブを持ち上げたり、軽くスイングするハルを見ながら、渡辺はアドバイスでもしているのだろうか？

ハルはニコニコしながら、年上である渡辺に丁寧な対応で接している。

渡辺もハルのそういった態度を好ましく感じているようだ。

愛想もよく、適当にユーモアがあり、明るい印象。

調子良いという薄っぺらさはなく、自分の意見をはっきり述べるので、

意思の強さがとどころ感じられる。

麻衣子は不意に自分の身内や仲の良い友人にも紹介してみたくなる。実際にそんなことは不可能にしても、ハルだったら誰もが受け入れて好感をもってくれそう。そんな期待を持ってしまふ。

もしかして、妊娠が事実となっていれば、そんな状況もあつただらう。

だが現実とはならなかつた。

多分ハルの言葉で安心したのだろう。その安堵が麻衣子のリズムを戻したのか

数日後、麻衣子は妊娠していない確証を知つた。

その時の気持ちをどう表現したらいいのか、一言では表せないほどの複雑な心境だつた。

良かったという安心感がまず最初に起こつたが、その気持ちの裏に落胆する感情があるのを知つて、愕然とした。

麻衣子は思つた。もしかすると自分は心のどこかでハルの子供を生むことを

期待していたのではないだろうか？夫との間に子供が望めない。子供が欲しいという

気持ちはどこかに押し込まれていたが、それがこの一件で形を現した気がした。

安堵感の裏にひそんでいた自分の欲望にうすら恐ろしい思いもする。

何故なら、もし妊娠していたらどんな荒波が待っているか想像を絶する。

それに立ち向かう勇氣があるのだろうか？一時の気の迷いではないだろうか？

でもハルともっと強く結びつきたいという感情が歴然とあつた。

それほどハルは麻衣子の心の大半を占めるようになってしまったのだ。

「麻衣子、どうしたの？ぼんやりとして」

カオリが伺うように話しかけてきた。

「なんでもない。こっちは涼しくて最高だね」

「ホントホント、東京じゃあ考えられないね。でも良かったあ。お天気が良くて。」

せつかくの旅行だから、これで天気が悪いと最悪だもんね」

「そうだね。渡辺さんもよく承諾したね。前に奥さんの締め付けがすごいって言ってたじゃない。いけるかどうか心配してたんだ。私もカオリと一緒にでないとかっぱり家を出にくいし」

「うん。初めてなんだ。今回はプロの仲間とラウンドレッスンの仕事が入ったと

ウソついたみたい。二人だったらむずかしかったかもしれないけど、ハルさんがいるし

男性が一緒だと万が一のとき助かる」

「カオリ、なんかすごくうれしそう」

「そりゃそうだよ。お泊りなんて5年の間で初めてだもん」

「そっか……」

「麻衣子はさ、ハルさんと映画いたり、飲みにいたり、普通の恋人みたく

付き合ってるじゃない？私たちとは違う。うらやましいよ」

カオリの声が低くなった。

渡辺もハルも二人がそんな会話をしてるなど、想像もしていないだろう。

渡辺が勢いよくショットを放った。

「ナイスショット！」

「さすがプロだねえ、球筋が違うよ」

「そうだね、そこに惚れたってのもあるかな」カオリは機嫌を直したように笑った。

渡辺は一度も会社勤めなどしたことがないらしい。

狭いゴルフの世界だけで生き、テレビに出られるほどの成績はだせず長い間レッスンプロという職業に甘んじながら、試合に出て、わずかな望みを託す。

人に教える立場にいるからか、話しもよどみなく、流暢な言葉使いで相手をひきつける。

だが時折みせる暗い表情が彼の屈託を表している気がしていた。

前夜、食事をしたときに、彼は一度も財布を手にしなかった。

席をたつと当たり前のように、カオリが伝票を手にし支払いを済ました。

その間、渡辺は憤然と立っているだけで、顔には何の表情もなかった。

麻衣子の回りには、彼のようなうさんくささや卑屈さをうまく隠しながら世渡りをしている器用さを持ち合わせたタイプはいなかった。

だがゴルフをしているときの彼はやはりそれなりに一目を引くし魅力もある。

少し崩れた感のある危うい男性というのは、女心をひきつけるひとつでもあるかもしれない。

食事の後に酒を飲んだとき、それぞれ現実の生活からかけ離れて身をおいている状況と旅にでた開放感から、かなり酔いが回るのが早かった。

カオリは赤い顔をして渡辺に寄りかかるように身を寄せていた。

時折、髪をかきあげる動作をしながら、流し目で渡辺を見る。不自然なぐらいに甲高い声は甘さを含んでいて、その目には欲情の炎がチラチラ燃えている。

カオリの女の部分を見ると、何故か自分の方が恥ずかしくなる。

渡辺が酔った勢いか、二人のなれそめをおもしろがって話した中に「こいつはオレを誘惑してきたんですよ。気がついたらベッドにい

て上に乗つかてました」の言葉に、麻衣子は苦笑いをしたものの思わず下を向いてしまった。カオリは酔って気分が高揚し、鈍感になっていたのか「いや〜ね〜」と語尾を上げる甘える声をあげた。その手は渡辺の腿の上に置かれたままだった。

麻衣子は男女の湿った濃密な関係を明らさまに見せ付けられたようでたじろいだ。

渡辺のカオリをなめているような態度にも、渡辺に甘えながら媚を売るカオリにも少しばかりの嫌悪感を抱いた。

でもそれは一瞬だった。横を見るとハルはただ笑っていた。

その屈託のなさを見ると救われた気持ちになる。麻衣子は今ハルと一緒にだという現実だけを見つめていこうと思った。

22 - 恋に落ちて

この頃、麻衣子は学生時代の女友達と会うと、よく言われたものだった。

「麻衣子っていつまでも若いよね〜子供がないからかなあ」

「そう！？そうかなあ」

「なんかさあ、麻衣子と同じ年なのに私の方がオバサンくさいよあ。洋服も若いし、なんだかキラキラしてるし。ねっ、なんかいいことあったんじゃないの？」

「何にもないよ。でもゴルフ始めたでしょ？サークルって若い子が多いから、きつと

その若さをもらったのかもよ」

「そうか、いいなあ。私なんか何にもないよ……」

そうつぶやくと女友達たちは子供の学校の話、夫に対する小さなグチ、同じ社宅に住む奥様連中の噂話を始めた。

麻衣子に子供がいれば、そういった話にも付いていけるかもしれないが、ずっと働いていて

子供もつくらず、デインクスとして生活してきた麻衣子と、結婚しずっと主婦をしている友人たちとはいつも隔たりがあった。

麻衣子が仕事を辞めたことでまたつながりが復活しても、子供や夫や近所に住む誰か知らない人の噂話と狭まった話題に固執されると、

どうしても取り残された状態になっていく。

麻衣子が夫以外の男と付き合っているなんて想像もしていないに違いない。

不倫などドラマの世界のことで、日常的なものではない。

たとえ携帯やネットが発達して不倫人口が増えたと報じられているとしても、それは

高校生の援助交際と同じように、全体の何パーセントかに違いない。

麻衣子のはのきな顔をしてしゃべり続ける友人たちに、自分のことを告げたらどう反応するだろうか？と想像してみる。

驚愕、軽蔑、好奇心、羨望、きっとどれも当てはまる反応をするだろう。

女性は秘密の話が好きだ。

ハルがどれほど自分のことを愛しているか、そして二人がどれほど楽しく

甘い関係を持っているか、自分がキラキラと輝いているとしたら、その源は恋であることを

話たくなる。だがハルとのことは誰にも話せないのだ。

秘密の恋・・・そして素晴らしい恋。打ち明けたところで麻衣子がどれほど、この恋に

夢中になっているか、誰も理解できないだろう。

興味本位で根掘り葉掘り聞かれたあげくに説教なんかされたらたまらない。

目の前には少し前の古いデザインの洋服に身を包み、くすんだ顔色の友人たちが、生活の不満をだらだらとこぼしながら、お互いを慰めあっている。

うんざりした気持ちがシミのように広がっていった。

ふいに携帯のメール受信の音が鳴った。開くとハルからのメールだった。

「友達とのランチはどう？楽しんでる？いいなあ。オレもイタリアン食べたい。

マイにも逢いたいよぉ〜！！」

麻衣子は目の前にいる友人に対する優越感と幸福感で一杯になるのを感じながら携帯を閉じた。

今すぐにもハルに逢いたい。

友人たちとくだらないおしゃべりをするより、ハルの大きな体にもたれかかって、街を歩き
ウインドショッピングしたり、見つめ合って愛をささやくことの方がどれだけ楽しく
心を弾ませることだろう。

たとえわずかな時間でも、ここで数時間もおしゃべりに費やすより、何倍もの価値があるような気がする。

友人たちと会うなんて無駄な時間だと思った。前の麻衣子なら考え

られないことだ。

たとえ恋人がいても、友達といることや、1人で過ごす時間も大切でいとおしいものだったのに。そして恋人のことなど忘れて、純粋にその時を楽しむことができたのに。

今の麻衣子はハルが一番の存在になっている。

ハルがいなければ、すべての出来事もかすんで、つまらないものになってしまう。

ハルの麻衣子をみつめる切ないまなざしが目の前に現れた気がして麻衣子は目を閉じた。

暖かい気持ちがそれまでのうんざりとした気持ちをかき消していく。

人は幸福だと感じるとき、その後起こることなど考えもしない。ただその幸福な瞬間がずっと続けばいいと思っている。

でも永遠はない。絶対はない。だからだろうか？

心のどこかで無意識の恐れがあるのだろうか？

幸せは永遠に続くものではないと……

始まりは小さな出来事だった。

朝、麻衣子が携帯をみると、そこに20件の着信がありますというメッセージがあった。

驚いて着信履歴を見ると、そこにはとっくに別れたはずの上司の名

前が残っていた。

麻衣子の頭がじーんとしびれた。

2、3日前にメールがきたことを思い出す。

どうしたっけ！？と思いを巡らすと、返信をしていなかったと気がついた。

メールもただの近況伺いのような内容。

麻衣子の心の中を占めているのはハル。どうでもいいと感じたのがホンネだった。

それで返信することすら忘れてしまったのだろう。

だがこの着信の件数は普通ではない。麻衣子の中でふつつつの小さな怒りの感情がこみ上げてきた。

23 - ストーカー!?

もう季節は9月に入ろうとしていた。

まだ残暑が厳しい日々が続いていたが、雲の形がもくもくとした入道雲から

スジ雲に変わってきている。夕方になって陽が落ちると、風が違う。

夏の終わりを惜しむかのように、追い立てられながら夏休みをあわてとつて海外に

出かけていくものもある。これから始まる新学期に憂鬱な思いを抱きながら、夏の思い出にひたるものもある。季節が終わると、ひとつの出来事がいつも終わる気がする。

ハルと並んでカウンターに腰かけ、ビールのグラスを傾け、ガラス越しに空の色が段々と闇を濃くしていくのをながめながら、麻衣子はぼんやりとしていた。

「あのね」と切り出して電話の件を話してみようかと思ったが、そこで言葉はとぎれてしまった。

「ん!？」ハルの視線がそそがれる。

話すべきかどうか迷いがあったから、麻衣子はしばらく黙り込んだ。

「どっしたの?」

「うん・・・いや、なんでもないよ」

「何だよ。言いかけて途中でやめるなよ」

「うん・・・大したことじゃないし」

「言つて見るよ。オレはなんでも聞くよ。オレたち、そんな希薄な関係じゃないはずだろ。」

「マイが何か悩んでるんだつたらオレはちゃんと話して欲しい」

強い口調だった。

「実はね」と麻衣子は着信の件を話し出した。ハルは黙って聞いている。

「多分、何か用事でもあったのかもしれないけど、ちょっと行きすぎな気がするよね。」

それも夜中に電話をかけてきたみたい。付き合っていた頃だって、そんなことはなかったんだけど、どうしちゃったのかな」

「それで、相手に聞いてみたの？」

「ううん、まだ」

ハルは口を閉ざして、視線を麻衣子からはずすとどこか遠くを見て黙り込んだ。

沈黙はほんの数秒かもしれない。でもそれがなんだか長く感じられた。

「おまえ、ちゃんとその男と別れたのか？」

予想もしない言葉が返ってきた。

「えっ！？何、言ってるの？別れたに決まってるじゃない」

「相手は納得してなかったんじゃないのか？だからそうやって連絡とってくるんじゃないのか？」

「だって向こうから別れを切り出したんだよ。もちろんそれまでもうだめかなって

状態が続いていて、ほとんど終わっていたもの」

「ふん」

「私だってどういってもりか分からないよ。でも聞いてみる。そしてもうこういことは

しないでってちゃんとしよう」

「言えるのか？」

「大丈夫。ちゃんとしよう」

「でもなあ、20回も電話するなんて普通じゃない。こっちはそう思っても、相手は全然納得してないってこともあって、ストーカー行為に走るやつもいるからな」

「そんな人じゃないよ」

「分からないよっ」ハルは急に大声を出した。グラスをカウンターに叩きつけるように置いた。

麻衣子はびくつとして思わず身をすくめた。

こんな風に声を荒げるハルを見たのは初めてだった。

ひとつ席を空けて並んで座っているカップルが何事かと二人を伺っている。

「ストーカーっているんだよ。昔、別れた後、相手の女がストーカーのようになったことがあるんだ。毎日電話かけて、携帯にも会社にも、拳銃の果てに家にまでかけてきた。結局、番号を全部変えたよ」

思いがけない話を切り出すハル。何気に話すけれど、事は重大だったに違いない。

「相手の人と話してみたの？」

「そんなことしないよ。徹底的に無視。でもとにかくしつこかった」

「そんな人じゃないと思う。とにかく一度話してみるから」

「大丈夫か!？」

「うん」

そう答えたものの、ストーカーという言葉に麻衣子は少なからず違和感を感じた。

彼はストーカーではない。2年の付き合いの中で彼の仕事ぶり、私

生活を見てきてそういうタイプではないと考えられる。ストーカーというのは粘着質で思い込みや被害者意識の強い人間で、内にこもった性格と思える。

少し気弱でグチっぽいところがあつたけれど、社会性のある大人だ。多分、酔つた勢いで

電話をかけてしまった、そんなところだろう。

だがハルの麻衣子を責めたような口調はどういうことだ。

そして彼がストーカーのように付きまとわれたことがあるということ。それこそが

彼が相手に対して不誠実な態度をもって別れたことを意味するのではないか。

自分の知らないハルの一部分が垣間見える気がする。

つかみどころのない小さな不安が襲つ。

「ごめんな。ちょっと大声だして。マイが心配になつたからなんだ」
取り成すつもりか、ハルは謝つた。

「オレ、本当にマイが好きだから、他の男にとられたくないから、やきもちを焼いたんだよ。

今までこんな風に誰かにやきもちを焼くことなかったのに。マイだけだよ」

その言葉は麻衣子を安心させる役目を果たした。

やきもちの結果ね、麻衣子はハルを心の中で許した。

だが何か心の底でチリチリするものがある。自分の気に入っていた
お店が様変わりしてしまい
居心地悪い気分になるような違和感。

それがなんだか分からないのでハルに対して身構えてしまう。

「でもマジで他の男にとられそうになったら、オレがストーカーに
なるかも」

冗談っぽく続けたので、思わず笑おうとしてハルを伺うと、その目
は笑っていなかった。

じっと麻衣子をまっすぐ見据えている視線が強すぎて麻衣子はうつ
むいた。

何か言わなくては・・・という気持ちは空回りするばかりで言葉は
続かなかった。

24 - カオリの不満

「それって単なるやきもちじゃん。愛されてるってことだよ」

最近のカオリとの電話の内容はゴルフよりも、お互いの恋人の話に集中していた。

結局、元上司に電話してみると、相手は「あれ、そんなに掛けたっけ？ごめんごめん。

酔っ払ってたんだ。麻衣ちゃんの声を久しぶりに聞きたかっただけだよ」と言った。

重たい気持ちで電話したのに、相手は拍子抜けするくらい明るかった。

電話を切ると、大きなため息とともに、安堵感が一杯にこみ上げたが、

ハルにいちいち言うこともなかった、そうすればハルを不愉快にさせることも

ストーリー話にもならなかったのに、そんな後悔が麻衣子を襲った。

「そうかな？」

「そう、でもさ、その上司って本当に大丈夫？男と女は何があるかわからないから」

「大丈夫だよ。あ、そうだけ？なんて言われちゃった。こっちが考えすぎていた。だからハルにも余計なこと言っちゃったなあって後悔してる」

「ふふ、でもさ、男の人って適度にやきもちやかせるくらいがいい

のよ。

私たちって恋人といつても、先がないから、遊びの恋愛じゃない。結婚するわけないし。

お互い、家庭があるんだから、いつ終わりになってもおかしくないもん。恋人気分を

持続させるには、少々のやきもちとかなないとね」

カオリはいつもの確にずばりとホンネを言う。不倫の恋愛なんて「遊び」そっぴいきるくせに

彼女が恋人の渡辺に執着していることも知っている。

カオリは何かと麻衣子たちの状況を知りたがった。そして自分たちの関係に当てはめたりして

麻衣子にアドバイスでもするように、あれこれ言うのだ。

「私たちは所詮愛人じゃない？奥さんが大事だというのは分かるけど、愛人だからこそ求めて欲しいってこともあると思うの」

カオリは男女のセックスの話を持ち出した。最近、会う頻度が少なくなり、あの旅行以来体の関係がないという。

「やっぱり男が女を求めて欲しいのよ。女からそんなこと言えないじゃない。向こうが欲しい欲しいって言って、そう？しょうがないわねって感じて応じるのが愛人じゃない？」

「そう？わからない。確かに女性からは言えないけど・・・」

「あのねえ、アレがない男女の関係なんてありえないじゃない！」

カオリは怒りがこみ上げたのか、まくし立てるように言い切った。

「麻衣子のそこはどうなの？」

「えっ！？うーん、そこそこ」と笑った。「でもハルはお酒が好きだから、お酒だけ飲むってことも多いよ。ゴルフに行ったときは終わったらそのまま帰ることもあるし」

「でも誘うときは向こうからでしょ？」

「そうだね。でもこの間、いつもオレばかりだからたまにはマイから誘われたいって冗談っぽく言ってたよ」

「へえ〜仲いいじゃん」

口調が皮肉混じりなのに気づいて麻衣子はあわてて付け加えた。

「そんなことないよ。この間だつてちょっと怖かったし、そのストーカー話で気まずい雰囲気になるし・・・」

「愛されてる人が何言ってるのよ。ハルさんの気持ち、分かってあげなよ」

カオリはそう言つと、今度は自分たちの関係のグチをこぼしだした。

最近、会ってないこともありカオリはいらいらしているようだった。

会うときは急に呼び出されることが常らしい。それは彼の仕事と家庭の束縛から仕方がないことなのに、当然のようにカオリの予定など伺いもしない自分本位の呼び出し、それと

会っている間にかかる費用をすべてカオリ持ちというのにも不満を
持っていた。

長い間に蓄積され、積もった鬱憤は今、麻衣子に吐き出されていた。

おそらく今まで誰にも言えない恋愛関係であるから、こうして同じ
立場にいる者にぶちまけることで気持ちを楽にするのだろう。

カオリのグチは果てしなく続いていた。

「お金のことだって、言いたくないけど、私が全部払うんだよ。ゴ
ルフのときもそうだし

どこかお店に入っても向こうは当然って顔して財布だって出しやし
ない。

そりゃ、お金がないのを知ってるから、私も何も言わないけど、い
つもいつもだと

なんでだよって気持ちになる。しょうがないなあとも思うよ。奥さ
んはほったらかしで

そのくせお金には厳しくて彼に十分なお金を与えてないもん」

「それはひどいなあ。本当にそれでいいの？そんなに不満があるな
ら言ってみたら？」

「言えるわけじゃないじゃない！ いやだったら別れればいいだろうけ
ど、しょうがないなあとも思ってる。私がいなかったらもっとお金
に困ってるよ」

どうも話の端々からカオリはすでに渡辺にかなりのお金を使ってい
るようだった。

カオリは不満を吐き出しながら、自分がいなきやだめなんだと言っている。

突き放せないのは、愛情と頼られることでカオリ自身の存在価値があることを認めているのだろう。

「カオリは世話好きなタイプじゃない。それに好きな人なんだし、やってあげたって

思ってたら、相手に見返り求めちゃうから不満もあるけど、好きな人のために自分が好きでやってるんだと思えばいいじゃない」

「分かってるよ。自分が好きでカレのためにしてるって思えばいいんでしょう？

理屈では分かってるけど・・・」と言葉を濁して黙り込んだ。

二人のことは二人しか分からない。渡辺がどういうつもりなのか、この状況で満足しているのか、カオリはどうしたいのか、関係を変えようとするのなら二人で決めるしかない。

「遊び」の恋愛と言い切ってはみても、心は割り切ったり、理性で抑えたりは

できやしない。不安定な関係だからこそ、気持ちも上がったたり、下がったり、そして

小さなきっかけでたやすく壊れてしまう。

「ああ〜ハルさんみたいな人だったらいいのになあ」

突然カオリはそう言った。

「私、ハルさんって最初に会ったときからいいなあって思ってたんだ。なのに、麻衣子に

とられちゃった。知らない間に付き合ってるんだもの」

電話のためカオリの顔色や表情が見えないから、本気なのか冗談なのか判断できない。

だがその言葉は麻衣子を不愉快にさせた。

ハルは最初から私の方にアプローチしてきたんだから、と言いたかった。

とられた！？一体、この人、何を言い出すのか・・・

初めてカオリに対して不信感を持った。

25 - 暗い予感

朝から雲の動きが早かった。あつという間に薄暗くなってきたかと思つと

ぽつぽつと降り出した雨は、足を早め本格的な降りとなってきた。

喫茶店を出たところで、麻衣子とハルは途方にくれたように立ちすくんだ。

お互いの顔を見合わせる。ハルは顔を崩して微笑みかけると「走ろう」と麻衣子の手をとった。

駐車場まではほんの数分。ハルと麻衣子は手をつないだまま、飛び跳ねるように駆けた。

時折、小さな水溜りからしぶきがあがる。

片手を頭にかざして少しでも髪がぬれないように、でももう一方の手はハルとしっかり繋がれたまま。

温かな体温の伝わり、引つ張るように走るハル、必死で付いていきながら麻衣子の心は踊った。

車のドアを開けて、車内にすべりこんだ。二人とも息が少し上がっている。

麻衣子はバッグから小さなタオルハンカチを取り出して濡れたハルの顔や頭を拭いた。

「結構、降ってるね〜ハル、ほら、拭かないと」

「オレはいいよ、マイ、オレが拭いてやるよ」

そう言うと、ハルは麻衣子の髪や腕やあちこちを拭いていった。顔を拭こうとしてじっと見つめ、クスッと笑うと、麻衣子に軽くキスをしてきた。

「ぬれねずみみたいで可愛い」

クスクス含み笑いをしながら、麻衣子の頬やおでこにキスをしていく。

そしてじっと目を合わせると、ゆっくりと顔を近づけて、唇に長いキスをした。

雨音がガラスを叩いている。雨粒はガラスを流れ落ちて、幾つもの筋が後から後からつくられていく。遠くに道を行きかう人々が煙ったようにぼんやりと揺れていた。

二人はむさぼるようにお互いにキスを交わし、合間に見つめ合って、小さく微笑んだ。

ハルは麻衣子の手を握ったまま、その手をいとおしそうになでる。そのまま手に唇をつけると、「愛してるよ」とつぶやいた。

外の社会から遮断された車の中。静かで二人だけの空間。通い合う気持ち。

麻衣子は幸福で満たされた気分一杯だった。

その時、静寂を破るように麻衣子の携帯の着信音が鳴った。

見ると新規メールありと書いてある。それは大学時代の男友達からのメールだった。

「明後日、予定どおり大丈夫？」

年に1、2度会う同級生、同じような職種だったので情報交換や仕事の話を相談したりする仲で男女の関係もなくずっと付き合ってきた。数日前に「昼メシでも食べよう」と誘われて久々に会う約束をしていた。

「誰？」

「うん、友達」

ハルは少し黙ると視線を麻衣子からはずし、いきなり切り出した。

「明日もこの調子だと雨だな。明日のゴルフ、明後日に変更しないか？」

「えっ!？」

「雨のゴルフはいやだろう?」

「……でもハル、急に休みを変えて大丈夫なの？」

「うん、オレは大丈夫」強く言った。

「……」麻衣子は少しの間、逡巡した。ためらうように「でも明後日、友達と約束があるんだけど」と言った。

その言葉を聞いたはずなのに、ハルはそのことには触れずに、麻衣子に視線を戻すと、

「明後日にしよう」と決め付けるように言い放った。

これほどハルが強く自分の意見を押し通すのも珍しいことだった。有無を言わせない強引さが見える。

「わかった・・・友達に変更してくれるよう言つよ」

麻衣子は携帯を開くとすばやくメールを打った。「都合悪くなったので、また別の日にしてね」

折り返しすぐメールが返ってきた。「了解！じゃあ、また連絡するね」

その間ハルの視線はずっと麻衣子に注がれていた。何も悪いことをしてるわけではない、そう自分に言い聞かせても、じっと見つめる視線が強すぎて麻衣子は落ち着かなかった。

携帯を閉じて「大丈夫。明後日にしよう」とハルに答えたものの、麻衣子はすつきりとしめない気持ちだった。ハルを目の前にして、こんなメールを打つこともいやだったし、ウソについて友達との約束を果たさないこともいやだった。

それにもっと腑に落ちないのは、今までにないハルの強引さだった。仕事をそれほど自由に休むことなどできないはずなのに、どうしたというんだろつ。

少々の雨のゴルフなんて大したことでもない。

先ほどの幸福な気持ちが一瞬で冷たく萎んでいく。

ハルの横顔に浮かぶ強く引き締まった口元には微笑みはなかった。

明後日、楽しいゴルフが一転して、麻衣子を突き落とす事態が起きるとは

このときは想像もしなかった。

26 - 置き去り

前日の雨が嘘のように澄みきった青空が広がり、秋晴れのさわやかな天気だった。

絶好のラウンド日和。

いつものことながら、2人で回るラウンドは楽しかった・・・はずと麻衣子は後で思う。

何故ならこの時のこと、ハルがどんな様子だったのか、どんな話をしたのか記憶にないからだ。

ラウンドが終了して、アプローチ練習場で、2人で少し練習をした。ハルは麻衣子にあれこれ、打ち方を教えた。いつものハルだった。

「二人でアプの名手になろうな」笑っていた。

早いスタートだったから、お風呂に入って、出てきた時間はまだ3時台。

数日前、帰りにゴルフ場近辺のホテルでも寄ってみようかとハルは提案していた。

ところが、クラブハウスを後にすると、突然、「飲みに行くか」と言い出した。

「車どうするの？」

「このまま都内まで行って、会社に車をおくから」

「そう？」

ハルの家はコースから逆方向。わざわざ都内までくるの？

うれしいと思う反面、麻衣子はその行動を少しいぶかしくも感じた。だがまだ一緒にいられる、その感情の方が大きかった。そうしてそれぞれの車を

運転して都内に向かった。

居酒屋に入ったのはまだ6時前。客足は少なく、店内はがらんとしていた。

飲みながらいつものようにたわいもない話が続く。

麻衣子は飲んだ後、きつとホテルに行くだろうと踏んでいた。それは付き合ってる2人のセックスをする時期とかタイミングとかで思うものだし、もともとホテルに行く提案をしたのハルだったから、その気だと思い込んでいた。

麻衣子も久しぶりにそういった場所で二人きりのゆっくりとした時間を過ごしたかった。

だが自分から誘うというのは気恥ずかしいものだし、切り出しにくい。

2件目で飲んでるとき、何気ない様子を装いながら麻衣子は切り出した。

「2人つきりになれるところにはいかない？」

以前ハルが言った、いつも俺ばかり誘ってるから、たまにはマイに誘ってもらいたいな、その言葉にも後押しされた。

すぐに乗ってくると思っていたのに、帰ってきた言葉は

「俺は飲みたいんだ」

麻衣子は照れてるのかなと思った。

「またまた・・・いいじゃん、行くつよ」

軽く腕をゆさぶった。

「うるさいなあ、今日は飲みたいんだよ」

ぴしゃりとした拒絶の言葉。

「どうしたの？」

「酒を飲みたいときだってあるだろう？」

そう言われると何も言い返せない。だが麻衣子はまだ油断していた。ハルはかなりの酒好きだからもう少し飲みたいんだな、ただそんな風に軽くとらえていた。

その日はピッチが早かった。最初の居酒屋で焼酎、2件目は、ウィスキー、一緒に飲む機会が多いけれど、これほどの勢いは初めて見るものだった。

麻衣子はハルの行動に心配はしたものの、お酒が飲みたいと言い張るハルを持って余していた。

だが、まだ時間は早い。もう少ししたらもう一度誘ってみようかなと思っていた。

その店を出ると、ハルの様子に変化が訪れた。いつもは麻衣子の手をとり、時にはキスをしてくるのにむくれているように懨然としている。腕をからませようとすると振り払った。

麻衣子は酔っ払ってるのかな、と思った。

「ねえ、やっぱりちょっと行かない？」

甘えるように腕に手をからませた。だがハルはその手をまたしても振り払った。

「いつもいつもお前の思うとおりにはならないよ」

そして冷たい口調でこう続けた。

「マイ、おまえ、本当は今日、男と会う約束だったんだろう？」

「えっ？」

「なんか変だと思ったんだ。そうだろう？」

突然のことで頭が混乱した。

「男って……確かに大学の同級生とランチの約束はしたけど」

「やっぱり、男って言わなかったじゃないか」

「そうだけど、同級生だし……昔からの友達だし……久しぶりだし、話もしたいって」

「言われて・・・」

「なんで私はこんな言い訳じみたことを言わなきゃいけないんだろう？麻衣子は完全に混乱していた。何かハルに不信を抱かせるような行動をしたのだろうか？思いつかない。たかがランチじゃない、という思いもある。」

「でもランチだよ。夜でもないし、飲みに行くわけじゃないし」

「2人きりだろ？俺は同級生だって女と2人で会わないよ」

「ただの友達だよ」

「男と女に友情なんかあるもんか。そんなの相手はなんか下心があるに決まってるだろう！」

「断定的な言い方だった。」

「お前はそういういいかげんなところがあるんだよ！」

「・・・」

「これは嫉妬というもの？ハルがそんなことで怒るとは、まったく想像していなかった麻衣子だがハルの冷ややかな目が貫いていく。」

「いたたまれない気分で答えた。」

「ごめん。もう、行かないから」

「言わなかったことにも腹を立ててるんだよ。今までだって友達と」

ランチって言ってたけど、本当に女だったんだか」

冷たく突き放した言い方だった。

「嘘はついてないよ。これからはちゃんと言うから」

ハルのぴりぴりとした感情が麻衣子を刺激していた。

麻衣子は争いは好まない。人とぶつかり合って、けんかした経験もない。そうなる前に、引いてしまつか、がまんするか。こんなささいなことだという思いもあったが、今はなんとかハルの怒りを納めることに必死だった。

「ごめん、本当に悪かったから」

何度も麻衣子は繰り返した。

「どうしようかなあ、許してやるかなあ」

もったいぶった口調でハルは言った。目はまだ冷ややかなままだった。猫か犬をいたぶるような目。口元はゆがんでいる。こんなハルを見たのは初めてだった。

人当たりの良い、はぎれのよい口調、無邪気な笑顔、麻衣子の慣れ親しんだハルはどこにもいない。

あまりの変化に麻衣子の背筋がぞくりと震えた。恐怖心が起こる。目じりに涙さえ浮かんだ。

ただ麻衣子はこの状況を回避することだけを考えていた。とにかく仲直りして気持ちよく

一日を終えたい。

「もう一軒行こう、ね」

好きなお酒を二人で楽しく飲めば、打開できるかもしれない。ハルを引っ張るようにして、また店に入った。

そこはの古いレコードをかけるショットバーだった。店が悪かった。大きなスピーカー。

遅い時間だったので狭い店は酔った客で混んでいた。片隅にあった小さなテーブルに向かい合って座った。音が大きく、人の話し声もまけじと大きく、ざわざわしていて落ち着かない。

麻衣子がトイレに中座し、テーブルに戻ると、そこにハルはいなかった。

テーブルの上には一万円札が一枚置かれていた。

麻衣子はそれをみた瞬間、立ちすくんだ。

冷たい水を全身にかけられたように、一瞬にして血が引いていく。

のんびりした店員にどなるようにせかして、おつりをもらい足早に店をでた。

一体、どうしたんだろう？何があったんだろう？まだ怒ってるの？

麻衣子は完全に我を失っていた。大きな波のような動揺が心の中で荒れている。

震える手で携帯を鳴らす、留守番電話。何度も何度も番号を押した。

「うるさいんだよ」「ようやく出た。

「どうしたの？」

「帰るよ」

「このままだといやだよ。戻ってきて。お願い」

麻衣子は必死だった。搾り出す声でハルに哀願した。

沈黙の後、ようやく聞いてきた。

「……………どこにいるの？」

「の交差点」

「しょうがないな」

ハルは戻ってきた。怒ってるのか、どうなのかわからない表情だが、麻衣子を見る目は以前として冷たいままだった。

麻衣子はどういう言葉をかければいいのか、一体どうしたらハルの気持ち収まるのか、検討もつかなかった。

ごめんね、といくら謝っても、彼は嘲笑を浮かべて答えない。

そこは幹線道路の大きな交差点。ほとんど真夜中とはいえ、車も人も行き交っている。

そこで、はたからみると痴話げんかをしているような二人。

行きかう人々が好奇心をむき出しにして見て行く。気の毒そうな顔つき、何事かと揶揄する目、見ちゃいけないものを見てしまったやるせない顔、いろんな視線が麻衣子の不安を増長させていく。

でも麻衣子はそんなこと関係なかった。

なんとかハルとの関係を戻したい、そんな一心だった。

店に置き去りにされたという仕打ちに怒るといふより、自分を見捨てる、切り捨てるのではないかという恐怖の方が大きかった。

流れ出る涙をおさえ切れず、顔をおおって立ち尽くしていた。

どんな言葉を言ったのか、どんな言葉を浴びせられたのか、麻衣子はその時のことを覚えていない。

ただハルは嘲笑を浮かべたまま、泣いている麻衣子を慰めるでもなく腕をくんでいた。

麻衣子が近寄ると、腕をぴしゃりとはねつけ肩のあたりを押した。

後ろよろけた麻衣子に「じゃあな、バイバイ」そう言って体を翻すと歩き出した。

何事もなかったようにしつかりとした足取り。

姿勢をぴんと張ったまま軽やかに歩く姿はいつものハルと変わらな

い。
だが今は麻衣子さえ寄せ付けない。

麻衣子は再び置き去りにされた。

波間にただよう流木のように、人の流れの間でいつまでも漂っていた。

27 - ハルの毒

どうやって家にたどり着いたのか分からなかった。

玄関のドアを開けると、真っ暗な中に廊下の壁にともされた小さな電球の光が浮かび上がっている。黒い靴が乱暴に脱ぎ捨てられたままになっていた。

廊下を通り過ぎるときに閉ざされたドアを一瞥したが、その向こうは静まり返っている。

麻衣子はほっとした。今日のように重たい砂を飲み込んだような気持ちで帰って、夫と顔を合わす羽目になったら、一体どんな顔をすればいいだろうと思う。

麻衣子と夫はとうに寝室を別にしていた。

このドアの向こうで夫は熟睡していることだろう。

麻衣子がどこに出かけたのか、何時に戻ってきたのか、朝になっても聞かれることはないだろう。

麻衣子が仕事をしていたからというのもひとつの理由だろう。

結婚が遅く1人の生活が長かったから、自分主義のところがあるからかもしれない。

だが大目に見たとしても、麻衣子たち夫婦は会話も少なく、麻衣子はよその夫婦に比べて

自分たちのよそよそさに時折、やりきれない気持ちになった。

だがこれといって騒ぎ立てるほどの非があるわけでもない。

やはり一緒に暮らしていると家族の情は確かに蓄積していく。いく

ら夫婦関係が壊れていたとしても、これからも共に生きていくのなら、お互いにゆずったりガマンしたりするのは当たり前だし、生活態度まで破綻することはできない。
だから麻衣子は外泊することもなかったし、遅くとも11時には家に帰ることにしていた。

ベッドにもぐりこんでも麻衣子は寝付けなかった。

ハルはどうしただろう？ハルの家に戻る電車はもうないかもしれない。
どこかに泊まったんだろうか？それともタクシーで帰ったんだろうか？

冷たい視線を残したまま、身を翻して軽やかに立ち去った後姿が浮かぶ。

いつもと変わらぬ歩き姿。だが麻衣子をしっかりと拒絶していた。

自分でも訳の分からない渦に巻き込まれたような、振って沸いた災難に襲われたような、
どうしていいのか検討のつかない不安。

ただこんなことで？という思いも心の奥底にある。

結論も出ず、ただ暗い気持ちのまま朝を迎えた。

そしてハルからメールがきた。

「昨日はごめん。酔っ払ってたんだ」と一言。苦笑を表す絵文字がついている。

メールではなく、こういふときはちゃんと話したい。麻衣子は電話をかけた。

「昨日、すごく怒ってたよ。謝っても謝っても、許してくれなかった」

「全然、覚えてないんだよ」

「恐かった……キレちゃったのかなって」

「ごめんな。ただの飲み過ぎだよ」

ハルは10代のとき、かなりやんちゃだったと自分で話していた。ケンカもしたし、バイクに乗っていてお酒は未成年のときから飲んでた。だが18歳のときに、バイクで事故を起こし、大怪我を負ってから無茶をすることをやめたらしい。

ハルは謝っている。麻衣子はそれでももどかしく感じていた。ちゃんと会って顔を見たい。自分がどれだけ不安な気持ちなのか分かって欲しい。そしていつものようにやさしく抱きしめられたら、麻衣子の心も溶けるだろう。

「不安になった。ハルって私のこと好きなのかって」

「好きだよ。愛してるよ」

愛という言葉を口にしているのに、その平坦な声の調子に麻衣子は不安をぬぐえない。

「ねえ、今日は会えないかな？」

「昨日休んだから、今日は忙しいんだ」

「ちょっとでもいいんだ、お願い」

「ん……忙しいから、ほんの30分くらいしか時間取れないよ」

「それでもいい、どこに行けばいいの？」

「お客のところにいった帰りだから、遅れるかもしれないけど」

そう言うとハルは時間と場所を告げた。

会えばきつとなんでもなかったようにまた以前の二人になれる。

でもあの置き去りにされたときの、自分のみじめさといったらなかつた。

そして思いがけなく、怒りよりも、見捨てられる方の恐怖といったら。

麻衣子は思い出だすと手先が冷たくなって身震いした。

今まで男性にそういう仕打ちをされたことはなかった。

付き合った男性は皆、たとえば、麻衣子が理不尽なわがままを言ったとしても

声を荒げたりすることなく紳士の振る舞いをする人ばかり。

ハルはかなり嫉妬深いということなんだろうか？

麻衣子の知っているハルとは違う……

いや、これもハルなんだろう。付き合いだして半年、本当は今まで何も知らなかったのかもしれない。

遅れてきたハルは「本当に時間がないんだ」とせかすように喫茶店に入った。

麻衣子はうつむき加減でハルの様子を伺った。ここまできたのに、実際に顔を見ると、
どう切り出せばいいのか困惑するばかりだった。

「昨日は酔ってただけだから。もうあんなことはしないよ」

「分かった・・・これからはちゃんと何でも言うから、隠しごとはしないから」

麻衣子の繰言には反応せずハルは「携帯見せて」と言った。

麻衣子の手から奪い取るように携帯を手にとると、かちゃかちゃといじりだした。

「ふん」面白くなさそうな顔つきでボタンと閉じた。

「特におかしなメールはなさそうだな」

麻衣子は体が一瞬、膠着したように固まった。
ハルの目は笑っていない。

じゃあ、と立ち上がると仕事に戻るハルはせかせかと足早に立ち去

った。

ちゃんと謝ってくれたし、ただ酔っ払っていたただけだと言ってたし、ハルは私を愛してると言ってくれたし……

麻衣子は何度も心の中で繰り返した。片隅にぬぐえない違和感もあるけれど
それがなんだと言うのだろう。ハルを失うことに比べたら、すべては何の意味もないことだ。

この日から麻衣子はハルのもつ「毒」に犯されていった。

281 再び不安な夜

朝、いつものように「おはよう」というメールがくる。

その時間はまちまちだったけれど、麻衣子はいつも構えるように携帯を意識するようになった。

メールが入ると、すぐに返事を打つ。お天気や昨日でかけた街の様子、晚ご飯につくった料理の感想、そんな世間話を織り交ぜて返事を出す。最後には「仕事がんばってね」と付け加えた。

メールが10時を過ぎてもこないとなんだか不安になった。そういうときは自分からメールを送る。

「やっぱりコミュニケーションが大事よ。メールがこなかったらこっちから出せばいいじゃない？麻衣子って自分が優位な立場にいたもんだから、ハルさんのこと侮るっていうか上から目線になってたんじゃないの？」

カオリの言葉だった。

「男の人はほつといたら何するかわからないよ。ちゃんと繋ぎ止めときたいなら、メールや電話しかないじゃない。私たちの関係ってそれだけが二人を繋ぐ道具なんだもん」

結婚している二人ならけんかしてもお互いをうとましく思っても家に帰らなければいけない。

いやでも会話する場合もあるだろう。

恋人ならどうだろう？同じように携帯やメールが繋ぐものとしても、堂々と世間に公開できる関係ならば、友人や仕事やお互いの家族やら、そういった繋がりもある。

不倫には何も無い。ただ携帯とメールだけの繋がり……当たり前前のことなのに

この間のけんかが起こるまで、普通の恋人同士の気分でした。不倫関係であっても、二人の間にはそれを越えた関係が確立していると錯覚していた。

ハルから「昨日、何をしてたの？」と尋ねられると、麻衣子は一瞬、言葉に詰まる。

努めて明るく答えるようにしてるが、内心、自分の話し方が不自然ではないか、

ハルに気を使いすぎではないかと身構えてしまう。

何も隠し事をしてはいないのに、女友達とランチに行くことを伝えるときにも

声がつわずつている感じがする。慌てて「その友達というのは……

・」と説明するのだが

言い訳じみた自分に疲れてしまう。

ハルが「オレはマイがウソをついたらわかるんだからな」ととどめのように刺した言葉。

それが無意識に麻衣子の心に深く根をおろしたのだろうか。

どうしてもハルに対して後ろめたさに似た感情を持ってしまう。

だが実際のハルは、かわらぬ優しさを示してくれた。

麻衣子の誕生日、どこかで食事でもしてお祝いしよう提案したのはハルだった。

カジュアルなイタリア料理を食べさせるレストランで、差し出されたピンクのリボンで結ばれた小さな箱。

「開けてみな」少しはにかんだような微笑を浮かべている。

ときどきしながら開けると、箱の中身はピアスだった。小さなダイヤがキラキラ光っている。

「うわ〜ステキ！」思わず声が出た。そういえば、ちょっと前に、プレゼントは何がいい？と聞かれて、ピアスがいいなあとつぶやいたのを思い出した。

「覚えてくれてたんだ！ありがとう」

麻衣子は満面の笑顔で答えた。

「安物で悪いけど・・・どういのがいいか分からなくて迷ったよ」

「すごくステキだよ。こういうのが欲しかったの。うれしい」

麻衣子はそのピアスをつけてみて、鏡で確認してみた。

「うん、可愛い。これだとゴルフにもつけていけるし。本当にありがとう」

ハルは照れたように顔をほころばせた。

ブランド好きな麻衣子の夫が見れば、何、これ？と一瞥であしらわ
されそうなピアス。

だが麻衣子はどれだけ高価なピアスであっても、ハルがプレゼント
してくれたものには
かなわないと思っていた。

心がこもっている、ハルは私を愛してくれる、その気持ちが入った
プレゼントに
代わるものなどあるわけがない。

麻衣子は弾む心とともに、ハルと自分の間には変わらない愛が存在
すると思った。

「雨降って地固まる」って言葉もあるじゃない。
恋人同士もケンカしたりしながら、また愛を深めることがあるんだ
から。

だが、それは通過点に過ぎなかった。二人がこれから恋から愛に変
わる過渡期を
どうやってうまくやり過ぎし、水をやって花を育てるように、愛を
育てていくか・・・
それには通過点にあるハードルを越えていかなければいけない。

誰が言い出したのか、サークル内で飲み会をやるつという話になっ
た。

ゴルフばかりではなく、お酒を飲みながら親睦を兼ねようという趣

旨だった。

酒好きなハルはそれに乗って、メンバーをつのっていた。

麻衣子にも出ること勧めていた。

ハルが出るなら、と軽い気持ちで出席すると、意外にも10人ほどが集まり盛会となった。

ハルは男性数人で端の方に座り、男同士でゴルフ談義に熱中している。

麻衣子はカオリの横に座った。前にはサークルの仲間であるマサという男性と

ルリという女性が座っている。

マサはお酒が進むにつれてルリに絡むようになった。何気ない風を装って髪を触ったり

体を密着させるようにルリに近づいて、何か小声で話しかけている。

ルリが思い切り嫌そうな表情を見せているのに気づきもしない。

そのうちすくつと立つと、「トイレ」とつぶやき中座した。だがなかなか戻ってこない。

麻衣子は嫌な予感がしたが、下を向いていた。

そつとカオリを伺うと、カオリは左に座っている男性と楽しそうに会話をしている。

赤らんだ顔で焦点の合わない目で当たりを見ていたマサが突然、麻衣子に視線を向けた。

標準があつた獲物をとらえる目をしている。

「マイさく、おとなしいですね。飲んでる？」

「ええ、お酒は好きだけどあんまり強くないんで」と愛想笑いをし

た。

「マイさんって本当にきれいですよね〜ゴルフも上手だし。今度、絶対一緒の組にしてもらおう」と

「一緒の組になった事はない？」と一応話しを合わせる。

「ないですよ〜」そういいながら「そこそとポケットをさぐっている。

携帯を出すとマサは自分の番行表示の画面を出して、「マイさん、携帯のアドレス交換しましょうよ」と麻衣子に携帯を差し出してきた。

「ええっ……」

「今度、プライベートでも行きましょうよ。もちろん誰か他にも誘いますから、安心してください。オレは二人つきりでもいいですけどね〜」

へへっと笑っている。その卑しい口元を見ていると麻衣子はぞっとした。

サークル内でコンペやラウンドの機会があり、幹事である人と緊急のためと、携帯のアドレスを連絡しあうこともある。だがマサの口調にすんなりと応じる気持ちになれない麻衣子はどうしたものかと困り果てていた。

「とりあえずサークルの掲示板でトピでもたてて。また具体的な話になったらそのときにも……」

そう言っでごまかそうとしたがマサはしつこかった。

「いいじゃないですかあゝ別にゝ携帯おしえるぐらいゝ」

大きな声で麻衣子に絡んできた。

麻衣子が助け舟を求めるかのようにあたりを見回すと、ハルの視線とぶつかった。

表情には何もあらわれていないが、じつと麻衣子たちを見つめている。だが麻衣子と

視線が合うと、すっとはずしてまた回りとの会話に戻っていった。

怒ったのだろうか。でも私は何も悪いことをしていない。マサがしつこいだけ。

そう思いながらもハルにまた変な誤解をされたのではないかと気が気じゃなかった。

その心配は的中した。

麻衣子がトイレから出てくるときにハルと鉢合わせになった。

「お前、マサにからまれてたのか？」

「うん、携帯の番号教えろってしつこくて」

「教えたんじゃないだろうな。アイツ、マイのことが好きなんだよ」

「でもさ、サークルの仲間だから、それほど無視できないし。どうやって断ればいいの？」

「そんなの適当にあしらえよ。前にマイのこといろいろ聞きまくってたし。気に入らないな」

ハルの強張った顔を見て、麻衣子は緊張した。

「確か帰る方向が同じだけど、絶対に一緒に帰るなよ」

お開きになり店を出ると、みんな次はどうしようかと店の前でたむろする格好となった。

麻衣子はそれを尻目にすばやくタクシーを止めた。

「じゃあ、私はここで」と乗り込もうとすると、人の間を割って出てきたマサが

「じゃあ、オレも一緒の方向だから」と有無を言わず乗り込んできた。

麻衣子に拒否する間も与えないすばやい行動で、あっけにとられたが乗ってきたものを押し出すこともできない。

走り出したタクシーの中から振り返ると、人ごみの向こうに背の高いハルの後姿が見えた。

その夜、ハルは2次会、3次会と流れてどこかに泊まったのだろうか、

麻衣子がメールを送っても返事もないし電話もなかった。

何度か携帯を手に取り、メールや着信のないことを確認しても、それでも麻衣子は
また携帯を見てしまう。

緊張で眠れない長い夜、二人の間には何も恐れるものはないと自分に言い聞かせても

麻衣子の何か得体の知れない不安が足音をしのばせて近づいてくる予感がしていた。

29 - カオリの不倫がばれる

翌朝、連絡はついたもののハルは明らかに不機嫌だった。

「あれだけマサと一緒に帰るなどいったのに、なんでだよ。アイツに何かされなかったか？」

オレはいやなんだよ。何もなくても一緒に帰るだけでも」

「私だつていやだったけど、むりやりタクシーに乗ってくるんだもの。でも乗ったら

酔っ払ってたらしくてほとんど寝てたよ」

本当は麻衣子をしつこくゴルフに誘ったのだが、それは伏せといた。

「それよりハルはどうしたの？昨日は家に帰らなかったの？」

「ああ、あれからカラオケ行って、その後はよく覚えてないけど、どこかでまた飲んで、最後は一人でカプセルホテルに泊まった」

「誰が一緒だったの？」

数人の名前を挙げた。その中にはカオリの名前もあった。

「カオリもいったんだ。帰るとき一緒に帰ろうかと探したんだけど、見当たらなかった」

「かなり酔ってたみたいだった。あれは危ないなあ」

「何が？」

「いや……」ハルは言葉を濁した。

「とにかくマサには気をつけるよ。アイツはマイのことが好きなんだからなっ」

断言するように言い放つと一方的に電話は切られた。

これもハルの嫉妬からくるもので単純な思い込みに過ぎないのだからうけど、それにしても

麻衣子にしたって理不尽に責められるので気持ち良いものではない。

だからといって麻衣子が反論するとハルはそれを反抗と捉えて余計に話しを複雑化しそうだった。麻衣子の理屈づけの意見のひとつひとつに対して、ハルは諭すか、攻撃するか、言いくるめるか、あらゆる手法で麻衣子を屈服させようとする。

しまいには「オレの言うことを黙ってきいていればいいんだ」と声を荒げることもあった。

そうすると麻衣子は萎縮して何も言えなくなる。今まで近くに感じていたハルが、突然見知らぬ人のように思える。自分が知ってるハルではないようだ、いや、

本当はハルのことなど、何も知らないのではないかという考えに行き着く。

本名、会社名、住んでるところ、兄弟の有無、出身校、ゴルフと釣りとお酒が好き、

それらは知っているけれど、彼の家族のことは一切知らない。

ハルの口から出たこともない。休日どう過ごしているのか、子供の名前はなんていうのか、

子供と何をして遊ぶのか？父兄参観や運動会には行くのか？家族旅行はどこへいくのか？

妻とはどんな会話をするのか？

麻衣子を知っているのはほんの片側のハル、もう一方の生活に密着したハルを知らない。

最初の頃は自分のことを思いやって家族のことには触れないのだろうと思った。

それもあるだろうが、ハルは家族を顧みない、家族をないがしろにしその上にあぐらをかいた

とんでもないワガママな男ではないのだろうか？

麻衣子の前にも付き合った女性がいる。どうしてそうなったのか聞くと、

「子供を生むと女って母親になるんだよな。セックスできなくなるんだよ。ありきたりだけど

拒否されてから、よそに目がいったということかな」と答えた。

麻衣子と似たような状況で、よくある話だが、皆が皆、だからといって浮気に走ることはあるまい。麻衣子と同様、ハルもお互いの家族を裏切りながら、理由付けして自分を正当化している気がした。

だが麻衣子はそれでも今だけだとしても、自分を向いてくれているハルが好きなのだ。

この感情にどうやってもウソはつけない。

そしてこの関係ができるだけ長く続くことを望んでいる。

時折、麻衣子はハルと一緒にになったらどうなるのだろう、と夢想さえした。

ハルのために酒の肴を作り、ハルの服を洗濯し、一緒にゴルフにいたり、お酒を飲む。

少なくとも自分とちゃんと向き合って話をしてくれる気がする。

ケンカしても、ぶつかり合っても、無言の壁で背中を向ける夫よりは100倍も

人間らしい関係だと思う。

カオリはそんな麻衣子を一笑に付した。

「ばかだなあ。何考えてるの。家族あつての恋愛でしょう。ハルさんだって家庭を壊すつもりなんかないよ。楽しくやらなきゃ。あんまり重くなると男はいやになるよ」

頭で理解していても心のどこかに空虚さを感じて寂しくなる。この寂しくなるという感情がハルを好きだという気持ちの表れに違いはない。

カオリにどう自分の気持ちを伝えたら分かってくれるだろうと思いついて巡らしていると

突然予想もしない話を始めた。

カオリの恋人である渡辺の妻にカオリの存在を知られたというのだ。

「なんでばれてしまったの？」

「2人で見るところを、娘に見られてしまったようなの。娘は中学生で、私が彼を送っていく途中、車の中で2人で見るところを見られたみたい」

「車に2人で見ただけで疑うの？」

「いつも警戒して家から離れたところで彼をおろすんだけど、そのときキスしちゃったのよね」

「ええ!？」

「油断してた。娘は具合悪くて学校を早退して家に戻る途中だったのよ。」

娘が彼に攻撃的な態度を取るから、叱ったら、お父さんは好きなことをしてるくせにして逆切れされたらしいの」

「奥さんにも知られたんだ」

「うん、それで家の中は大荒れらしい」

「カオリの方は大丈夫なの？」

「とりあえずね・・・私の方には何も言って来ない。多分浮気だといつて奥さんを丸めこもうとしてるんじゃないかな？だから連絡は控えてる。もしかしたらこれっきりかも。家庭を壊す気なんてない

んだもの、ばれたら終わりだよ……」

「そうだね。ばれたら終わりだよね」

麻衣子がつぶやきながら自分にも当てはまることだと思っていた。

カオリは渡辺と会えないことを悲観しているのか、それとも自分の家庭が脅かされることを

心配しているのか、所在なさげにしている。せかせかとタバコに火をつけては、数回すっただけですぐ消してしまう。そんな動作を繰り返していた。

「これからどうするの？」

「分からない。でも私だって彼のためにずいぶん尽くしてきたよ。お金のこと言いたくないけど、彼のためになんか使った。本当なら奥さんに言っただけでやりたいくらい。でも法律で守られた妻は強いから私が悪者になるのよね。あゝなんだかばかかしい。このまま黙って別れてあげるのもくやしい」

本気で腹を立てているようだった。その言葉の中に、渡辺の妻に対してすまない気持ちも

彼の家族に与えたであろう苦しみにも何の感情も抱いていないようだ。

「カオリ、でもこれを機にすっぱり別れたほうがいいよ。いつかは別れる付き合いだったんだし」

このまますんなりカオリが別れを受け入れておけば、そのまま渡辺と2度と会わず、きっぱりと別れていれば……

物事に「たれば」「はないけれど、麻衣子は後々、そのことを痛切に感じるのだった。

30 - 脆い不倫関係

その後、カオリは毎日のように麻衣子に電話をかけたたり、会ってとくくと渡辺の話を繰り返した。

しばらくカオリが静観しようとした連絡を経つと、渡辺が逆にカオリを追いかけてきた。

メールや電話を何度もかけてきてカオリを説得するようだった。

妻にはばれてないから、大丈夫だから、というのが渡辺のセリフだった。

カオリ自身、追われている状況にまんざらでもない様子だった。

「ばかにしている、私のことをなめてるのかな」と批判する言葉を口にしても、その口調が

少し上ずって、顔が紅潮していることに麻衣子は気づいていた。

しかしロープの上を綱渡りしているような危なっかしい状況で、2人が連絡を取り合うことがさらなる展開を呼び込んだ。

「昨日、奥さんから電話があったの」

「ええっ！？で、なんて？」

「2度と夫に会わないでくれって。スクールもやめてくれって言われた」

「渡辺さんと付き合ってることを認めたの？」

「認めるわけじゃない！最初にどんな付き合いをされてるんでかって聞かれたから」

ただのコーチと生徒ですって言ったの。でもそんなはずないでしょうってしつこく言うのね。

こっちも相手が何か握っていていつてるのかどうか分からないし、ここでごめんなさいなんて謝ると、責めてきそうだったから、逆に何を勘違いされてるのか分かりませんがそれは誤解ですって言い切った」

「奥さんは信じたのかな？」

「さあ〜ねちねちと言うの。彼、どうも携帯を奥さんに見られたらしい」

「え〜奥さん、そんなことするんだ。渡辺さんもカオリのメールとか消してなかったの？」

「消してるはずなんだけどなあ。私も不思議なのよ。いくら私の名前があったとしても」

「コーチと生徒だから問題ないし。なんで私だと分かったのかなあ」「渡辺さんはどう言ってるの？彼は奥さんをコントロールできなかったのかな？」

「どうだか、まったくアイツときたら、頼りなさすぎる。奥さんに頭が上がらないんだろな。その電話の後、話しようと思ったけど、今度はアイツが逃げててつかまらないの。レッスンの時につかまえて話そうと思ったけど、私を避けてた」

「カオリ、もう係わり合いにならないほうがいいよ。カオリだって自分の家庭にもし何か

あったら困るでしょう？この間もばれたら終わりだって言ってたじ

やない。潮時だと思う
もう会わないほうがいいよ」

「……………」

カオリは黙り込んだ。

「麻衣子は自分が幸せだから、人のことを簡単に言うのね」

予想もしない言葉が返ってきた。

「ハルさんとラブラブで仲良いモンね。余裕があるから、そうやって上から目線で言うんでしょ」

「そんな・・・カオリのことは心配だからそう思っただけだよ。ハルのことは関係ない」

「そういうけど、もし麻衣子がハルさんと別れなければいけない状況になって、はい、分かりましたって即、割り切ることができるの？」

麻衣子は返す言葉を失った。

ハルと別れるーそれは今の麻衣子にとっては考えられない、考える
と恐ろしくなる気がして

そのことは頭のどこかにあっても見ないようにしてる事柄だった。

だがいつかは別れる、いつだか分からないけど、不倫の関係には終
わりがある。

カオリだってそれは理解しているはずなのに、土壇場になるとじたばたしてしまい、心が納得しないのだろうか。

2人はお互いにうつむいたままテーブルをはさんで黙りこくってしまった。

隣のテーブルにいた若い母親らしき女性がベビーカーにのせた子供がぐずっているのを

あやしている。麻衣子は何気にそちらを見ると、カオリもじっと見ていた。

麻衣子もカオリも子供がいれば、こうやって子供の世話に追われながら、夫以外の男性に

想いを寄せる時間も余裕もなかっただろう。

当たり前のように子供ができると思っていたのに、二人とも恵まれず、心のどこかにある空洞が何かをいつも渴望していた。本当は渡辺だってハルだって、誰であろうと、そんな先のない

不倫恋愛などしていても満たされるはずはないのだ。

不倫でなくなれば、この関係を進展させれば・・・でもハルはどうだろう？

愛していると口では言うものの、そこにどれだけの程度の愛があるのだろうか？

「カオリが渡辺さんのことをきっぱり割り切ることができない気持ちも分かるよ。

でも奥さんの攻撃も怖い。奥さんがどんな人が分からないけれど、もしカオリの旦那さんに

知れ渡ることになったらカオリだって困るでしょう？」

「それは困るけど・・・とにかく一度あいつを捕まえて話をしてみるわ」

その話はそこで終わりだった。第三者である麻衣子がこれ以上突っ込む状況でもなかった。

それにカオリのイライラした様子や麻衣子に突っかかるような言動にも閉口していた。

「そういえば、この間の飲み会で麻衣子はすぐ帰ったじゃない？あの後2次会行ったんだけど」

カオリはそこで言葉をくくると麻衣子を直視した。口元が少し上がっている。揶揄するような目つきが麻衣子にいやな予感を与えた。

「ハルさん、ずいぶん飲んでたわよ」

「そうなんだ。カプセルホテルに泊まったって言ってた」

「ふん。とにかくくべろんべろんに酔っ払って、女の子に絡んできたわよ」

「えっ？そうなの？そんなに酒癖悪かったかなあ」

「ほら、若い子がいるじゃない。ミエちゃんとかいうナースの子。あの子にべたべた。」

向こうも調子よく合わせてたよ。ちゃんと捕まえてないと取られちゃうかも。

ハルさんってゴルフうまいし、ちょっとやんちゃで、話もおもしろいし、絶対に

もてるタイプだと思う」

笑いながらタバコの煙を勢いよく吐き出す。完全にあしらうような態度だ。

ますます麻衣子は気が滅入るのを感じた。どうしてカオリはこんなに人の気持ちを逆なですることはかり言うのだろう、と同時に麻衣子の中で小さな不安が広がった。

ハルとは週に2度は顔を合わせている。会わないときはメールがくる。でも1度返信したら

それで終わり。夜に電話をしたりメールを交わしたりはなくなった。

「多分酔っぱらってただけだと思うけどね。まあ、気にしなくてもいいかな」

とってつけたようなカオリの言葉は何一つ慰めにもならない。表面は気にしていない振りをしてながら、麻衣子の心の中にはさざ波が立っていた。

31 - 噛み合わない気持ち

何度か寝返りを打ったが、眠りに落ちることがなかなかできなかった。

最近の麻衣子は寝つきが悪くなっている。カオリのこと、ハルのこと、ひとつのことに

思いを巡らせると、それがどんどん広がって、目が冴えてくるのだ。

諦め気分で部屋を出ると、台所で水を飲んだ。そのとき、カチャリとドアを開ける音が聞こえた。夫が眠そうな顔つきで台所を覗いた。

「どうしたの？」

「ちょっと眠れなくて」

「ふん」

何のリアクションもなく、そのままトイレに向かった。麻衣子は後姿を見ながら、自分が今考えることを告げたらどんな顔をするだろうか、と思う。

それでもやっぱり無関心な顔つきをするのだろうか。

こうやって一つ屋根の下で暮らしていても、今の私たちはお互いを別々の檻に住む動物のように住み分けをすることで、居心地よくしている節がある。

本当はぶつかり合って、本音を出して、そこから生まれるものもあるのだから。

今はそんなことする労力すら湧いてこない。

携帯の画面を開く。新着メールはない。最近ハルと夜にメールのやりとりをすることがない。

以前は麻衣子が携帯を放置して返事が遅れると。催促のメールが入ったものだ。

「どうして、返事くれないんだよ」「ちゃんと携帯をみるよ」「お願い、マイちゃん、返事くれ」

などとメールひとつでもハルは麻衣子との繋がりに熱心だった。

そしてメールの最後には「おやすみ」とハートマーク。

それを見るたびに麻衣子は心が暖かくなった。ハルが酒好きで毎日、誰かと飲みに出かけていたとしても、彼が会っていない間に何をしていたよ、そんなこと気にすることなく、ただ安心して眠りについていた。

ところが今は形はないけれど漠然とした不安が麻衣子の心の底にある。

飲み会の話にしたって、何故ハルに聞けないのだろうと思う。付き合ってるんだし

素直に聞けばいいじゃない？ ちよつとぐらいの嫉妬もさじ加減では、2人のスパイスになつて逆にいいかも。でも上手な言葉が出てこない。甘えを含んだ可愛い焼きもちはいいいけれど、度が過ぎると重くなるし、ハルの場合は逆襲がありそうだ。

言葉を迷ってるうちに麻衣子は臆病になり、結局はハルを問いただすことを諦めてしまった。

「ねえ、女性って言葉だけで安心するものなのよ。そう思うと簡単だと思わない？」

「好きとか愛してるとか言うのか？」

「うん、最近、聞いてないなあ」と明るく言ってみた。

「男はなかなか口では言えないもんだよ。言わなくても分かるだろうっ？」

「でもさ、やっぱりたまには言っしてほしいな。メールでもいいよ。その一言で安心すると」

「思えば簡単だと思わない？」

「うん、そんな簡単でもないけどな。努力するよ」言葉を少し切ってハルは続けた。

「麻衣子は相手の方が自分に熱くなっていないといやなんだな。オマエは自分が惚れるというより相手が惚れられて付き合うタイプだろう？今までの恋愛だって、相手から言われて付き合ったって言うた。だからいつまでも相手が自分より下でないといやなんだ」

話がおかしな方向にずれてきた。

「そんなことないよ。付き合うきっかけはどうであれ、付き合ってる間は対等だよ」

「違うな、自分はクールでいたいんだよ。で相手が追いかけてる状態が心地いいのさ。」

確かにマイはいい女だと思うよ。オレはマイに付き合ってもらって
る立場なんだろうな」

ハルは自虐的な笑いを浮かべた。

なんでこんな話になるのだろう。何か自分がとんでもないことを吹
っかけたのだろうか？

かみ合わない会話に麻衣子は気持ちが悪くなってきた。

飲み屋で勘定を済ませ、薄暗い階段を登りだすと、後ろから名前を
呼ばれた。

振り返ると、ハルは口元にやわらかい笑みを浮かべて近づき、麻衣
子にキスをしてきた。

そのキスはとても甘く、麻衣子はいつもこのキスだけですべてを許
してしまいたくなる。

体の芯からじんわりとハルを愛おしく思う気持ちがこみ上げる。

なんだかんだ言ってもハルは自分を愛している。これがその証拠だ。

もうすぐクリスマス。2人の付き合いで初めての迎えるクリスマス。
泊りがけでゴルフに行こうと計画をしている。そのことを思うと胸
が躍る。思い切り楽しいクリスマスにしようと思っていた。

12月に入ると、街も周りも年末に向かってあわただしさを増して
きた。

追い立てられるような月だが麻衣子は嫌いじゃない。イベントごと
も多く華やかな気持ちになれる。普段会わない友人とも連絡を取り
合っ、忘年会をする。

ただどこへいっても人の多さだけには閉口するが。

さすがのハルも仕事や忘年会の付き合いやらで忙しく、何度か都合がつかず、やっと会えたのは12月も中旬だった。

昼間でも人出が多く、待ち合わせの場所が分かりにくく、麻衣子は到着したのは

約束の時間より5分遅れていた。

麻衣子は久しぶりに会うのを楽しみにしていたが、ハルを一目見たときから、

その気持ちがしばむのを感じた。ハルは明らかに不機嫌な顔つきをしていた。

遅れてごめんね、という麻衣子の言葉も上の空だし、麻衣子を見る目に何の輝きもなかった。

疲れたから休みたいというハルの言葉のまま、すぐにホテルに入った。

途端に携帯が鳴った。

「はい、あ、お世話になってます。はい……はい……申し訳ありませんが、

その件については　の方に問い合わせてもらえませんか？えっ！
？……

はい……それは申し訳ありません。……はい、分かりました。

では調べてまた連絡させてもらえます。失礼します」

ハルは電源を切ると携帯をテーブルの上に投げ出した。

「全く、オレのせいじゃないっていうんだ！」と不愉快そうに声を

荒げるので、
声をひそめていた麻衣子はびくつとした。

「何度も言っただけなのに物分りの悪いヤツだ」

「どうしたの？」

ハルは初めて麻衣子に気づいたような顔をした。いや、と口ごもったが明らかにハルはいつもと違っていた。仕事で何かトラブルがあったのだろうか？

そのまま重い沈黙の中でテレビから発信されるアナウンサーの声だけが、部屋に響く。

ソファに座ってただ視線をテレビに向けているだけのハルに、麻衣子は「疲れているようだね。少し眠ったら？」と言うのが精一杯だった。

「いいよ。マイ、こっちにこいよ」

側に行くと「服を脱げよ」威圧的な言葉を向けた。

射るような視線を浴びながらのろのろと服を脱ぐと、ハルは自分のズボンのベルトをはずし
パンツも脱ぎ捨てた。

「なめてくれ」

ハルが何を考えているのか分からないまま言いなりに従い、ハルのものが十分な状態になると、ベッドに移動し、自分は寝たまま麻衣子の上から乗るようにさせた。

何の愛の言葉もなく、麻衣子への前戯もなく、あつという間にハルは終わった。

「ね、愛してる？」体を離して息を整えようとしているハルに尋ねる。

「ああ、めちゃめちゃ愛してるよ」

麻衣子の方を見ずに答えた。何か言葉を言いかけた麻衣子を遮るようにハルは

「ちよつと寝るわ、1時間くらいしたら起こして」と言つと、ごろんと麻衣子に背を向けた。

麻衣子は耐えられない気持ちさがこみ上げてきた。でも言葉がでない。疲れているからだ、今はそつとしておいたほうがいい。忙しい間を縫って会いにきてくれたんだから責めるべきではない。納得するよつに自分を諫めようとしたが、ときどきと動悸が早くなってくる。

「ねえ、もうちよつとやさしくしてよ。久しぶりに会えたんだし、私にも気を使ってよ」

やさしく甘えるようにいったつもりだった。

「オレだつて気を使つてるけどな」

「何かあったら私にも話して。力にはなれなくても、話は聞くよ。愚痴だつてなんだつていいから」

「オレはそういうことは話せるタイプじゃないんだ。いいから、しばらくそっとしてくれ。」

クリスマスプレゼント、欲しがっていたパターを買ってやるから、なっ」

麻衣子の機嫌をとろうとでも思ったのだろう。麻衣子はうれいよ
うな、すっきりしないような複雑な気持ちでハルの背中を見ていた。

ホテルを出るとあたりには夜の闇が立ち込めていた。冬は夜の訪れ
が早い。

でも闇がホテルを出るときに感じる気まずさを覆い隠してくれる。
ハルが麻衣子の手をとった。

「ごめん、一緒に飲みにもいけたらいいんだけど。今日は疲れ
てるから帰るわ」

手に力が入った。

「いいよ。気にしないで。ゆっくり休んでね」

本当は優しい人なのに違う……

そうは思っても、麻衣子の心の中では釈然とする思いもあった。

ハルの言葉は確かに麻衣子を気遣うものかもしれない。でもそれが
上滑りにすべって

心の中に染みないのはどうしてだろう？ ただ取り繕っているに
すぎないと思うのは

麻衣子の単なるワガママかもしれない。

だが麻衣子は手をつなぎ、駅までの道のりを一緒に歩きながらも、心が寄り添っていないのを感じていた。

クリスマス、もしかしたらそれが今年最後に会える機会かもしれない。

ハルと笑って楽しく過ごしたい。そして気持ちよく来年を迎えたい。

それは麻衣子の中ですがるようなひとつの期待だった。その年は寒く、例年に比べて雪が多かった。そしてそれが麻衣子を期待を裏切る結果になった。

32・暗い気持ちのまま

クリスマスー冬の一番華やいだイベント。この日をどうやって心に残る素晴らしい一日にするか、それが恋人たちの一番の関心事に違いない。プレゼントはその象徴だ。

麻衣子はハルに何を贈るべきか悩んでいた。ゴルフは共通の趣味。やっぱりゴルフに関する物にしたい。思いついたのはキャディバッグだった。

確か3年ほど使っているといった。扱いが乱暴なのでちょっと崩れてきた感もあり、そろそろ替え時かなとつぶやいていたのを覚えてる。

麻衣子は幾つかのショップを回り、悩んだ結果ひとつのバッグに絞った。

クリスマスイブの前日から、泊りがけでゴルフに行くことになっている。

多分午前中に仕事を切り上げて、昼過ぎに出発するはずだ。そのときにバッグを取りにくければいい。

どんな顔をするだろう？ハルは喜ぶだろうか、いや絶対に喜ぶ。

無邪気な笑顔を思い浮かべると、胸の底がぎゅっと絞られる感覚がした。

麻衣子の顔も自然とほころんだ。

あと1週間もすればクリスマス。カレンダーに目をやりながら、夫にはなんて言おうと

思っていた。カオリと2人で前日から宿泊でラウンドするからという言葉を

何度も反芻しながら、明日には切り出そうと決心していた。

ふと気がつくとテーブルの上に置かれた携帯が点滅している。開くと伝言が1件入っていた。

「この伝言聞いたら、折り返し電話くれる？」ハルからだった。

時間を見ると10分もたっていない。麻衣子のはやる気持ちで番号を押した。

「マイ？ごめんな。実はクリスマスの一泊ゴルフいけなくなった。仕事を押してて休めそうもないんだ。本当にごめん」

麻衣子は言葉に詰まった。急に回りの空気の温度が下がって冷たく感じた。

「もしもし？マイ？聞いてる？」

「・・・うん、仕事だったらしょうがないね。会うことだけでもできないの？」

その日が無理だったらその前後で」

「ちょっと難しいかな。それでさ、多分年末は早く休めるから、泊まりは無理だけど、29日、ゴルフに行こう」

「29日は大丈夫なの？」

「うん、それはなんとかするよ」

「わかった。残念だけでしょうがないね。クリスマスプレゼント、買ったんだけど、渡す時間もないよね」

「プレゼント？何？」

「キャディバッグ」

「おお、どんなやつ？」

「気に入るかなあ？どうしよう？大きいし、自宅に送ろうか？」

「うん、住所後でメールで連絡するから、自宅に送って。あっ、送り主はオレにしておいてよ」

「わかった」

電話を切るとため息がこぼれた。

大したことない、仕事だもん、しょうがない、と聞き分けの良い言葉で答えたものの、

なんで仕事なんだと理不尽なグチがでそうだった。

せつかく楽しみにしていたのにと遠足を前にして病気になった子供のように泣きたくなくなった。

キャディバッグだって、それを手にしたときのハルの喜ぶ顔が見たいのに、送ってしまったら

その大事な一瞬だつて見ることができない。送り主は自分にしてと言われたことも麻衣子の

神経に棘を刺した。それくらい自分だつてわきまえている、麻衣子の名前を送り主に

するわけにはないか、念を押すようにああやって口に出されると、麻衣子は少なからず傷つけられた気分になった。

次の日、麻衣子は久しぶりにサークルの掲示板を覗いた。

ラウンドのお誘いというトピックスに目をやる。トピをたてたのはミエというナースの女性だった。数人のやりとりがあったが2名しか集まっていなかった。ミエは誰かいませんか？と書いた後、「ハルさん、今度一緒に回ろうと約束したじゃないですかっ！一緒に行きましょうよ」と付け加えていた。

それに対してハルが答えていた。「今、仕事が忙しいんですけど、しょうがないなあ。

じゃあ、参加します！」

麻衣子は自分の目を疑った。一瞬、自分の見間違いではないだろうかと思った。

だがハンドルネールはハルと確かに書かれている。

ラウンド予定日は3日後だった。クリスマスイブではないが、麻衣子には忙しくて

会うことすらできないと言っていたのに、他の人とゴルフには行けるのか、それもどうして自分を誘うことすらしないんだ。

麻衣子は考えていくほど、心の底にあった小さな怒りが形になってくるのを感じた。

あんまりじゃない、と声にすら出ってしまった。

ハルの携帯を鳴らした。麻衣子が電話をかけることはほとんどない。緊急の用事だと分かるはず、そう思ったとおり、ハルはすぐに応えた。

「あのさ、掲示板見たんだけど」

「えっ？掲示板って」

「ミエさんがラウンド予定たてたじゃない。ハル行くの？」

「うん、携帯にもかかってきてさ、誘われたら断れなくて。ゴルフバカだから」

と苦笑気味な返答だった。

「それ、ひどくないっ!？」

「えっ？何が？」

「だって仕事が忙しくて私には会えないって言ってて、他の人とゴルフに行くなんてひどいよ。クリスマスだって仕事でキャンセルになったんだよ。ゴルフに行けるなら、私と会ってくれたっていいじゃない。」

麻衣子は自分の感情を止めることができなかった。声が上ずっているのを自分でも感じていた。感情が高ぶっているせいで、冷静になれと、頭のどこかで見据える自分もいる。

でもだめだった。いくつもの憤りがひとつの塊になってあふれ出ようとしていた。

ハルは黙り込んだ。

「ゴルフ行きたいなら、私と行ってくればいいじゃない。どうしてなの？」

ハルの沈黙は続いた。麻衣子は電話を握り締めたまま答えを待った。顔が見えない分、ハルがどんな表情をしているか分からず、その数十秒か数分に過ぎない沈黙の間、麻衣子はふと、自分はまた取り返しのつかないことをしてしまったのではないかと不安に襲われた。電話の向こうは深い暗闇で誰もいないのではないかと馬鹿な考えが思い浮かんだら声が聞こえた。

「分かったよ。ゴルフには行かないよ」

きっぱりとハルは答えた。平坦な口調だった。

「誰か別のヤツに頼むよ。それでいいだろう。じゃあ、まだ仕事があるから」

麻衣子は何と答えるべきか逡巡した。だが麻衣子の言葉を待たずに一方的に電話は切られてしまった。

麻衣子は携帯を手にしたまま、しばらく呆けたようにたたずんでいた。

中途半端な幕切れ、一方的な終わり方、悪かったねとかゴメンねとかそんな言葉があれば

麻衣子だって、いいのよ、と物分り良く応じることができただろう。なのにこの終わり方は

なんだろう？手を振りかざしたものの、行き場がなくなった手をもて

あますかのように、
麻衣子の心はすっきりと晴れなかった。

ハルはゴルフ好きだから、本当は他意もなく、ただゴルフがしたくて応じただけだったのかもしれないのに、頭から怒りをぶつけたのは、間違いだったのかもしれない。

さっきまでの怒りはとくに静まっていた。かわりに麻衣子の心には状況を何とか好転させたいというあせりが出てきた。

麻衣子はしばらくしてからメールを送った。

「さっきは怒ってゴメンね。ゴルフ行きたかったら行っていいよ」

返事には「もう他の人に代打で参加するよう頼んだから」と一言だけだった。

麻衣子は良かったと思う反面、何かに打ちのめされたようにも感じていた。

自分は正当なことを伝えたはずだ。何も間違ったことを言うてはいない。なのに

ハルの反応は、麻衣子の予想を裏切っていた。

ハルが謝って、麻衣子が許す、そのシナリオ通りには進まず、麻衣子がハルを責めただけで

後ろめたい気持ちにさせられてしまった。

やっぱり会わなくてはだめだ、麻衣子はずばやいた。

メールや電話では心が通じない。29日に会えるから、そのとき、2人で楽しく過ごして

お互いの気持ちを取り戻そう。

その年の12月は寒く、東京でも初雪を観測していた。ラウンドの1週間前から麻衣子は毎日、天気予報のチェックをしていた。

曇りマーク、雨マーク、雪マーク、一日ごとに予報は変わる。そのたびごとに心は一喜一憂するかのごとく上がったたり下がったりした。冬の雨はかなりきつい。雪は問題外。とにかくせめて曇りで一日持つて欲しい。

麻衣子は祈るような気持ちで過ごしていた。

当日、朝起きると、空はまだ暗くしんしんと冷え込んでいた。

ベッドから抜け出してテレビをつける。窓の外は真っ暗でまだ夜のしじまに包まれている。

天気予報は雪の予想をしていた。少し風も出ているようで窓の外の木の枝が揺れている。

舌打ちしたい気持ちだったが、麻衣子は出かける支度をはじめた。まだ雪は降っていない。とにかくゴルフ場まで行けば、その後中止になったとしてもハルに会える、それだけでもいい。会うこと、それが1番の目的だった。

その時、携帯のバイブが鳴った。ハルだった。ドアで遮られているとはいえ、夫は眠っている時間。人目をはばかるように声をひそめて話した。

「なんか雪みだいだよ」

「ゴルフ場クローズするのかなあ」

「わからないけど、積もるかもしれないし、やめよう」

「……そうね」

「オレ、これから寝るから。じゃあ」

それで会話は終わりだった。会いたいからこっちにこいよ、とか会いたいからどこかまで行くよ、とか心の底でそんな言葉が返ってくるのを期待していた。

今日会わなかったら、次に会えるのは来年になってしまう。前に会った時から2週間は経っていた。麻衣子はこみ上げてくるものを感じた。

同じ気持ちではないんだ。

急に鉛を飲み込んだような重たさが締め付けた。

ベッドに戻っても眠れるはずもなく、麻衣子はじっと身を横たえたまま携帯を握り締めていた。もしかしたら会いたいというメールが入るかもしれない。そんなかすかな希望など

打ち消すように携帯は沈黙したままだった。

「残念、逢いたかったのになあ」と涙マークをつけたメールを送った。

ハルからの返信はなかなかこなかった。

天気は予報どおり雪となった。積もるほどではないが、都内の道路

にも木々にもうつすらと
白っぽいもので化粧され、都会には珍しい風景となった。

重たい気分でももやる気がせず、ぼんやりと過ごしていた麻衣子の元ハルから
メールがきたのは夕方だった。

「こっちは雪が積もってるよ。今日は家にいて正解」

と笑顔のマークがついたメールが入った。

その画面をじっと見た。その裏には何か気持ちがあるだろうか？いや、そんな短い
言葉には何も感じるものなどかけらすらなかった。

逢いたい、逢いたい、逢いたい、でも気持ちは届かない。

麻衣子は目をつぶった。別に何か失ったわけでもない。
天気の良い日だからしょうがないじゃない。不可抗力というやつなんだから。

でもよりも寄って、今日雪がふらなくてもいいじゃないと誰にも
ぶつけられない憤り。

麻衣子の心はどんよりとした鈍色の空の色のようになり、晴れ晴れとし
なかつた。

そしてその気持ちを引きずったまま、新しい年を迎えようとしてい
た。

33 - 寂しいお正月

新しい年を迎えた。夫婦2人きりのお正月は、なんだか寂しく静かなものだ。

2人とも親は東京から離れたところで暮らしている。

麻衣子の父親は数年前に再婚した。あの頑固を絵にかいたような、一徹な父親が

70歳にして再婚をするとは驚きだった。相手は10歳下でずっと仕事を持ち

明るく、はきはきとした華やかな女性で、麻衣子の亡くなった母親とは180度違うタイプだ。女は男に従い家を守るべき、などと古い時代の家族観を押し出していた父親が

麻衣子が見たこともないほど相手の女性に気を使い、また彼女が父親にはつきりと物を言い、

大きな口を開けて笑う様をみて、最初は戸惑いもあったが、今は父親の面倒を見てくれる奇特的な女性だと感謝をしている。

あけっぴろげな性格だが、麻衣子には遠慮があるらしく、普段、特別なこと以外連絡してくることはない。麻衣子の兄も家を構え、それぞれが家族を持った格好になり、そして

自分の生活スタイルを守り、干渉しあわない不文律みたいなものが出てしまった。

簡単な正月らしい食事はつくり、夫と2人でお雑煮を食べる。

双方の親と年始の挨拶を電話ですませると、何もすることがない。テレビはつまらない正月用のお笑い芸人がでる番組ばかり。

それでも夫は、一日中、テレビのチャンネルを何度も回しながら、まるで根が生えたようにリビングのソファに寝転がっていた。

子供の頃のお正月はもつとにぎやかで騒々しいものだった。それに比べると、会話もなく、ただいたずらに時間が過ぎるのを待つようなお正月。

子供でもいればまた違った雰囲気なんだろうが、それは考えても仕方のないことだった。

ハルからは元旦にメールがきた。

「あけましておめでと。今年もよろしくな」

どこかのサイトが出したグリーティングメール。麻衣子も同じようなものを送っていた。

2人ともそれっきりで、その後メールが行き交うことはなかった。

ハルは家族と一緒に実家に滞在しているという。

そういう状況でメールをするのはばかれたし、彼も実家にいる間は家族のことに専念したいだろうと思っていた。

長くて退屈なお正月休みが終わり、夫を会社に送り出した4日。「明日ランチでもしよう」という誘いのメールがきた。

3週間ぶりになるのだろうか？こんなに長い間顔を合わせていないのは、付き合いだしてから

初めてのことだった。逢えると思うと、胸が高鳴る。麻衣子はその日はソワソワとした気分で過ごした。

待ち合わせに現れたハルは明るい笑顔だった。

「よっ おめでと〜」快活な声。

和食は飽きたからというハルとピザのランチにお茶を飲んでいると、夜、飲みに行こうと誘ってきた。今日は仕事初めで、挨拶だけで早く終るといふ。久しぶりの誘いにハルは積極的だった。

自分から何がいいかなあ、とつぶやきながら、お店を探し出し、夕方待ち合わせると築地のてんぷらやに麻衣子を連れて行った。

車えび、アナゴ、しいたけ・・・一つ一つ、麻衣子たちのお皿に揚げたてのてんぷらが

運ばれてくる。このときもハルは自分から話題を振りまいて、始終機嫌良く見えた。

「正月さ、ホームに行ったんだよ。それで高校生の子と一緒に組になったんだけど

それがめちゃくちゃ上手いんだ。あれぐらいの年からやってるとうまくなるよなあ」

「そんなに上手なの？」

「うん、オレが79でそいつは5オーバー。しびれたなあ。久しぶりにマジになった。

ゴルフがんばろうって気になったよ」

「79だってすごいじゃない？じゃあ、シングルになったの？」

「まだだめだよ。今度の月例で70台出せばなんとかかな・・・でも月例とかになると

だめなんだ。やっぱり良いスコアだそうとあせりがでるんだろうな。欲を出したらだめなんだよ。ゴルフって」

そう言うとハルは熱燗のお酒をぐいっと飲み干した。ほんのり目の淵が赤らんでる。

ハルはお酒をかなり飲むが、本当に強い人というのは赤くならず、どちらかというと

白っぽく青ざめると言う。だからハルは本当はお酒にそれほど強くはないのかなとも思う。

「私も早く100切りしたいよ」

「どうせならオレと一緒にのときに100切りして欲しいな」

麻衣子はハルを見た。目が麻衣子を包むようにやさしい。麻衣子の胸の奥に視線がそのまますくと入り込む。

やっぱりハルは変わらない、今までと同じだ。私たちは何も変わったことはなかったのだ、と安堵感に近い感情が沸いていた。

食事の後、銀座のショットバーでお酒を傾けていると、ふいにハルが話し出した。

「俺、正月にメールしなかったらどう？」

「.....?」

「あれ、わざとなんだ」

ハルの声は淡々としている。麻衣子はこの先、話がどう展開していくのか分からなかった。

だが理由を知りたい。

「どうということ?」

「ちよつと離れて考えてみようかなって思って。だからマイにメルしなかった。でも今日

会ったらやっぱりいい女だし可愛いなあって思った」

麻衣子はどう答えていいのか迷った。喜ぶべきなのだろうか、それともばかにしていると

声を荒げるべきなのだろうか。

これではハルの一方的な考えと思いに振り回された格好となっている。

麻衣子の気持ちを無視した、いや気持ちを考えることもしなかったのだらう。

どれだけ寂しい思いをしていたか、どれだけ不安だったか、その償いにもなりやしない。

ハルの心中には、何か屈託があつたのだろうか?だが麻衣子はそれを突き詰めたり

問いただすことが怖かった。争いを好まない麻衣子は自分が我慢すれば

すむことではないかと思つた。

少なくとも今ハルが麻衣子に執着心を持つてることだけは確かだ。

それだって愛情の

一種じゃないか・・・

「今日さ、このあたりのホテルとって泊まるよ」

そういうと、銀座にあるホテルを調べ、いきなり予約の電話をした。

ハルは自分の要求を満足させることとなると、積極的になる。

ゴルフも釣りもそして麻衣子も……

ゴルフも釣りも始めたてのころは夢中で仕事そっちのけで練習場にいたり、

山の中の渓流にいったという。

麻衣子のことだって知り合った頃は、辟易させるくらいメールや電話攻勢で麻衣子を

落とそうと必死だった。

欲しいものは手に入りたい、好きなことはひたすら夢中になって後先考えず、突っ走る。

それがハルなのだ。

そのホテルはヨーロッパにある小さなプチホテルを思わせた。

ハルは「この体を他の男には触らせたくない」と言いながら、麻衣子を執拗に責めて来た。

だが実際に挿入となると、途中で萎えてしまう。麻衣子が奉仕して、その時は大丈夫になっても挿入してしばらくたつとまただめになってしまった。

「ちょっと飲み過ぎたかなあ」

ハルはきまりが悪そうに下を向いた。

こんなときは知らない振りの方がいいだろうと思ひ、麻衣子は「そういうえば、結構飲んだね」と明るく答えた。

だがなんとなくきまらずい雰囲気が二人の間に流れていた。

どうやったたらこの場を取り直すことができるんだろつかと麻衣子は
途方に暮れた。

しかし時計の針は12時を指そうとしていた。

「泊まれよ」

「それは無理だよ。言い訳なんかできないもん」

慌てて身支度をする、ベッドの上で所在ない風にぼんやりしてい
るハルに言った。

「明日の朝、来てもいい？たぶん8時にはこれるよ。一緒に朝ごはん
食べよう」

「ああ、いいよ。そうだ、朝は元気なんだよ」

思わせぶりなことを言ってハルは苦笑いをした。

このまま立ち去ることは心残りだし、ハルを1人置いていくことが
辛かったが、
泊まることはできない。

麻衣子はまた明日逢えるからと、後ろ髪を引かれる思いで自分に言
い聞かせていた。

次の日の朝、出かけようとするに着信メールが入ってきた。

「朝、やらなきゃいけない仕事があったから、もう出ます」

麻衣子は携帯の画面を凝視した。体が重くなったようで、しばらく

たたずんでいた。

昨日、仕事なんて一言もいってなかった。朝ごはんと一緒に食べて、ハルを会社まで送り届ける心積もりだったのに、肩透かしにあったように、一瞬でそれが打ち砕かれた。

麻衣子は唇をかみ締めたまま、返事を出した。

「わかった。お仕事がんばってね」と笑顔マーク付の返信。

メールの笑顔とは裏腹に麻衣子の心は沈んでいった。バケツに落とされたインキのように

悲しい気持ちが滲んで広がっていく。

気持ちが膨らむと、その後に萎むようなできごとが起きる。それはその後も続くこととなった。

34 - 重なる不運

何かが目に見えて変化しているわけでもない。だがハルとの関係に小さな歪みのようなささくれがあるような気がしていた。

カオリから思いがけない相談を受けたのは、朝、ハルにメールを送ったのになかなか返事がこないことに少しいらついていた時だった。

「麻衣子、聞いてくれる？」

「どうしたの？ 渡辺さんと何かあったの？」

「うん、実は、彼、別居したんだ」

「ええっ！？ 本当なの？」

「まさかこんな展開になるなんて私も驚いてる。それで彼から別れを言われたの」

カオリの声は暗かった。その言葉の後に沈黙が続いたので麻衣子は涙ぐんでいるのかとさえ思った。

「大丈夫？ それは大変だったね。それから会ってないの？」

「別居する前にまた奥さんから電話がバンバンかかってきて、私のこと、めっちゃくちや言いたい放題、非難罵倒されたの。それにこの間は内容証明っていうの？ それが届いて、私も怖くなった。彼がこっとういうことになってこれ以上迷惑をかけるわけにもいかないから、

お互い別れようと言ったの。で、これから何を言われても知らない、関係ないって突っぱねってくれて」

「内容証明ってことは弁護士に相談したのかな？でも2人が付き合っていた証拠はないんでしょう？」

「うん、娘さんに見られたといってもそれはなんとか言い訳できるし、2人でホテルにいったとか、そういう証拠写真は無いみたい。彼の奥さんは憶測で私と浮気していると思ってる」

「じゃあ、今後、渡辺さんの言うとおり、知らないって言い張れば大丈夫なのね」

「多分……うちだってダンナに知られるのは困るもん。これ以上何も起こらなければいいと思う」

「そうだね。渡辺さんとはもう会わないほうがいいよ。今は危険な状態だから、2人がこれからも会って、それを知られたら本当に訴えられるかもしれない。こんな風になって大変だったけど、別れたほうがいい」

「でも彼、家を追い出されたんだって。1人暮らしなんてできるのかなあ。ただでさえお金がないのに、どうやって生活するんだろっ」

「カオリ、だめだよ。お金貸したり、面倒みてあげたりしたら。絶対にもう係わり合いにならないほうがいいよ」

「うん……そうだね」

カオリの声のトーンは低かった。麻衣子は世話好きで面倒見の良い

彼女だから、本来ならば嬉々として渡辺の世話を焼きそうだった。だが事は重大だ。これ以上2人が会ってることが露見したら、カオリの家庭も崩壊しそうだ。

「カオリ、本当にだめだよ。渡辺さんのこと、嫌いで別れるんじゃないから、心残りなこともあるかもしれない。でもカオリも結婚してるんだから、自分の家庭のことも考えなきゃ。ダンナさんとはこれからも一緒にやっていくつもりなんでしょう?」

「そりゃあ・・・もし離婚して彼と一緒にになったとしても、悲惨だよ。お金もないし、そんなリスクはいやだもん」

「じゃあ、きつぱり渡辺さんのことは忘れるようにした方がいいよ」
「うん・・・」

麻衣子の言うことにならずき、そうだね、分かったとは言うものはぎれが悪かった。

渡辺との別れが突然で、引き裂かれるような形であったことが、カオリに踏ん切りをつかせないのだろう。もう2度と会えないということであれば、最後に一目でも会って、納得のつく別れ方をしたいのかもしれない。だがこういう状況で会うことは危険すぎる。

麻衣子は電話機の向こうで沈んだ様子のカオリを慰めるように言った。

「気晴らしにゴルフでも行こう?ねっ!」

「そうだね・・・そういえばハルさんとはどうなってるの？」

「うん、仕事忙しいみたいで、今年になってからあまり会えないんだ。ゴルフもいけないみたい」

「そうなの？あれ？この間、私が入ってる別のサークルの女の子と話してたらハルさんのこと

知ってるって言ってたよ。一緒にラウンド行っただって」

「最近の話？」

「うん、一週間前。初めてそのラウンドで会ったんだって。話してて、名前が一緒だから

あれ〜って。麻衣子、聞いてなかったの？」

「うん」

「ごめん、何か悪いこと言っちゃったかな？でもゴルフだけだから」

「そうだね、別にいいよ」

麻衣子は気にしていない素振りで言い放ったが、内心はさざ波が立っていた。どうしてハルは

何も話してくれないんだろう。もしかしたら年末ハルが別の人とゴルフに行くことに、麻衣子が感情的に反応したことに起因しているのだろうか？だが正直に言ってくれば、麻衣子だって反対はしない・・・いや麻衣子はやっぱり気を悪くしただろう。

自分と会うより、他のイベントを優先するなんて、快い気持ちになんかなれない。

「麻衣子も別の人とラウンドいけばいいじゃん。別にハルさんにこだわることないよ」

「そうだね。じゃあ、カオリも一緒に行こう」

それから2人で日程とコースを相談したが、麻衣子の心の中のさざ波はなくなるどころか

段々大きな波になってきた。ハルは自分から離れようとしているのだろうか？そんなはずはない。あんなに熱い気持ちでぶつかっていたハルだ。あれほどいつも麻衣子を欲していたハルだ。そんなに簡単に気持ちがなくなるなんてあり得ない。

そう自分に言い聞かせながらも、心の中の海は荒れていた。ハルと会いたい、会えば自分の杞憂だったとすべての不安を消すことができる。

携帯を閉じるとメールが入っていた。ハルからだった。

「今朝、病院に行ってきたんだ。週末、息子とサッカーやって遊んだらどうも

足を捻挫したみたい。当分、不自由しそうだよ。悪いけど明日の約束は延期してくれ。

また連絡する」

捻挫……どの程度の痛みがあつてどのくらい不自由なのだろう？

心配な気持ちの裏にまた肩透かしになったようながっかりした気分になったことに気づき

麻衣子は自己嫌悪した。どうしてなんだろう。何か悪い歯車に巻き込まれていく気がする。

年末から自分の思いとハルの考えが微妙にすれ違っているようだ。

きちんとハルと向かい合うべきなのだろうか？素直に聞いてみるべきなのだろうか？

麻衣子は自問自答する。でもそこには答えはない。

麻衣子にとって誰かとぶつかり合うことは恐怖だ。幼いときから父親から厳しくしつけられ

女性とは控えめで慎ましくいるべきという姿を押し付けられたかもしれない。

だがそれによって弱きものとして男性に保護される形はそれほどいやではないのだ。

相手にぶつかって丸ごと自分をさらけだして、傷つけられることを考えたら

沈黙しているほうがいい。

次の日、麻衣子は気晴らしをしようと出かけた。元々ハルと会うために空けていた時間だ。

予定がなくなり、ぽっかりと手持ち無沙汰な自由な時間となったからだ。

ゴルフショップをのぞき、ウェアを物色する。外は冷たい風が吹き付けるのにお店の中は暖かい。飾ってある商品は春物だった。

暖かくなったらハルとの付き合いも1年経つことになる。

記念に海外に旅行しようとしてハルが言ったことを思い出す。現実には可能かどうかは別として

それを考えるだけで心が沸き立つからか、麻衣子の口元が想像でほころんだ。

デパートで食材を買い、デザートにケーキを買つと、麻衣子の両手

は荷物であふれた。

駅を出ると家までは10分ほど歩く。北風にさらされ、麻衣子の肩まで伸びた髪が風になびいた。身をすくめながら慌てて髪に手をやって整えると、小走りに走るように家に戻り、ドアを閉め一息ついた。

部屋に入り、荷物をテーブルに置き、コートを脱ぎ、ピアスはずそうと鏡の前で耳元に手をのばしたところで気がついた。

片方のピアスがない！それはハルからのプレゼントのピアスだった。

麻衣子の血が逆流して胸が大きくドキッと跳ねた。

慌てて洋服や部屋の床をしゃがみこんで調べた。廊下、玄関、台所、自分が立ち寄ったと思われる場所の床もすべてなめるように調べたが、麻衣子の期待を裏切るようにピアスは見つからない。

動悸は一層早くなり、頭の中が真っ白になった。どこで、落としたんだろう？

もう一度洋服に付いてないか、下着にもなって自分の体の隅々までくまなく探したが、

それでも見つからない。泣きそうになる気持ちを抑えて、何度も何度も床を調べた。

「ひどいよ……どうしてこんなことが……」

声を出して麻衣子は呪った。それは誰に対してということではなく、形ない何か自分とハルを

裂こうとする運命の力というものにかもしれなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0391d/>

サヨナラが言えない

2010年10月10日21時22分発行